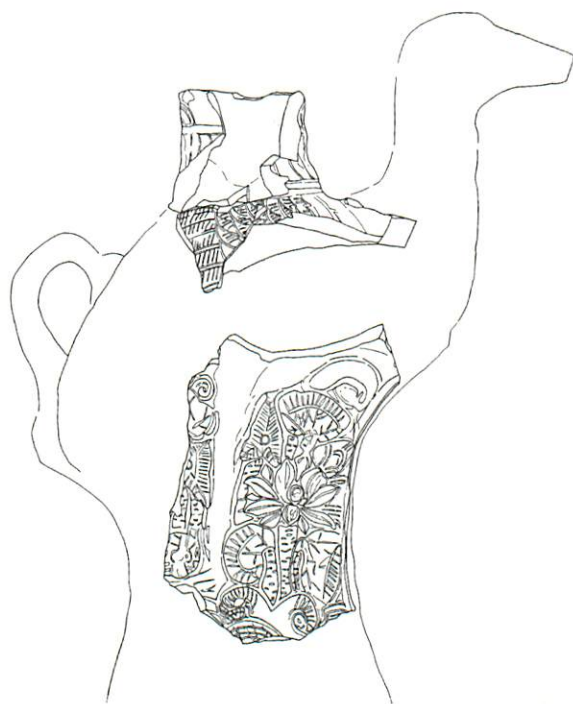


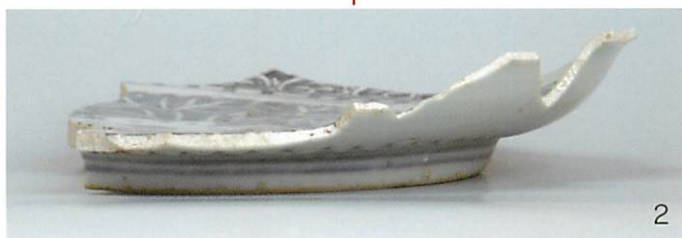
大友府内 6

～中世大友府内町跡第14次発掘調査報告書～



2003

大分市教育委員会





華南彩釉陶鶴形水注

序 文

本書は、平成13年度に共同住宅建築に伴って記録保存のために実施した中世大友府内町跡第14次調査の調査報告書であります。

大友氏は、鎌倉時代に豊後に入府して以来、一貫して豊後国の守護をつとめ、戦国時代の終わり頃まで、およそ320年余にわたって、豊後を中心に九州北部に大きな勢力を築きました。その大友氏の政治・経済・文化の中心地は豊後「府内」と呼ばれ、22代宗麟の頃には広く東アジアに拓き、町衆と諸外国の人と物を融合させた国際色豊かな都市として発展しました。

中世大友府内町には、天正16年の伊勢参宮帳に「ゑんはい」「けんさん」「ふくまん」「月山」などの中国人的な名がみえ、岡山県邑久町の餘慶寺梵鐘銘文では今小路町の寄贈者「慮高」「陽愛有」の明人2名、さらには、渡来系の漆喰職人である陳氏系図に伝える「覚明」・「義明」・「元明」の三代にわたる「豊後国府内住居」など、数多くの渡来人の姿が確認できます。

今回発掘調査を実施したところは、こうした渡来人の町と考えられる唐人町の一角にあたり、その実態の究明に期待が膨らんだところでありますが、残念ながら人名や出身国、性格などを特定できる考古学的な資料の発見はありませんでした。しかしながら、出土した華南三彩鶴形水注など中国や朝鮮からもたらされた多様な輸入陶磁器やガラス製品は、唐人町の形容の一端を表す資料として評価されるものと考えられますし、今後に繋げる成果とも言えるでありましょう。

本書が、学術研究はもとより、文化財の保護、さらには内外の文化交流の一助となることを希望するとともに、発掘調査の実施から報告書の上梓にいたるまで、ご理解とご協力をいただきました七王建築設計事務所ならびに関係各位に対しまして衷心より感謝申し上げます。

平成15年3月

大分市教育委員会

教育長 秦 政 博

例 言

1. 本書は、平成13年度に大分市教育委員会が、七王建築設計事務所の委託を受け実施した共同住宅の建設工事に伴う、埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査及び報告書作成の費用は、七王建築設計事務所が負担した。
3. 本書の執筆は、第Ⅰ章を池邨千太郎が、Ⅱ章・Ⅲ章・Ⅴ章を上野淳也が、Ⅳ章を埋文サポートシステムが担当した。また、出土遺物の整理については、森小百合(大分市教育委員会文化財課臨時職員)がおこなった。
4. 本書の編集は、池邨・上野がおこなった。
5. 発掘調査および調査における遺構の写真撮影は、池邨・上野がおこなった。
6. 遺構写真は、池邨がスライドフィルムからデジタルスキャニングをおこない、本書付属のCD-ROM(640MB)に収録している。
7. 遺物の写真撮影は、大分市教育委員会の委託を受け雅企画がデジタル写真撮影をおこなった。遺物写真は、本書付属のCD-ROM(640MB)に収録している。
8. 本書における遺構の実測・製図作業は、池邨・上野・柳田裕三(別府大学学生)がおこなった。
9. 本書における遺物の実測・製図作業は、一部を大分市教育委員会の委託を受け雅企画がおこない、その他を上野がおこなった。なお、拓本に関しては、森がおこなった。
10. 出土遺物、記録資料は、大分市文化財資料室(大分市荷揚町4-36)に収蔵・保管している。
11. 第80図に掲載した第11次調査区出土遺物に関しては、大分県教育委員会のご厚意により遺物の貸与を受けることができた。記して感謝を表します。
12. 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々に御指導・御助言をいただいた。

ガラスの成分に関しては、本田光子氏(別府大学文化財研究所)・志賀智史氏の御助言をいただいた。石製品の実測には萩幸二氏の御助力を得た。

また、遺物の実測・製図作業に関して、多くの御援助をいただいた。記して、感謝を表します。
荒倉貴子・伊賀円香・伊東祥子・内田順子・小野千恵美・小山田裕子・工藤雄実子・後藤好美・中山麻理子・飛高裕子・町田ユカリ・武藤由紀子

凡 例

1. 本書に用いた方位はすべて座標北(G. N.)である。また、基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系による。
2. 本書に用いた遺構略号は、SE：井戸遺構、SK：土坑遺構、SP：柱穴遺構、SX：性格不明遺構を表している。
3. 表書に用いた『府内古図』写真は、大分市歴史資料館からの提供を得た。また、『府内古図』の分類名称は、木村幾太郎氏の研究によっている。
4. 陶磁器の種別分類の内、青磁は森田勉氏¹、白磁は上田秀夫氏の分類²、中国産染付は小野正敏氏の分類³、備前焼は乗岡実氏の分類⁴、唐津焼は大橋康二氏の分類⁵をそれぞれ用い、それらの分類の変更箇所を日本貿易陶磁学会の活動に負った⁶。なお、華南彩釉陶の呼称は、亀井明德氏の研究⁷によった。瓦のコビキBの分類呼称は森田克行氏の研究によった⁸。
5. 本書における時期表記方法に関しては、世紀を初頭・前葉・中葉・後葉・末葉の5区分で表記する。また、必要に応じて、四半世紀表記をおこなう。
6. 今回、遺跡名称として用いた「中世大友府内町」は、国指定遺跡「大友氏館跡」を含まない都市遺跡部分を指し、「中世大友城下町」は、「大友氏館跡」を含んだ遺跡総称として、県の周知遺跡に登録されている。また、古来は、「府中」・「府内」と呼称されるもので「府内町」というのは、現代学術用語である。

目 次

第Ⅰ章	はじめに	1
	1. 調査にいたる経過	1
	2. 調査組織	1
第Ⅱ章	歴史的環境	2
	1. 豊後府内の歴史	2
	2. 唐人町について	6
第Ⅲ章	調査報告	7
	1. 井戸遺構	9
	2. 土坑遺構	37
	3. 柱穴遺構	65
	4. 表土(SX004)出土遺物	72
	5. 特殊遺物	73
	①銅銭について	73
	②ガラス製品について	73
	③繭形分銅について	73
	④骨製品について	73
第Ⅳ章	土壌分析	76
第Ⅴ章	考 察	81
	1. 遺物について	81
	(1)陶磁器について	81
	①出土中国産陶磁器の分類	81
	②器種組成について	81
	③威信財について	86
	④唐津系陶器・コビキB調整瓦の位置付けについて	87
	⑤遺構間接合に見る空間分析	88
	⑥年代的位置付け	91
	(2)土師器について	95
	①土師器の組成と年代観	95
第Ⅵ章	ま と め	99
	1. 世界史の中の豊後府内	99
	2. 国際港市都市府内	99
	3. 豊後府内の唐人町	100

写 真 図 版 目 次

巻頭カラー図版1	1. 漳州窯系染付瓶	2. 中国産染付大皿	3. 繭形分銅
	4. 骨牌	5. ガラス製品	
巻頭カラー図版2	華南彩釉陶鶴形水注		
写真図版1	『府内古図』(B類)		3

插图目次

第1図	周辺主要遺跡分布図(1/25,000)	4
第2図	調査区位置図(府内復元想定図)	5
第3図	土層柱状模式図	7
第4図	調査区グリッド図(1/200)	7
第5図	遺構配置図(1/80)	8
第6図	SE100系列遺構実測図(1/30)	10
第7図	SE100系列(SE100)出土遺物実測図①(1/3)	11
第8図	SE100系列(SE100・SE112・SE128)出土遺物実測図②(1/3)	12
第9図	SE230系列遺構実測図(1/30)	14
第10図	SE230系列(SE230・SE238)出土遺物実測図(1/3)	15
第11図	SE240/SE250系列遺構実測図(1/30)	17
第12図	SE240系列(SE240)出土遺物実測図①(1/3)	18
第13図	SE240系列(SE240)出土遺物実測図②(1/3)	19
第14図	SE240系列(SE240)出土遺物実測図③(1/3)	20
第15図	SE240系列(SE240)出土遺物実測図④(1/3)	21
第16図	SE240系列(SE240)出土遺物実測図⑤(1/3)	22
第17図	SE240系列(SE240)出土遺物実測図⑥(1/3)	23
第18図	SE240系列(SE240・SE249)出土遺物実測図⑦(1/3)	24
第19図	SE250系列(SE250・SE251・SE255)出土遺物実測図①(1/3)	26
第20図	SE250系列(SE250)出土遺物実測図②(1/3)	27
第21図	SE260系列遺構実測図(1/30)	28
第22図	SE260系列(SE260)出土遺物実測図①(1/3)	29
第23図	SE260系列(SE260)出土遺物実測図②(1/3)	30
第24図	SE260系列(SE261)出土遺物実測図③(1/3)	31
第25図	SE260系列(SE261)出土遺物実測図④(1/3)	32
第26図	SE260系列(SE263)出土遺物実測図⑤(1/3)	33
第27図	SE270系列(SE270・SE312)出土遺物実測図①(1/3)	35
第28図	SE270系列(SE312)出土遺物実測図②(1/3)	36
第29図	SX121遺構実測図(1/20)	38
第30図	SX121出土遺物実測図①(1/3)	38
第31図	SX121出土遺物実測図②(1/3)	39
第32図	SX121出土遺物実測図③(1/3)	40
第33図	SK106出土遺物実測図(1/3)	42
第34図	SK134出土遺物実測図(1/3)	42
第35図	SK136遺構実測図(1/20)	42
第36図	SK136出土遺物実測図(1/3)	42
第37図	SK137遺構実測図(1/20)	42
第38図	SK137出土遺物実測図(1/3)	42
第39図	SK145出土遺物実測図(1/3)	42
第40図	SK150遺構実測図(1/20)	42
第41図	SK150出土遺物実測図(1/3)	42
第42図	SX203遺構実測図(1/3)	43
第43図	SX203出土遺物実測図(1/3)	43

第44図	SX204遺構実測図(1/3)	43
第45図	SX204出土遺物実測図(1/3)	43
第46図	SK220遺構実測図(1/20)	45
第47図	SK220出土遺物実測図(1/3)	45
第48図	SX234出土遺物実測図(1/3)	46
第49図	SK237遺構実測図(1/20)	46
第50図	SK237出土遺物実測図(1/3)	46
第51図	SX272遺構実測図(1/20)	46
第52図	SK275遺構実測図(1/20)	47
第53図	SK275出土遺物実測図(1/3)	48
第54図	SK287遺構実測図(1/20)	49
第55図	SK278/SK286/SK287/SK289/SK313出土遺物実測図(1/3)	50
第56図	SX331遺構実測図(1/20)	51
第57図	SX331出土遺物実測図(1/3)	52
第58図	SK335/SK336出土遺物実測図(1/3)	53
第59図	SX341遺構実測図(1/20)	54
第60図	SX341出土遺物実測図(1/3)	55
第61図	SK375遺構実測図(1/20)	56
第62図	SK345/SX351/SK358/SX367/SK375/SK381/SX383/SK391/SK396 出土遺物実測図(1/3)	57
第63図	SX399遺構実測図(1/20)	58
第64図	SX399出土遺物実測図①(1/3)	59
第65図	SX399出土遺物実測図②(1/3)	60
第66図	SK403/SK407/SK408出土遺物実測図(1/3)	62
第67図	SX417遺構実測図(1/20)	63
第68図	SK414/SK416/SX417/SX426出土遺物実測図(1/3)	64
第69図	SX429/SX446出土遺物実測図(1/3)	65
第70図	柱穴遺構実測図(1/40)	67
第71図	柱穴遺構出土遺物実測図①(1/3)	68
第72図	柱穴遺構出土遺物実測図②(1/3)	69
第73図	SX004出土遺物実測図①(1/3)	71
第74図	SX004出土遺物実測図②(1/3)	72
第75図	銅銭拓本(1/1)／ガラス製品実測図(1/1)	74
第76図	繭形分銅実測図(1/1)／骨牌実測図(1/1)	74
第77図	貿易陶磁器口縁部形態分類表①(唐人町案)	82
第78図	陶磁器における器種組成表①	84
第79図	陶磁器における器種組成表②	85
第80図	華南彩釉陶鶴形水注復元想定図	86
第81図	中国産青磁酒海壺復元想定図	87
第82図	遺構間接合遺構分布一覧図	89
第83図	遺構間接合関係図	90
第84図	遺構性格別遺構間接合状況一覧図	90
第85図	貿易陶磁器口縁部形態分類表②(Witte leeuw号案)	91
第86図	遺跡間年代対応表	94
第87図	大友氏館跡第6次・第10次調査区出土土師器基本層序対応表	96
第88図	唐人町出土土師器対応表	98

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成11年4月にマンション建設の事前調査のために業者から派遣申請書が提出された。開発地点が、中世大友府内町跡の周知遺跡の範囲に入っており開発者側との遺跡の取り扱いについて協議が必要となった。

開発地点は、「大分市史」に掲載されている『戦国時代の府内復元想定図』によると、国指定史跡大友氏館跡の北東隅に想定される場所であり、大友氏館跡の東側を南北に貫く南北大路に面している唐人町に該当する場所で、その東面は称名寺と対面して非常に重要な位置にあった。

このため、遺跡の取り扱いについては慎重を要すことになり、開発業者と協議を重ねた。開発者側の意向としては、開発を進める方向でマンションの基礎の見直しをおこなうことになった。設計変更をおこなった結果、調査面積を104㎡に絞ることができた。

さらに調査にあたっては、廃土の処理、水の確保、現場事務所等の協議もおこなった。

こうした経過を経て、中世府内町跡第14次調査の発掘調査は平成13年4月23日に開始し、平成13年10月18日をもって終了した。

2. 調査組織

調査主体 大分市教育委員会

教 育 長 御沓 義則
秦 政博(平成14年5月より)

事 務 局 大分市教育委員会

文化財課	課 長	帯刀 修一
	主 幹	玉永 光洋(平成14年度より参事)
	課 長 補 佐	讃岐 和夫、熊谷 一秋
	指 導 主 事	後藤 典幸、甲斐 猛(平成14年度より歴史資料館)
		姫野 公德
	主 任	幸 裕美
	主 任 技 師	塔鼻 光司(平成14年度より専門員)、坪根 伸也、池邇千太郎
		塩地 潤一
	技 師	高畠 豊、河野 史郎、中西 武尚(平成14年度に歴史資料館より)
	主 事	永松 正大、三浦 亜紀、佐藤 道文(平成14年度より)
	嘱 託 職 員	杉崎 重臣、荻 幸二、宮田 剛、奥村 義貴、刈谷 史穂
		羽田野達郎、上野 淳也、梅田 昭宏、佐藤 孝則、松竹 智之
		松尾 聡、小住 武史、羽田野裕之、水町 裕子
	発掘作業員	安部 弘明、伊賀 円香、井野和歌子、加藤 芳男、神田 幸人
		小村 知治、後藤 好美、後藤 春美、柴田アイ子、大東 行雄
		寺尾 悦子、利光 克寛、長野 瑞恵、二宮 要、橋本 弘
		姫野美智子、広岡サヨ子、広瀬 育子、深津イツ子、藤澤紗智子
		牧 隆志、町田ユカリ、森田 秀夫、柳田 裕三

第Ⅱ章 歴史的環境

1. 豊後府内の歴史

平成15年現在、大分市は、44万人の人口を抱え、東九州域における中核的都市として機能を果たしている。その大分市では、平成7年度より都市機能の充実を目指し、駅高架事業と駅南地区の下水道施設や道路網の充実を始めとした区画整理事業を基幹とする駅周辺総合整備事業を展開している。現在、その都市計画に基づいた事前発掘調査が実施されているが、前述の駅周辺エリア東部に関しては、中世大友府内町跡の存在が周知されていた。

中世大友府内町跡は、遺跡名称が示す通り、中世を一貫して豊後国を支配した大友氏の領国経営の拠点とされた町である。平成8年度に、第1次調査が開始され、平成14年度現在、第24次調査にまで調査次数が達し、調査の進展に伴い、過去における町作りに関する様々な事実が判明してきている。

豊後府内の起源を理解するには、古代における国府域の変遷を把握することが肝要である。全国的に見ても国府という地名が、「府中」や「府内」という地名に移行する例が多数見られる⁹。中世豊後府内町跡の南西部に所在する古国府（文和4(1355)年初見）・羽屋地区、そして、上野台地一帯は、国府推定エリアに当たる¹⁰。エリア内には、印鑰社を擁し、その西部にあたる羽屋井戸・羽屋園遺跡からは7世紀後半～8世紀初頭の大規模な掘立柱建物や倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構群が展開する可能性が指摘されている。上野台地一帯に関しても、9世紀前後に帰属する同様の遺構群が確認されており、また、文献史学の成果において平安時代の終わりには「高国府」（天喜元(1053)年初見）と呼称されていたことが指摘されている。単弁軒丸瓦の出土する上野廃寺や、元町・岩屋寺の磨崖仏の存在も、その記述を支持するものであると考えられる。国府の中核部が、古国府から高国府へと次第に北へと遷移したようにもとれる。国府を都市史の中に積極的に位置付けてゆく上でも典型的な事例となろう¹¹。

中世大友府内町跡の立地は、これら国府域の縁辺に当たり、大分川を挟み対岸には郡衙推定エリアである下郡遺跡が展開している。この大分川下流域西岸は、国府域の存在から、大分川上流からの物資集積地として国府津ともいうべき機能をはたしたものと考えられ、発生論的には、これに伴う「河原市」・「市町」の発生が、中世都市としての府内の起源として語られることが多い¹²。都市法の制定も都市と認定する上で重要なファクターであるが、大友氏は、入国以前の仁治3(1242)年に、すでに都市に対する禁制である『新御成敗』を、寛元2年にはその『追加』の計44ヶ条を制定しており、この頃すでに「府内」が都市法の対象、すなわち「都市」として認識されていたことが指摘できる。また、自給率の低い都市の成立には、供給地としての農村・工村の存在が必要不可欠で、その対象として下郡遺跡群や大道条里遺跡、玉沢条里遺跡等の周辺の集落・生産地遺跡の存在を相対的に位置付けてゆかなければならない。

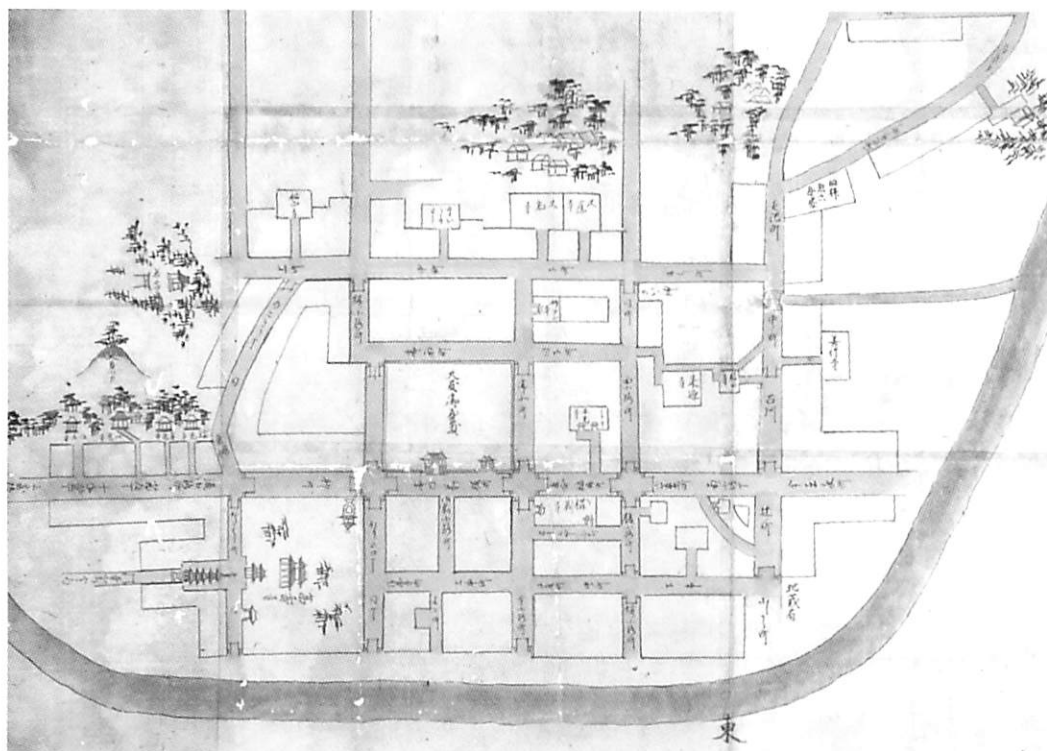
中世都市としての「府内」の発展に関しては、五山十刹に数えられる蔭山万寿寺の創建(1306年)の後に、境内町¹³が発展したことが、その画期として考えられるが¹⁴、現状では、創建に遅れる14世紀後半以降にならないと遺構の広がりや計画性は把握できていない。中世前期における寺内町の発展は、やはり寺院間における宗教的主従関係を根源として、物資の集積がおこなわれたと考えられ、豊後国内に止まらない広域物流ネットワークが、この時期に形成されたものと考えられる。

大分市には、16世紀の中世豊後府内の景観を伝える『府内古図』が存在している(第1図参照)¹⁵。勿論、このような絵画資料に関しては、景観年代と製作年代の差異を考慮しなければならないが、発掘調査の進展により、その『府内古図』景観が、戦国時代でも16世紀後半頃の景観を伝えるものであることが実証されつつある。『府内古図』を概観すると、まずもって認識させられるのが、直線的な道路網であり、街区である。この直線的な町造りは、いうまでもなく極めて計画的なものであり、文字通り「町割り」、すなわち、区画整理事業がおこなわれていたことが推察できる。実際、埋蔵遺構を調査すると、16世紀に帰属する遺構群に関しては、方位・時期ともに一致し、区画性が認められる巨大な溝跡・道路跡が確認される。また、それらの区画性を有する遺構は、幾重にも改修が施され、大小の規模も多

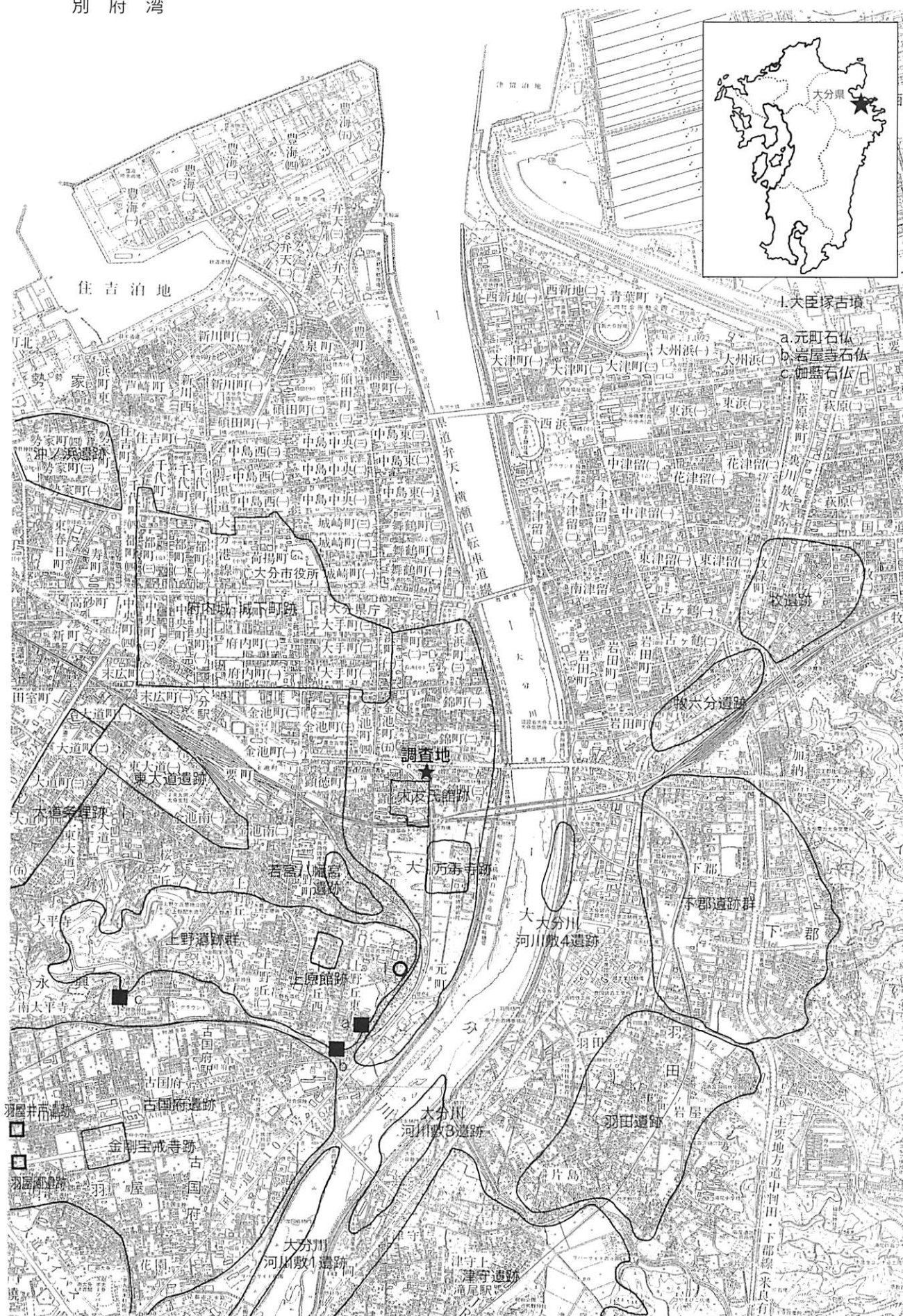
様に変遷していることが把握されつつある。

『大分市史』¹⁶における『府内古図』と明治初頭の地籍図を組み合わせた町割りの復元案である『戦国時代の府内復元想定図』を参照すると(第2図参照)、南北路には、二つの方位軸が存在することが認識される。ひとつは万寿寺から伸びる市町筋ともいべき南北路(南北路1)、もうひとつは大友氏館跡の東西両面を挟む2本(南北路2・南北路3)とその西側に併行する南北路(南北路4)の2方位である¹⁷。それぞれ、万寿寺・大友館の敷地及び区画に沿った町割りが展開している可能性が高いため、前者の方位を万寿寺主導の町割、後者の方位を大友氏主導の町割と捉えることができる。前者が概ねN-10°-E、後者が概ねN-5°-Eを測り、万寿寺から大友氏主導へという府内の成り立ちを考えると、東から西へと、すなわち、大分川に沿う南北路1から、大友氏館跡を囲う南北路4側へと開発が進んでいったことが推察される¹⁸。16世紀には、後者の京都を意識したといわれるN-5°-Eのグリッドプラン(grid plan)が成立していたと考えられ¹⁹、現代において復元想定が試みられているのも、この16世紀の府内の姿である。よって、一之大路に沿って展開するN-10°-Eグリッドプランの都市空間は、前者の名残を留めたものであると考えられる。確かに14世紀後半～15世紀における溝状遺構などの区画方位を示すような大型の遺構は、南北路1側でも万寿寺周辺に集中し、当初は、N-10°-Eの大分川・別府湾岸に沿う水際線に併行する都市空間が構成されていたと推定される。

以上のことから、予察の域を脱しないが、16世紀の府内町は大まかに2つのグリッドプランの複合から成り立っていたと思われる。この二重性は、以下のことを示すと考えられる。すなわち、旧グリッドプラン(N-10°-E)には商業地が、新グリッドプラン(N-5°-E)には政治的・宗教的施設を中心として成り立っていたことである。これは、府内という都市の二元性、そして重層性をも示すものであるともとれ、おそらくは、16世紀に優先的かつ計画的に市街化を図る地域であったのが新グリッドプラン区域で、未だ市街化・区画整理の調整の場であったのが旧グリッドプラン区域であったと考えられる。或いは、16世紀に入って初めて大規模な遺構群が展開する新規グリッドプランに対して、14世紀後半からの町の歴史を持つ旧グリッドプランに関しては、自然地形にそった旧プランの方が土地の使用効率的に良好であったため維持されたものと思われる。それらを巧みに取り込み秩序付け、計画的に用途地域を定めることのできる権力が、宗教的権威である万寿寺と、政治的権威である大友氏であったと考えられるのである。



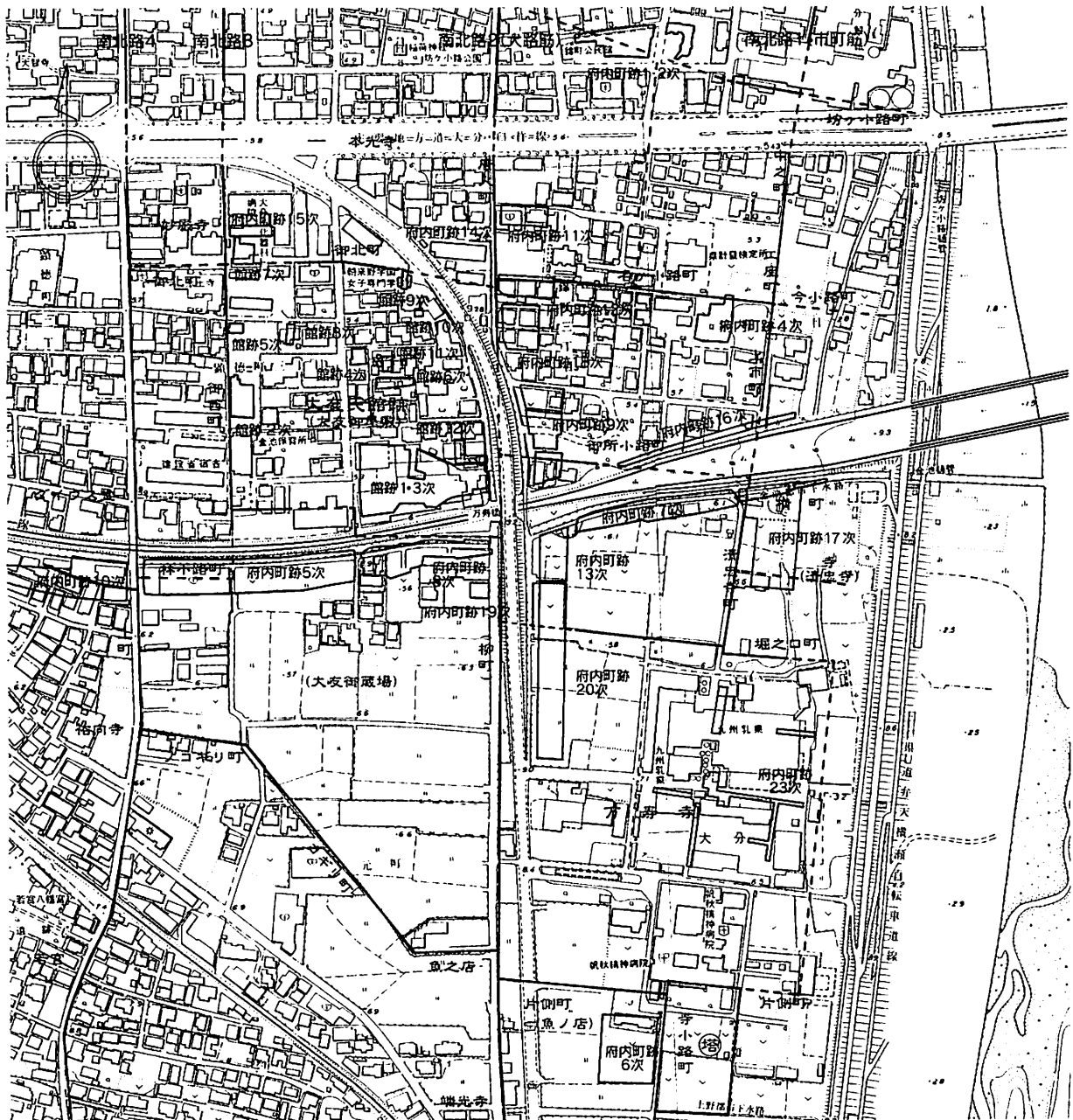
写真図版1 『府内古図』(B類)



第1図 周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

都市である条件としては、考古学・社会学・歴史学等の人文・社会学者が様々な定義付けをおこなっているが、このグリッドプランに代表される「都市計画性」を都市化の重要な一要素とする研究者は多い。また、都市化の重要な要素として「人口の過密化」が挙げられるが、居住性改善の反映としての区画整理や法の整備であり、道路・排水施設の整備・改修が、中世の世においても公共事業的におこなわれたものと考えられる。

豊後府内は、①大友領国内における政治都市、②南蛮交易港としての国際性をもった経済・港湾都市、③臨済宗の万寿寺をはじめとした伝統的宗教権威(門前都市)や新興のキリスト教を擁する宗教都市、そして、④それらに付随或いは結果として芽生えた文化都市としての側面など、この複合性は、府内の首都性への峻険を示すものであると考えられる。西洋の大航海時代に接した都市は、それまでの一般的な日本中世都市からの脱却を模索していたのではないだろうか。都市を論ずる上で豊後府内の16世紀におけるこの顕著な発展は、大航海時代における極東地域の典型的な前近代的(early modern或いはpre modern)例となるものであり、世界的な視野で見渡したときにアジアの都市として貴重な範例となるものであることは間違いない。



第2図 調査区位置図 (府内復元想定図)(1/5,000)

2. 唐人町について

当調査区は、「戦国時代の府内復元想定図」において、唐人町に比定されている地点である。明治初頭の地籍図を合わせて考慮すると、調査区東側を間口として称名寺と対峙していたことが想定される。すなわち、東西を長軸に東側を間口として短冊状に地割が施されていた点が想定される。当調査区は、その短冊状地割のほぼ中央に位置する。「想定図」に基づき、今回の調査区周辺を拡大したものが、第2図である。

文献にあらわれる唐人町としては、『伊勢参宮帳』が知られる。以下、『伊勢参宮帳』の唐人町関連の記載のみを抜き出した²⁰。記載を見ると、唐人町の住人が、天正17(1589)年と天正19(1591)年の二カ年に参宮していることが確認される。

天正十七年三月十三日

豊後符中衆六人 たう人まち

ゑんはい同與三郎殿 けんさん同新四郎殿
ゐなり町石井新次郎殿

天正十七年卯月一日

豊後大分郡符内来迎寺宗純

とうちん町
伯井善助殿

天正十九年二月三日

いなりまちしゆ 六人
、豊後符中 唐人まちしゆ 二人

喜衛門殿 傳左衛門殿 吉衛門殿 新大郎殿、 彦三郎殿宗權左衛門殿
又唐人まちのしゆふくまん かけゆ殿

天正十九年卯月七日

、豊後符中櫻町 同唐人町四人つれ

月山櫻町吉田彌四郎殿 善周坊
渡邊彦四郎殿

以上の様に、当時の唐人町の住人たちは、自分達の住んでいる所を「府中」或いは「府内」と認識し、更に細かい場所の指定に「町」という小区分を用いていることが分かる。本文中には、「ゑんはい」、「けんさん」、「ふくまん」、「月山」といった人名が確認される。この名前の表記が平仮名であることは注目に値し、唐人町の住人に純日本系の名前とそうでないものが混在する事実は唐人町の国際性を反映するものであろう。

また、同史料は、天正15(1587)年～16(1588)年の島津侵攻直後、短期間の内にすでに唐人町が復興していた可能性を示すものでもある。

第Ⅲ章 調査報告

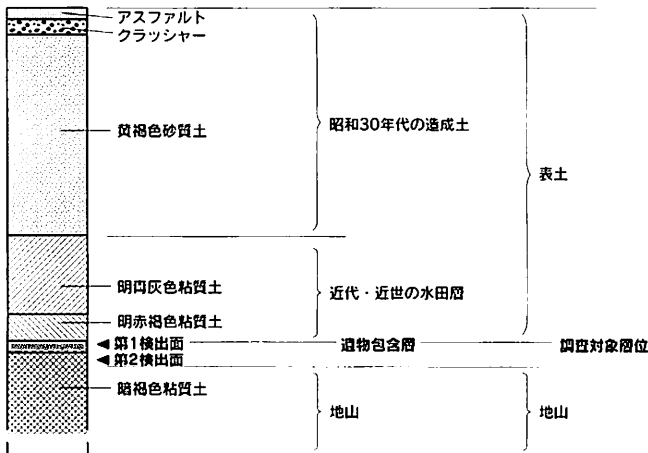
当調査は、集合住宅建設に伴い実施した。調査区は、大分川の西岸に位置し、『大分市史』における「戦国時代の府内復元想定図」において、「唐人町」比定エリア内に位置する。

調査面積は、104㎡を測る。遺構検出面は、現地表面(標高5.6m)から、1m程の厚みを持つ昭和30年代の造成土と、0.4m程の近世・近代の水田層を除去した後、標高4.2m付近において第1検出面が確認される。遺構検出面としては、戦国期の第1面と古代の第2面、計2面が存在する(第3図参照)。遺構検出面第1面に関しては、近世における水田開墾時に削平を受けたものと考えられ、本来、複数面の遺構検出面が同一面において検出されている可能性がある。

第1面は、戦国時代の整地層に形成される。整地層は、僅か10cm程の厚みしかもたないが、16世紀代の遺物を包含する。従って、第1面は、ほぼ16世紀代をカバーする時間幅を持つと考えられる。

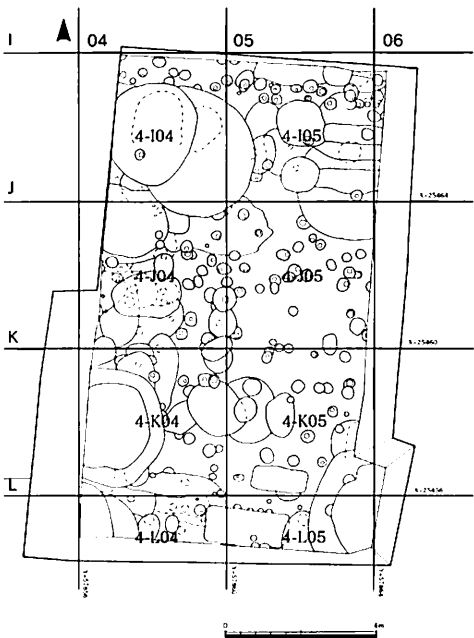
当調査において検出された遺構の大半は、第1面に帰属する。検出された遺構の種類としては、井戸遺構、柱穴遺構、長土坑、土坑、性格不明土坑などが挙げられる。また、これらの遺構の分布状況には、遺構の密度に差が認められる。

本章においては、遺構の調査状況を遺構種類別に報告する。

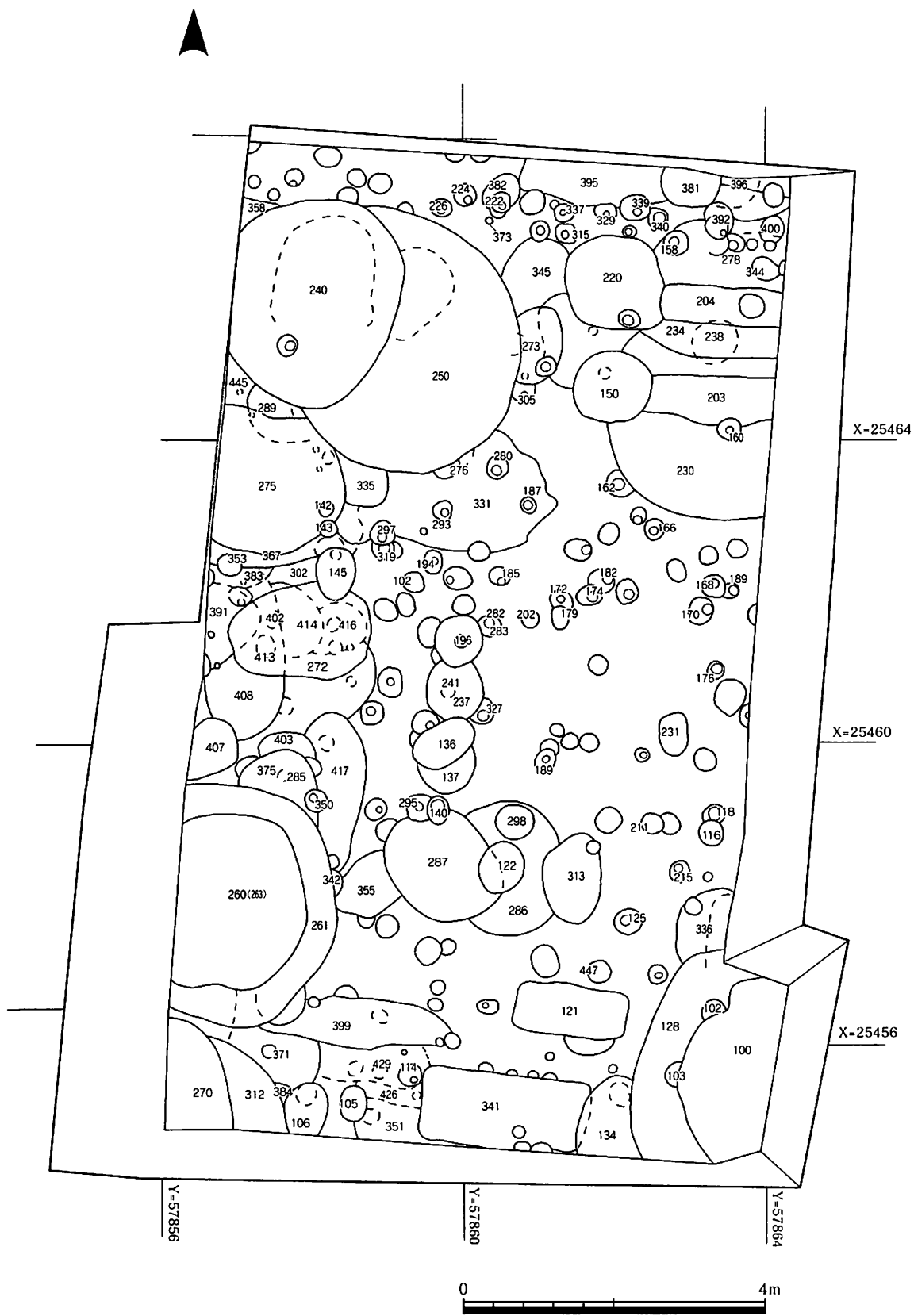


第3図 土層柱状模式図

図郭番号Ⅱ-JF・14-3・5-4



第4図 調査区グリッド図(1/200)



第5図 遺構配置図(1/80)

1. 井戸遺構

当調査区においては、僅か104㎡の調査区内で6基もの井戸遺構が確認されている。この井戸遺構の過密性は、都市遺跡に特有の遺構形成状況であるといえる。また、中央部東側、4-J05グリッド南半と4-K05グリッド北半を避けるように、井戸遺構の配置がなされている点は注目に値する。この遺構配置は、建造物を避けた結果としての遺構配置であると推定されるためである。

井戸遺構に関しては、その埋没状況に関しても注目すべき現象が把握されている。6基の井戸遺構の内、5基に関しては、井戸廃絶時に井戸枠等を除去した後、念入りに埋め戻される傾向にある。勿論、すべての井戸遺構に当てはまる所見ではないが、この念入りの埋め戻し行為は、人間の入転出が多い都市遺跡の特性であると考えられる。即ち、都市遺跡における過密状況の結果として、遺構廃絶後に、間断無く、土地の再利用が成される結果である。次期入居者等による建物プラン変更など、土地利用状況の変更にともなう地盤安定のための土木行為である可能性や、新規井戸の掘削に伴う廃土の処分の対象として、或いは慢性的な都市の悩みの種であるゴミの処分に利用されたものと考えられる。

因みに、今回の調査においては、井戸廃棄に伴う井戸祭祀は確認されていない。

遺構の廃絶に関しては、土地利用者の転出入や戦火、区画整理等を考慮すべきであるが、井戸遺構においては、施設の老朽化も考慮の対象に加えなければならない。

当調査においては、単体の井戸遺構に複数の遺構番号を付している。その所以は、平面プランと層位学的調査に基づくものである。即ち、遺構番号の差異は、井戸遺構の形成過程の段階差を表すものである。井戸遺構に付された遺構番号は、(新)廃絶時→機能時→井戸掘削時(旧)の時間差を表す。

なお、1遺構に複数の遺構番号が付されているため、便宜上、一つの遺構には、廃絶時の番号系列から一単位として報告をおこなう。

SE100系列

廃絶に関しては、掘り返しをおこない、井戸廃絶時に井戸枠等を除去した後、念入りに埋め戻されているようである(第6図参照)。

SE100(廃絶時)

採水坑の埋め戻し時、もしくは後の沈み込み時に真砂土が補填されている。

第7・8図1～11は、遺構廃絶時に混入した遺物群である。

1は、京都系土師器皿である。法量は、復元口径10.1cm／器高2.0cmを測る。

2は、手捏ね成形による焼塩壺で、復元口径7.5cmを測る。

3は、中国産染付皿である。小野分類において染付皿B-1群に分類されているもので復元口径9.1cmを測る。4は、中国産染付皿である。小野分類において染付皿E群に分類されているもので復元口径10.8cmを測る。口縁部内面に、四方禪文が施されている。5は、中国産染付の大皿で復元底径15.8cmを測る。

6は、中国産白磁筒形碗で、口縁部外面に二重沈線が施されている。上田分類白磁D群に該当するものであろうか。

7は、中国産青磁壺である。酒海壺と称される大形の壺の肩部分に該当すると考えられる。

8は、瓦質土器火鉢である。復元底径44.0cmを測る。

9～11は、備前産焼締陶器播鉢である。それぞれ、9は、復元口径30.4cmを測り、10は、復元底径12.8cmを測る。いずれも交叉播り目が施されるものである。

S112(機能時)

採水坑底の壁面を、サンワ土で固め補強した痕跡が確認されている。遺構最下面において遺物が検出されているが、廃絶時の流入品である可能性も否定できない。

第8図12～16は、遺構最下面において検出された遺物群である。

12は、京都系土師器小皿である。法量は、復元口径8.2cm／器高2.0cmを測る。

13は、中国産白磁皿で、上田分類において白磁E群に分類されているもので、復元口径10.0cmを測

る。

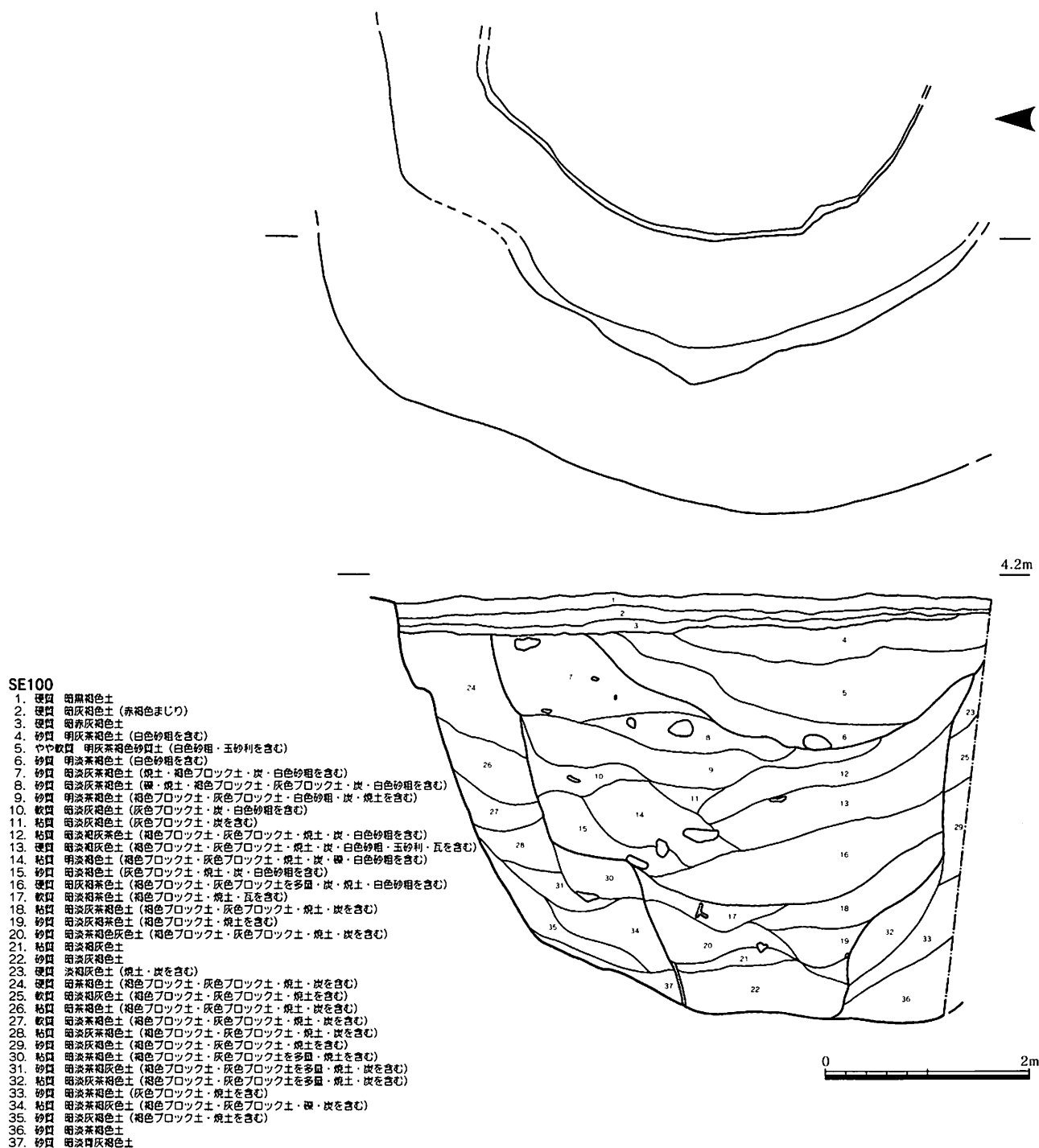
14は、備前産焼締陶器短徑壺で、復元口径10.0cmを測る。15・16は、備前産焼締陶器挿鉢である。15は復元口径29.8cmを測る。両者共に、交叉挿り目が施されるものである。

S128(掘削時)

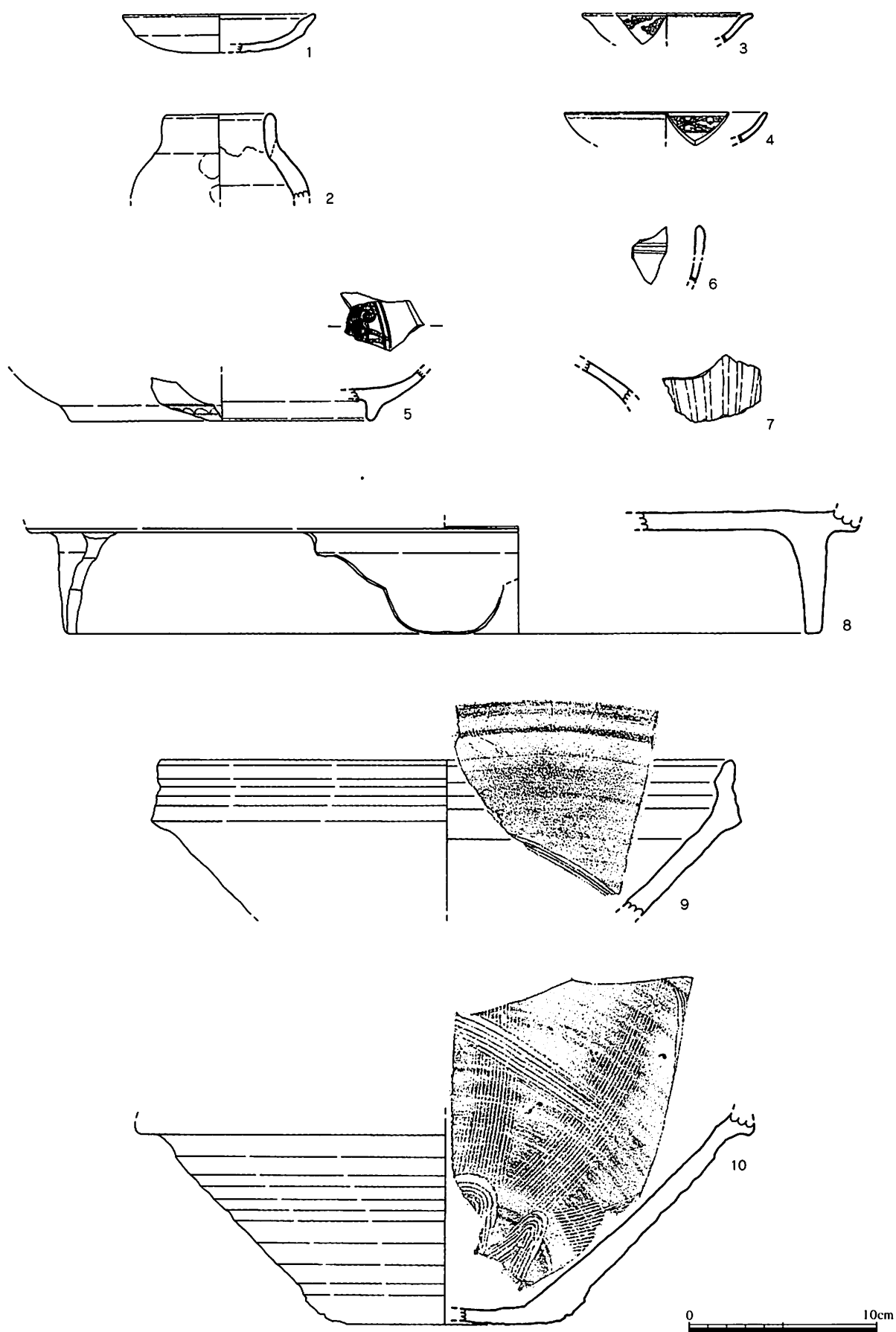
第8図17・18は、掘り方出土の遺物群である。

17は、中国産青磁碗で森田分類においてB-IV類に分類されるものである。細連弁が施されている。

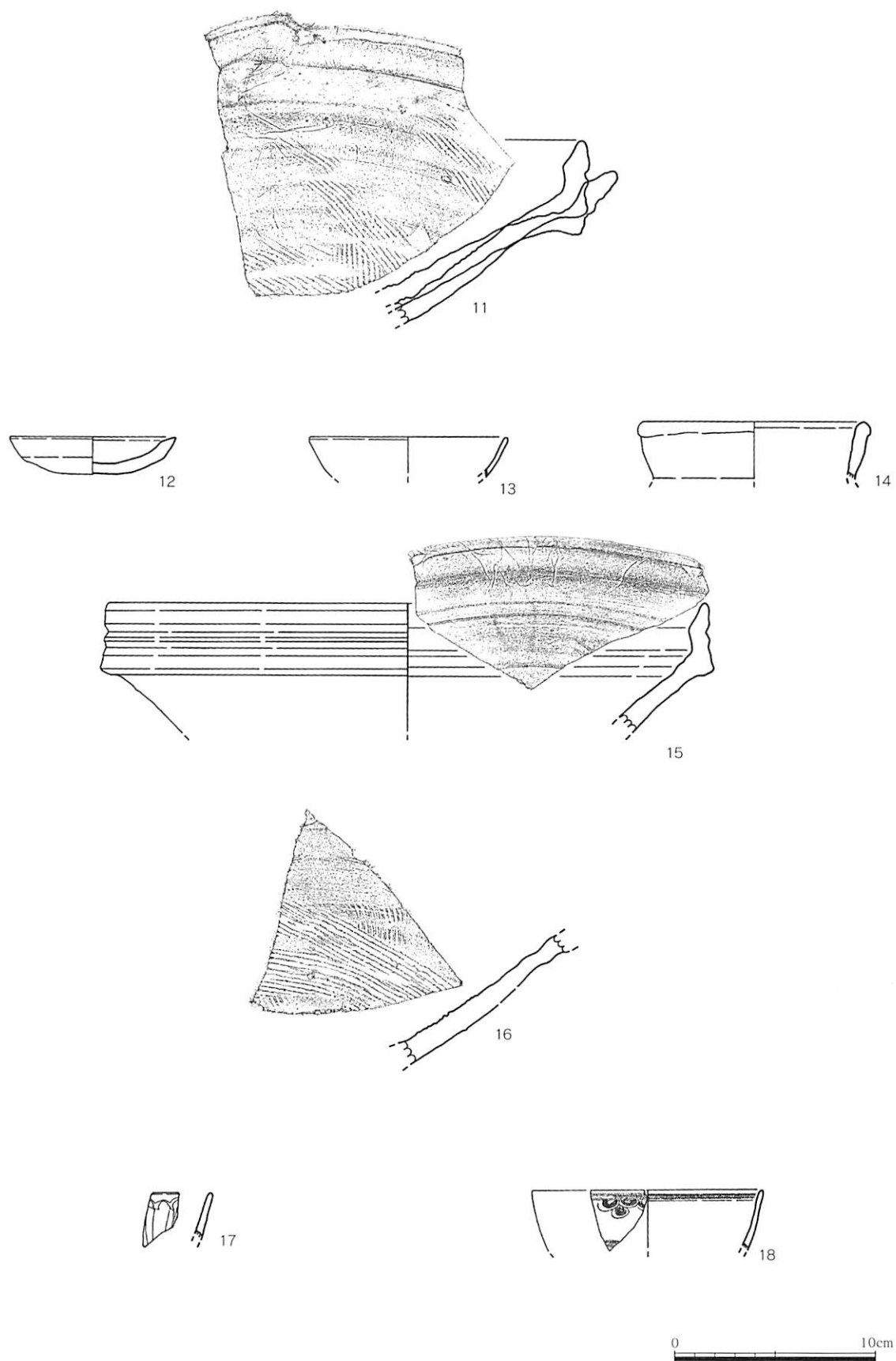
18は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群に分類されているもので、復元口径11.4cmを測る。



第6図 SE100系列遺構実測図(1/30)



第7図 SE100系列(SE100)出土遺物実測図①(1/3)



第8図 SE100系列(SE100・SE112・SE128)出土遺物実測図②(1/3)

SE230系列

SE230は、三段の桶積み井戸の井戸杵痕跡が確認されている。周囲の掘り方の埋め戻し方法に関しては、砂質土と粘質土が交互に入れられている(第9図参照)。簡易の版築的土木工法をもって埋め戻しであるようにもとれる。なお、埋め戻し部分の最上層に関しては、真砂土を入れて突き固めていたようである。井戸杵痕上面に関しては、長土坑SX203・SX204によって削幣を受けており、最上面では検出不可能であったため、この井戸遺構に関しては、廃絶時の遺構番号のほうが大きな番号が付されている。

SE230(掘削時)

第10図19～39は、掘り方出土の遺物群である。

19は、ロクロ成形土師器皿である。法量は、復元口径13.0cm／器高2.2cm／復元底径7.4cmを測る。20～25は、京都系土師器皿である。20は、復元口径8.2cmを測る。21は、復元口径10.0cm／器高1.8cmを測る。22は、復元口径11.0cm／器高2.05cmを測る。23は、復元口径12.4cm／器高2.4cmを測る。24は、復元口径13.4cm／器高11.3cmを測る。25は、復元口径12.9cmを測る。

26・27は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群に分類されているものである。それぞれ、復元口径10.7cmと復元口径11.4cmを測る。

28～33は、中国産染付皿で、小野分類において染付皿E群に分類されているものである。28は、復元口径11.8cm、29は、復元口径15.1cm、30は、復元口径19.2cm、32は、復元底径7.9cm、33は、復元底径12.9cmを測る。29・30・31は、内面に宝文が施されている。32は、小野分類の染付皿B-1群に分類されるものであると考えられるが、口縁部が欠損しているので不確実である。33は大皿で、内底面に紅葉文が施される。

34～39は、中国産染付であるが、胎土が黄色味を帯びた陶胎、或いは、灰色の磁器質の製品である。これらの製品は、いずれも輪郭を用いない描法の製品で、近年、漳州窯系の製品と推定されている一群である(以下、漳州窯系と記す)。34は、染付碗で、小野分類において染付碗C群に分類されているもので、法量は、復元口径13.0cm／器高4.3cm／高台径4.2cmを測る。35～39は、漳州窯系染付皿である。35は、碁笥底を呈し小野分類において染付皿C群に分類されるもので、法量は、復元口径10.0cm／器高2.35cm／復元底径3.3cmを測る。36～39の法量に関しては、それぞれ、36は、復元口径8.8cm、37は、復元口径9.2cm、38は、復元口径11.2cm、39は、復元底径3.7cmを測る。39に関しては、内底面に蛇ノ目釉ハギが確認される。

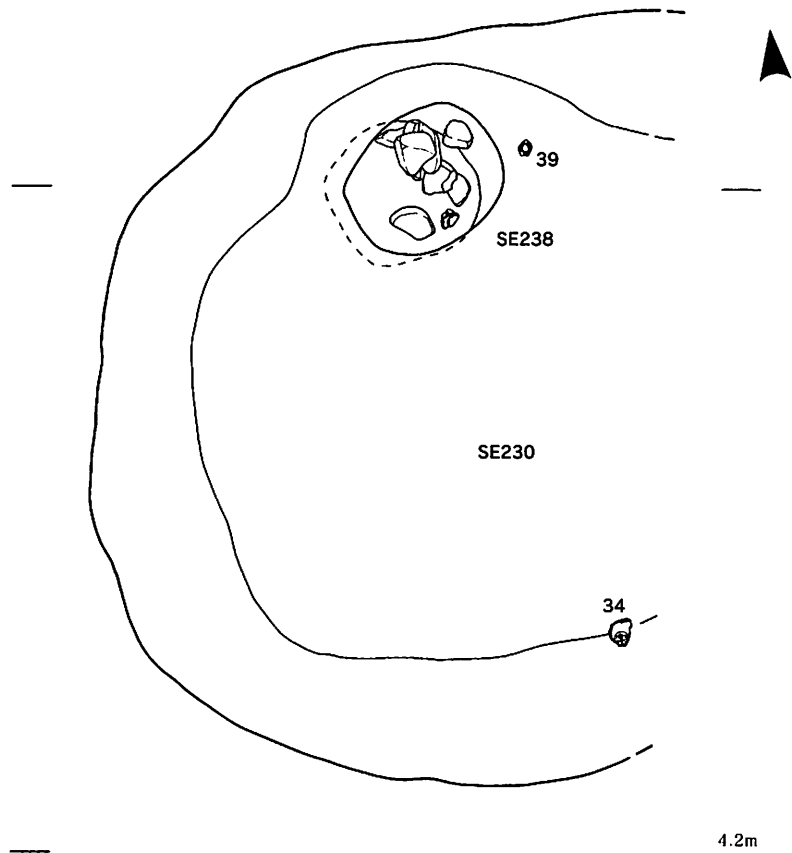
SE238(廃絶時)

三段の桶積み井戸の井戸杵痕跡が確認されている。井戸杵は、壊さずに埋め戻されたようである。

第10図、40・41は、井戸杵内出土遺物である。

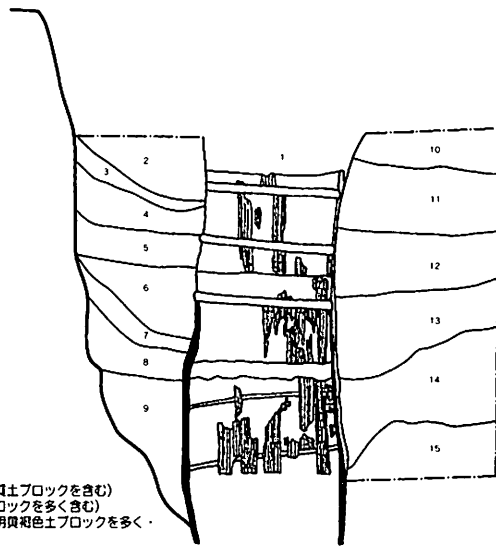
40は、瓦質土器火鉢である。内外面に、器面調整痕が確認される。

41は、漳州窯系染付皿である。小野分類における染付皿C群に該当するもので、法量は、復元口径8.6cm／器高2.25cm／復元底径3.4cmを測る。内底面には、蛇ノ目釉ハギが確認される。

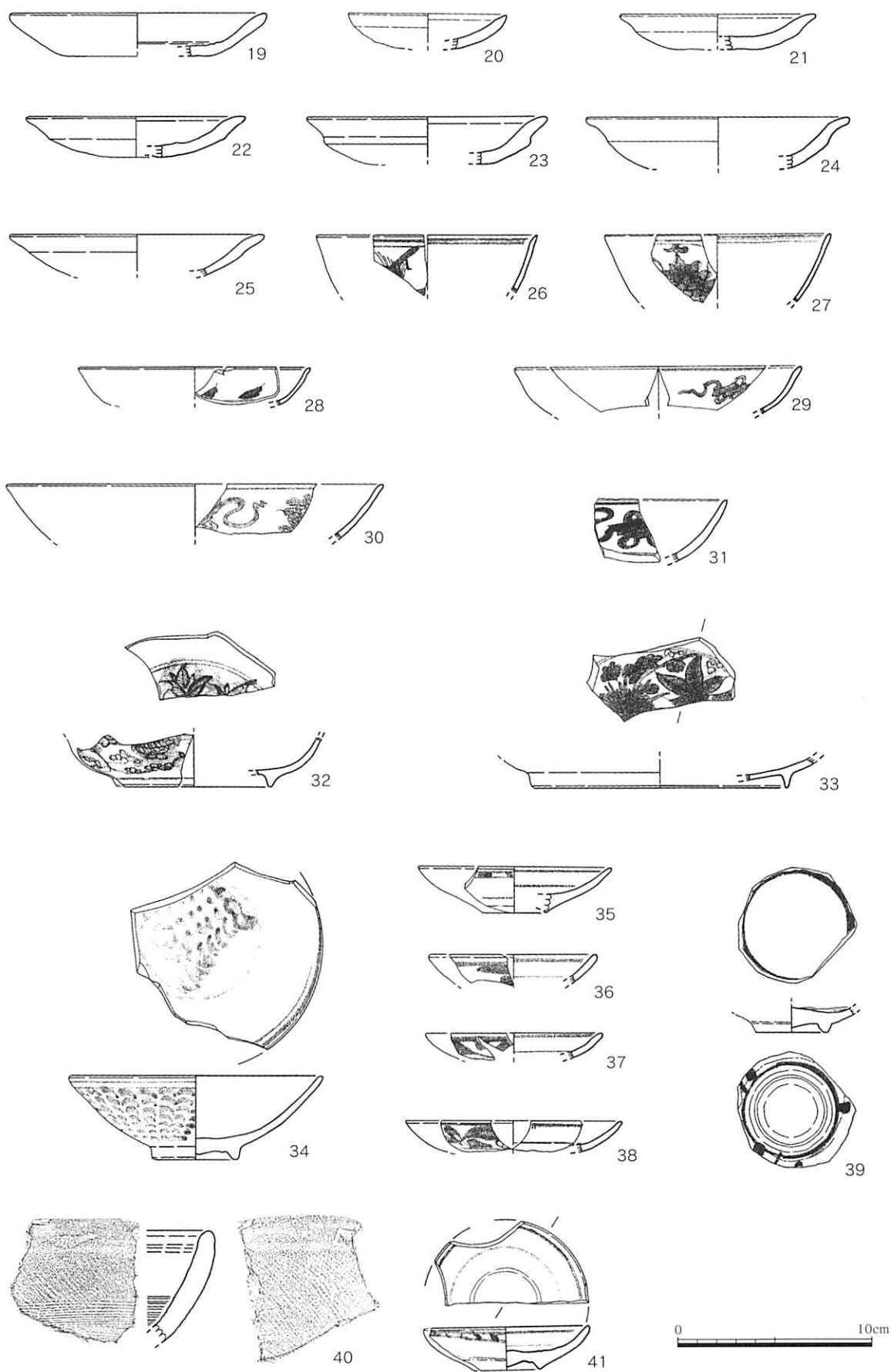


SE230・238

1. やや軟質 暗灰色土（淡灰色粘質土ブロック・淡褐色砂質土ブロック・明黄褐色土ブロック・明灰色粘質土ブロックを含む）
2. 砂質 明褐色土（明灰色粘質土ブロックを多く含む）
3. 粘質 暗茶灰色土（淡褐色砂質土ブロックを含む）
4. 砂質 暗灰色土
5. やや軟質 明黄褐色土（淡灰色粘質土ブロックを含む）
6. 砂質 暗黄灰色土
7. 粘質 暗茶灰色土（淡灰色粘質土ブロックを含む）
8. やや軟質 淡灰色土（明灰色粘質土ブロックを多く含む）
9. 砂質 淡黄褐色土（淡灰色粘質土ブロック・淡灰色粘質土ブロックを含む）
10. 淡褐色砂質土（淡灰色粘質土ブロック・淡褐色砂質土ブロック・明黄褐色砂質土ブロックを含む）
11. 暗茶灰色土（淡灰色粘質土ブロック・淡褐色砂質土ブロック・明黄褐色土ブロックを多く含む）
12. 砂質 淡明褐色土（淡灰色粘質土ブロック・淡褐色砂質土ブロックを少量・明黄褐色土ブロックを多く・明灰色粘質土ブロックを含む）
13. やや軟質 暗茶灰色土（淡灰色粘質土ブロック・淡褐色砂質土ブロック・明黄褐色土ブロック・明灰色粘質土ブロックを含む）
14. 砂質 明褐色土（淡灰色粘質土ブロックを多く・淡褐色砂質土ブロックを少量・明黄褐色土ブロック・明灰色粘質土ブロックを多く・褐色粘質土ブロックを少量含む）
15. 砂質 灰色土（明灰色粘質土ブロックを多く含む）



第9図 SE230系列遺構実測図(1/30)



第10図 SE230系列(SE230・SE238)出土遺物実測図(1/3)

SE240系列

SE240は、隣接する井戸遺構S250を掘削する。採水坑の埋め立て行為に関しては、真砂土を被せるような行為は確認できなかった。廃絶に関しては、やはり、掘り返しをおこない、井戸廃絶時に井戸枳等を除去した後、多量の遺物とともに念入りに埋め戻されているようである(第11図参照)。

SE240(廃絶時)

第12～18図42～145は、遺構廃絶時に混入した遺物群である。廃絶時の廃棄物であろうか。

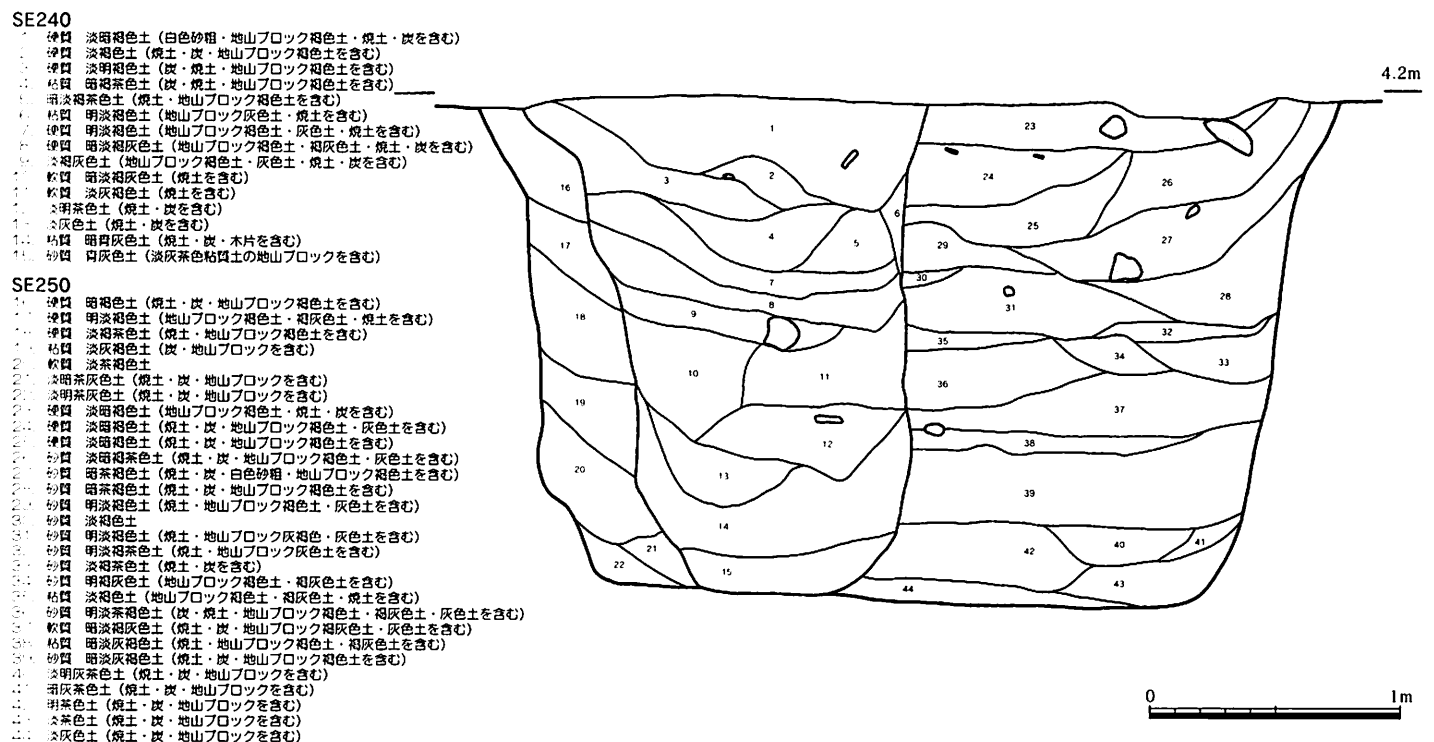
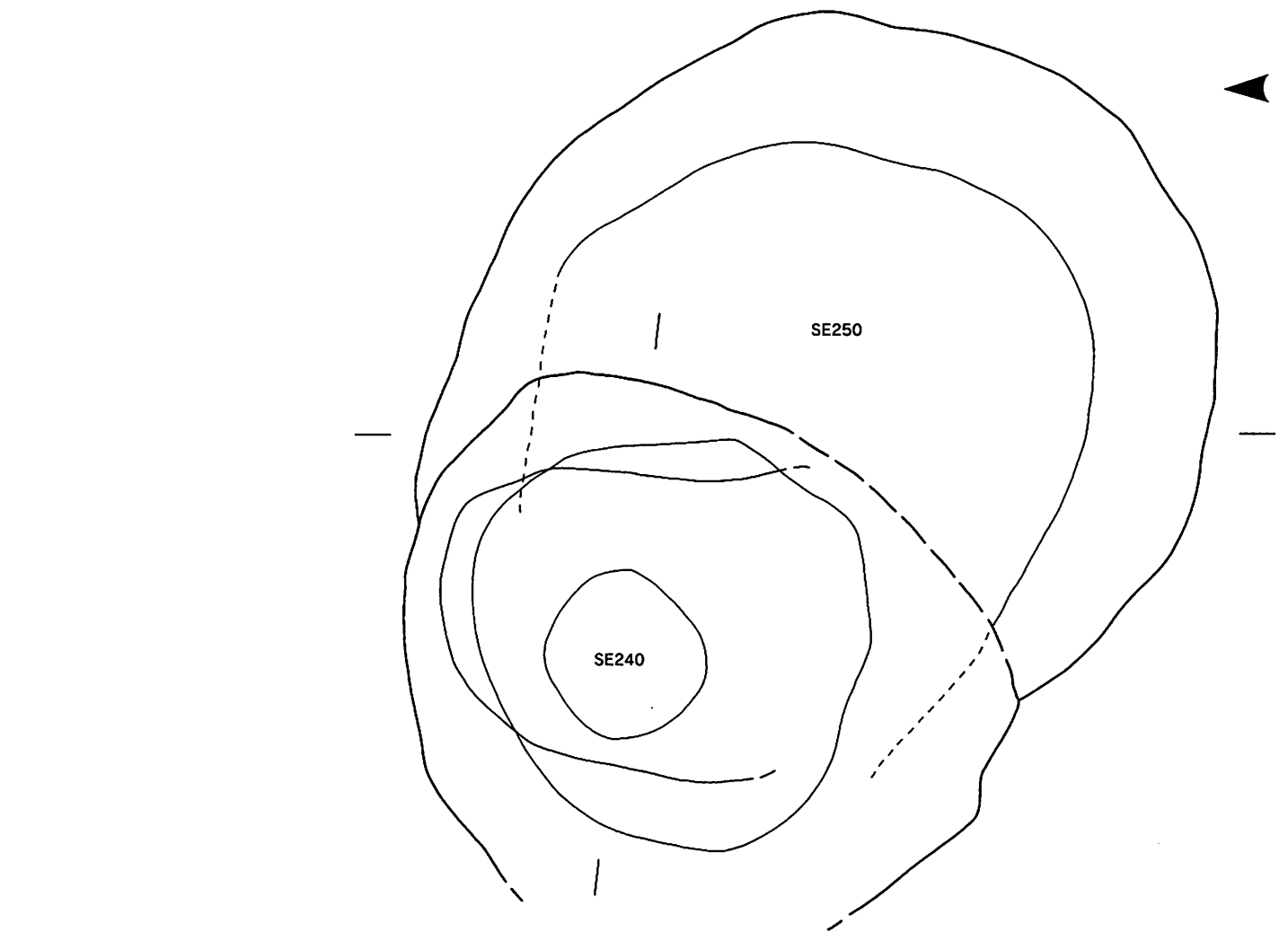
42～76は、京都系土師器皿である。42は、復元口径8.0cm、43は、復元口径8.2cm／器高2.2cm、44は、復元口径8.6cm、45は、復元口径9.0cm、46は、復元口径9.0cm、47は、復元口径9.2cm、48は、復元口径9.2cm、49は、復元口径9.2cm、50は、復元口径9.2cm／器高1.7cm、51は、復元口径9.4cm／器高1.5cm、52は、復元口径9.4cm／器高1.9cm、53は、復元口径9.4cm、54は、復元口径10.0cm、55は、復元口径10.0cm、56は、復元口径10.0cm、57は、復元口径10.3cm／器高2.3cm、58は、復元口径10.7cm、59は、復元口径10.8cm／器高1.9cm、60は、復元口径11.0cm、61は、復元口径11.2cm、62は、復元口径11.2cm／器高1.8cm、63は、復元口径11.4cm、64は、復元口径11.6cm／器高2.2cm、65は、復元口径11.8cm、66は、復元口径12.0cm、67は、復元口径12.0cm／器高2.6cm、68は、復元口径12.2cm、69は、復元口径12.2cm／器高2.2cm、70は、復元口径12.6cm／器高2.2cm、71は、復元口径12.8cm／器高1.9cm、72は、復元口径13.0cm／器高2.4cm、73は、復元口径13.0cm／器高2.5cm、74は、復元口径13.0cm、75は、復元口径14.2cm、76は、復元口径15.4cm／器高2.4cmを測る。42・43には、灯明芯痕跡が確認される。

77～93は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群に分類されるものである。77～90は口縁部、91～93は高台部である。77は、復元口径11.1cmを測る。78は、復元口径11.2cmを測る。79は、復元口径11.5cmを測る。80・81は、外面に蛟竜文が描かれ、復元口径11.8cmを測る。82は、復元口径11.5cmを測る。83は、復元口径12.3cmを測る。84は、復元口径12.6cmを測る。85は、外面に暗花文、口縁部内面には四方禪文が施され、復元口径12.6cmを測る。86は、復元口径13.1cmを測る。87は、復元口径13.4cmを測る。88は、口縁部内面に四方禪文が施され、復元口径13.6cmを測る。89は、口縁部内面に四方禪文を施され、復元口径11.4cmを測る。91は、復元高台径4.8cmを測る。92は、内底面に蛟竜文が施され、復元高台径5.2cmを測る。口縁部・体部には、80・81のようなものが比定される。93は、内定底面に草花文、高台部内面に落款名が施され、復元高台径3.8cmを測る。

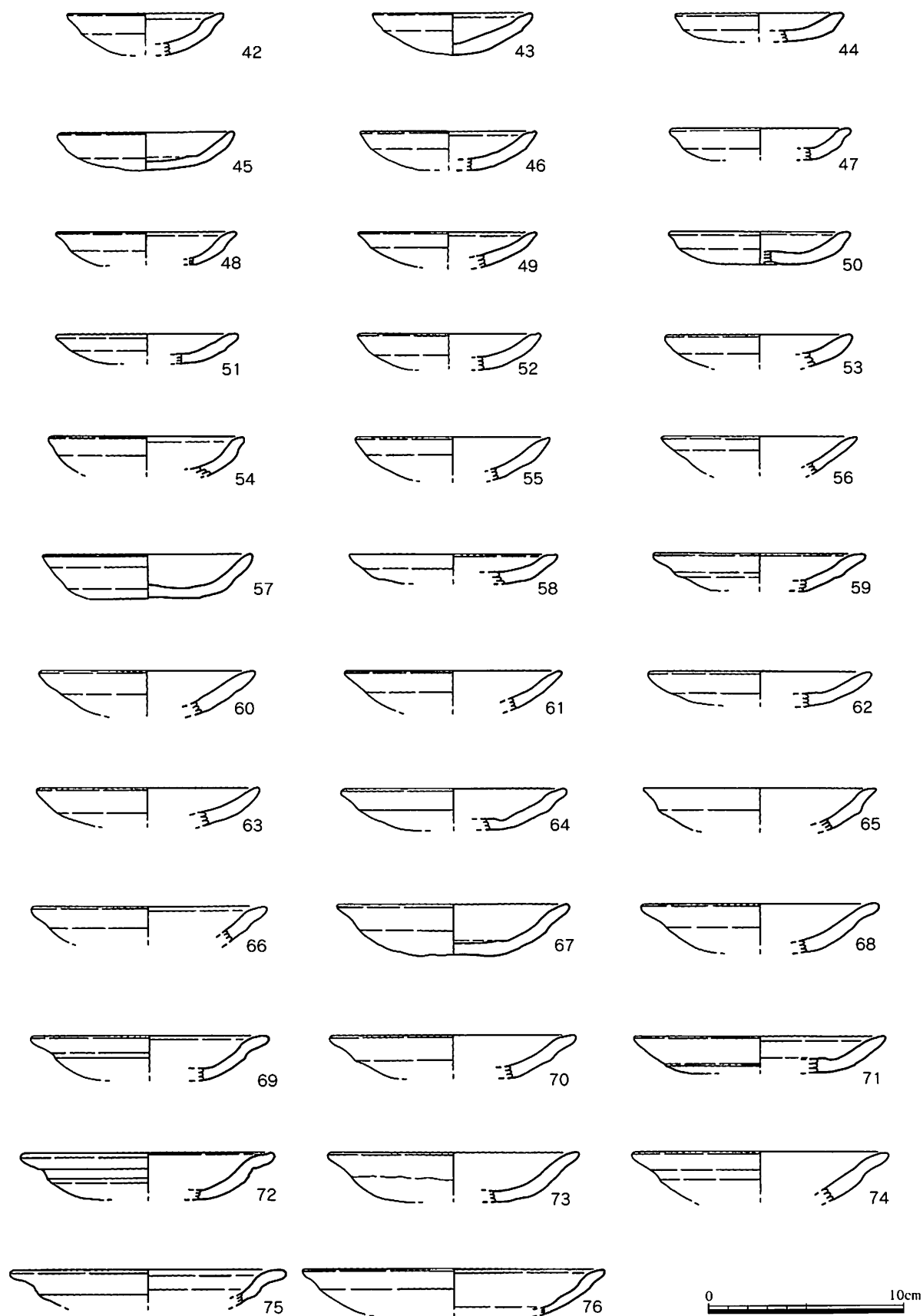
94～104は、中国産染付皿である。94～98は口縁部、99～104は高台部である。94～98は、小野分類において染付皿E群に分類されるものである。95は、口縁部内面に四方禪文が施され、復元口径11.4cmを測る。96は、復元口径11.8cmを測る。97は、復元口径13.7cmを測る。98は、復元口径11.9cmを測る。99は、復元高台径6.0cmを測る。100は、復元高台径6.0cmを測る。101は、復元高台径7.0cm、102は、内底面に蛟文が施され、復元高台径7.5cmを測り、103は、復元高台径7.3cm、104は、中国産染付大皿で、復元高台径15.0cmを測る。

105・106は、漳州窯系染付碗である。105は、小野分類において染付碗C群に分類されるもので復元口径12.9cmを測る。106は、復元高台径4.6cmを測る。107～110は、漳州窯系染付皿である。107は、復元口径4.2cm、108は、復元口径10.3cm、109は、復元口径10.6cm、110は、復元口径3.7cmを測る。111は、大皿の口縁部復元口径21.8cmである。108・110には、蛇ノ目釉ハギが確認される。

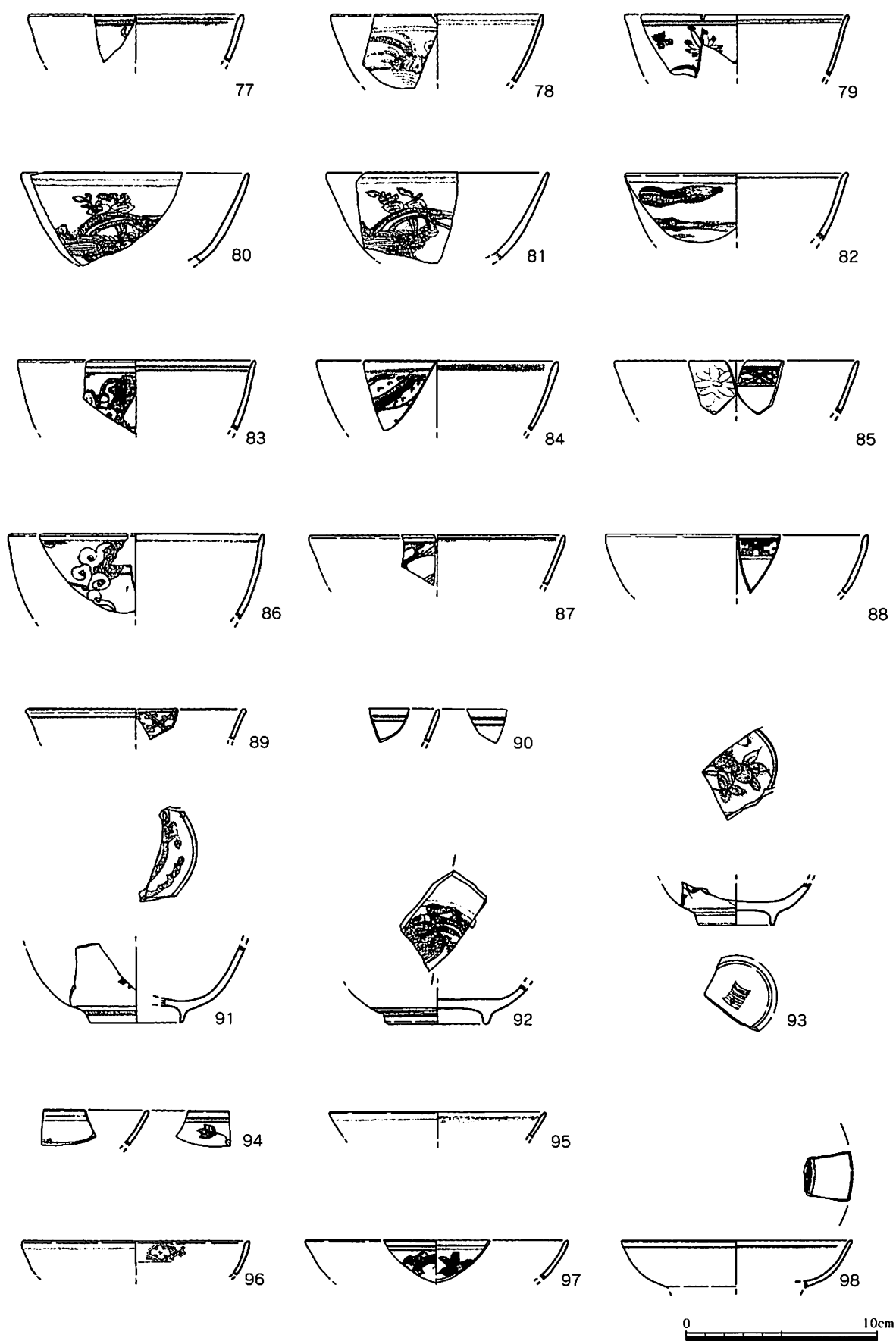
112は、中国産白磁碗の高台部分で、上田分類において白磁E群に分類されているものである。復元高台径4.3cmを測る。113は、中国産白磁稜花皿で、上田分類において白磁E群に分類されているものである。法量は、口径11.6cm／器高2.7cm／高台径5.7cmを測る。灰色の胎土を呈し、釉の発色も灰色を呈す。114は、中国産粗製白磁皿で、復元口径10.5cm／器高2.1cm／高台径5.4cmを測り、蛇ノ目釉ハギが観察される。



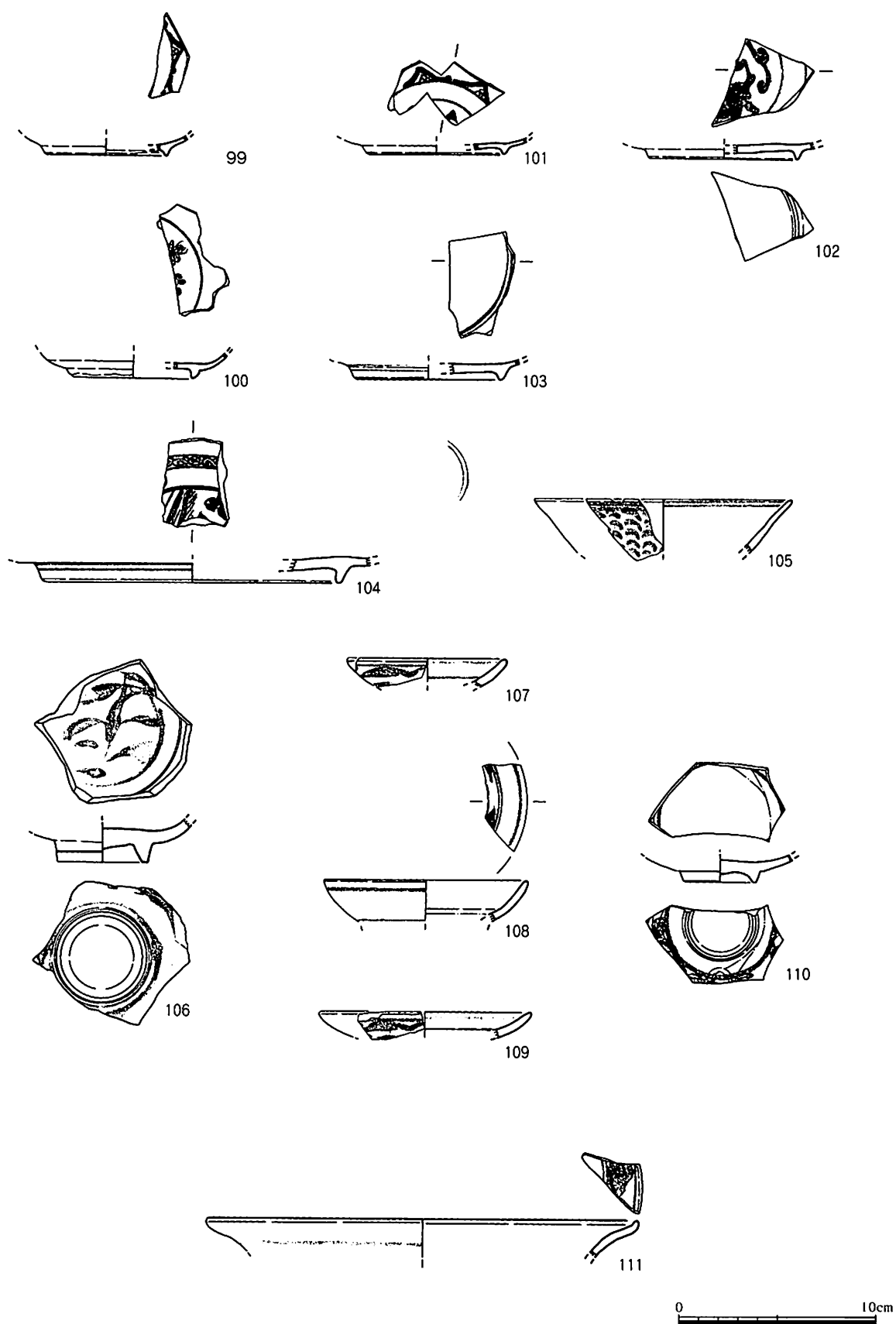
第11図 SE240/SE250系列遺構実測図(1/30)



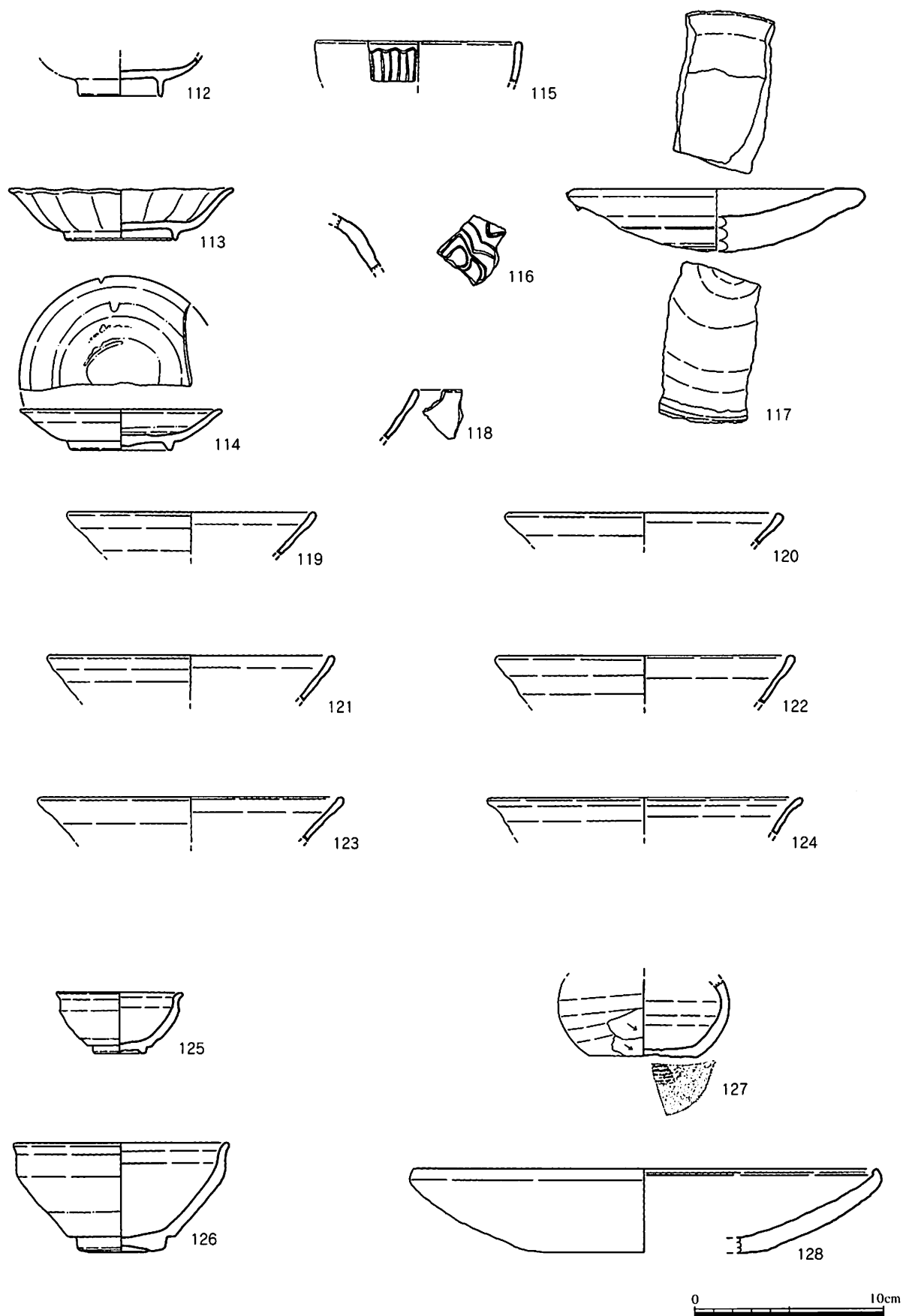
第12図 SE240系列(SE240)出土遺物実測図①(1/3)



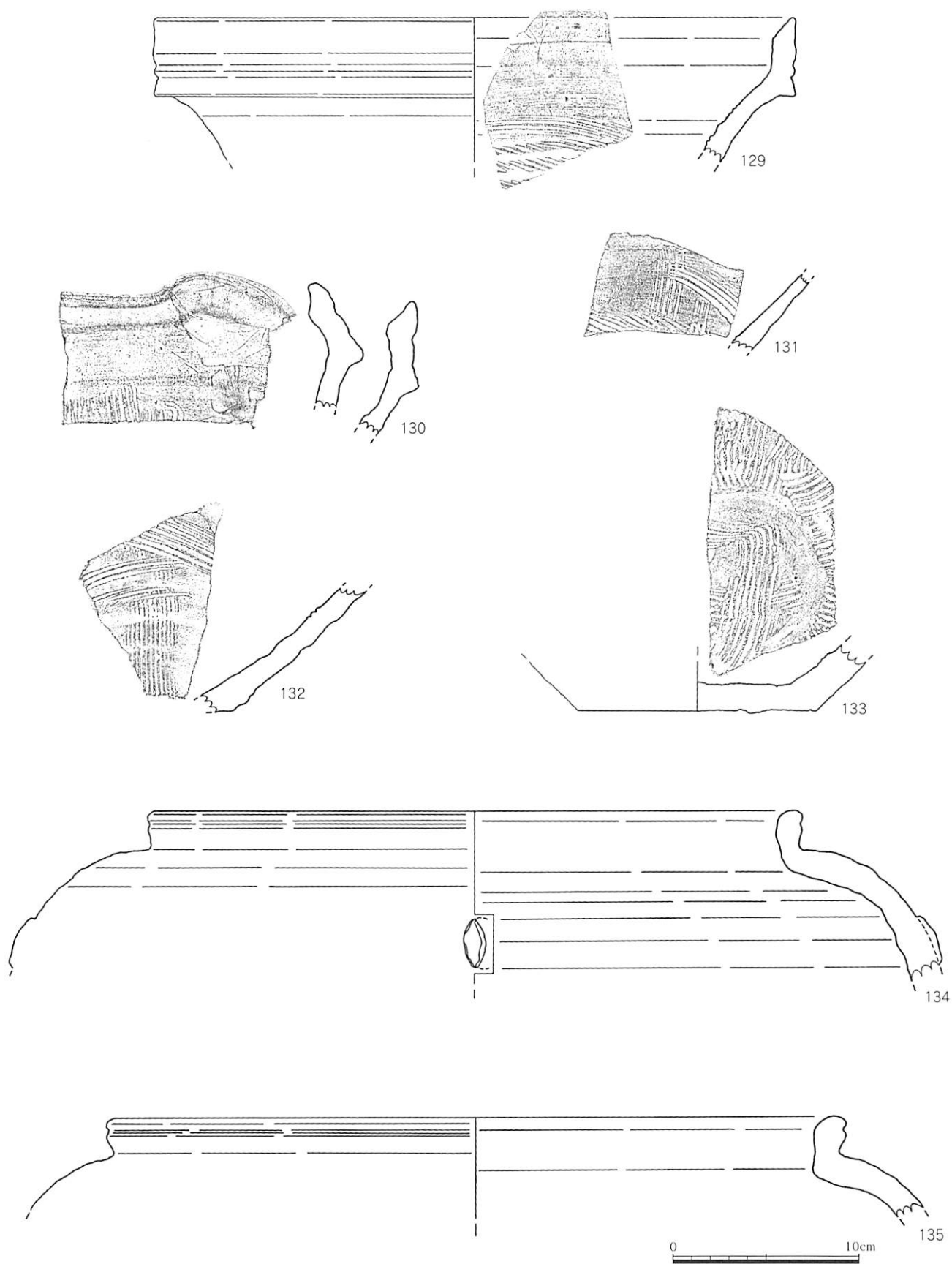
第13図 SE240系列(SE240)出土遺物実測図②(1/3)



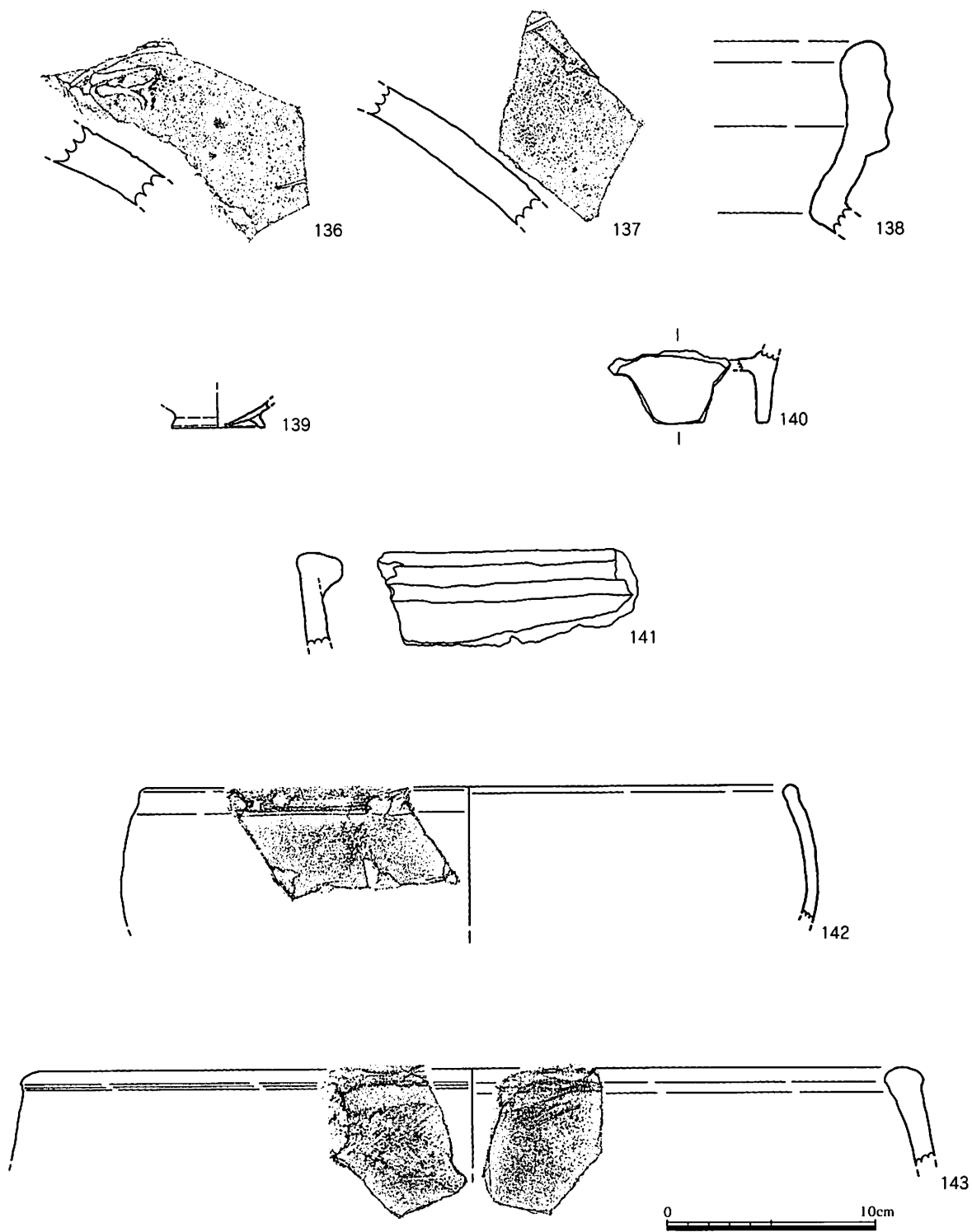
第14図 SE240系列(SE240)出土遺物実測図③(1/3)



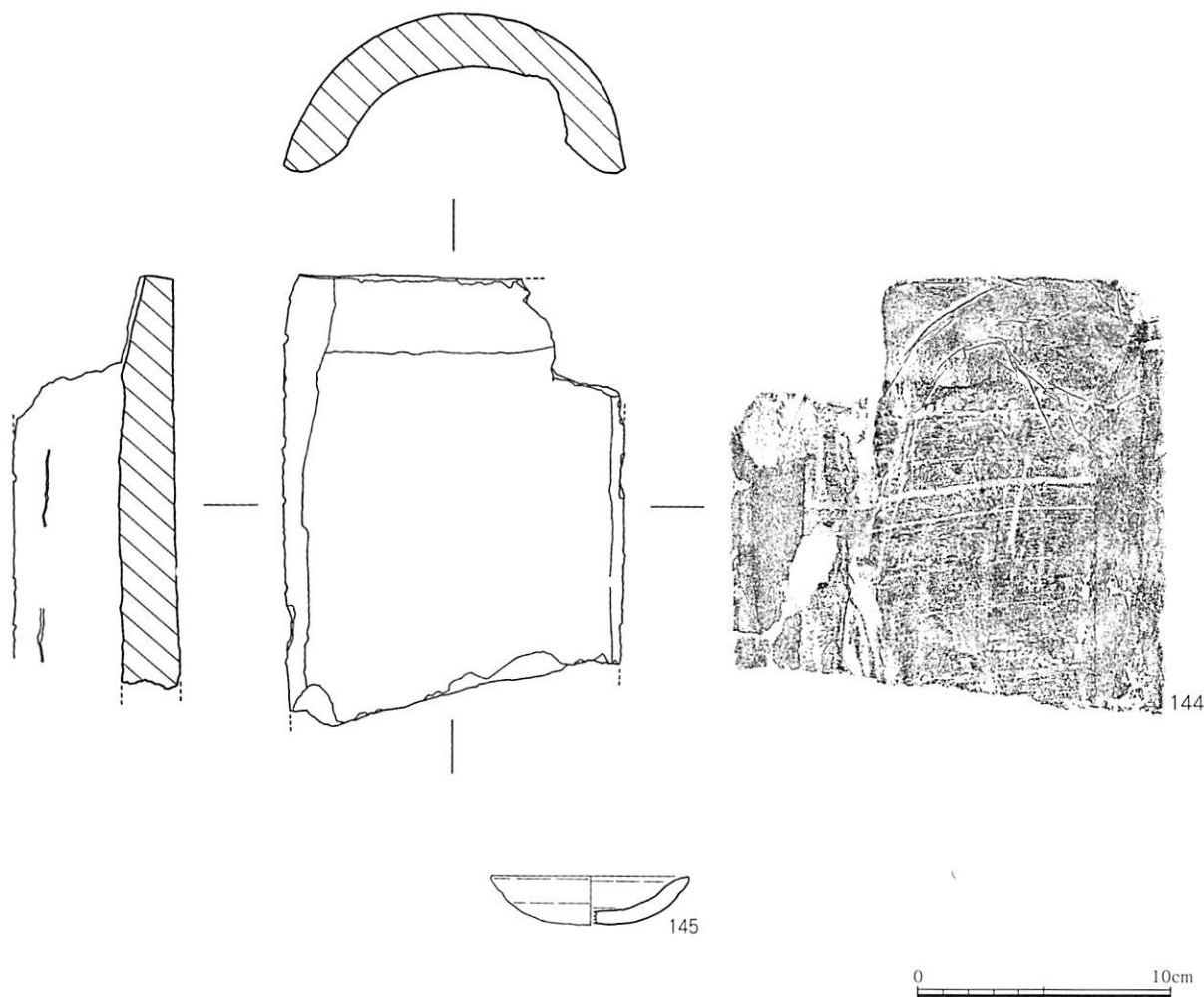
第15図 SE240系列(SE240)出土遺物実測図④(1/3)



第16図 SE240系列(SE240) 出土遺物実測図⑤(1/3)



第17図 SE240系列(SE240)出土遺物実測図⑥(1/3)



第18図 SE240系列(SE240・SE249)出土遺物実測図⑦(1/3)

115は、中国産青磁碗で森田分類においてB-IV類に分類されるもので、復元口径11.0cmを測る。串描きの細連弁が施されている。116・117は、中国産青磁酒海壺である。116は、胴部に当たり、117は、内底部に当たるものと考えられる。

118～124は、朝鮮産灰釉陶器碗である。119は、復元口径13.0cm、120は、復元口径14.4cm、121は、復元口径15.0cm、122は、復元口径15.7cm、123は、復元口径16.0cm、124は、復元口径16.6cmを測る。124のみが、外反口縁を呈する。

125・126は、瀬戸美濃産陶器天目碗である。125は、小碗で、口径6.5cm／器高3.2cm／高台径2.6cm、126は、碗で、復元口径11.2cm／器高5.75cm／高台径4.3cmを測る。

127～138は、備前産焼締陶器である。127は、小壺で復元底径5.6cmを測る。128は盤で、復元口径24.4cm／器高4.4cm／底径10.8cmを測る。129～133は、播鉢である。129は、復元口径34.3cm、133は、復元底径12.6cmを測る。129・131・132には、交叉播り目が確認される。134・135は、短頸壺である。それぞれ、134は、復元口径34.6cm、135は、復元口径38.8cmを測る。136～138は、甕である。136・137には、製作時に施された刻書が認められる。

139～143は、瓦質土器である。139は、碗で復元底径4.4cmを測る。140～143は、火鉢である。142は、復元口径31.4cm、143は、復元口径50.0cmを測る。

144は、丸瓦である。コビキB調整が確認される。

SE249(掘削時)

145は、京都系土師器小皿で復元口径7.9cm／器高1.9cmを測る。灯明芯痕が確認される。遺構最下面において検出されているが、廃絶時の流入品である可能性も否定できない。

SE250系列

SE250(廃絶時)

平面プランにおいては、隣接するSE240に、その約40%を掘削されている。残存する掘り方の埋め立て部分に関しては、上層に礫をプラン一面に混入させ、その上面を粘質土ブロック混入の砂質土を被せる状態で埋め立てられている。採水坑部分に関してもやはりSE240にその約半分を掘削されている。

第19図146～161は、遺構廃絶時に混入した遺物群である。

146～152は、京都系土師器皿である。146は、復元口径8.8cm／器高1.7cm、147は、復元口径9.4cm／器高2.05cm、148は、復元口径11.6cm／器高2.7cm、149は、復元口径12.0cm／器高2.2cm、150は、復元口径13.2cm／器高2.3cm、151は、復元口径11.9cm／器高2.6cm、152は、復元口径12.8cm／器高2.2cmを測る。

153は、中国産染付碗で、小野分類における染付碗E群に分類されるもので、復元口径11.4cmを測る。154～156は、中国産染付皿である。154は、小野分類において染付皿C群に分類されるものである。155は、小野分類において染付皿E群に分類されるもので、復元口径12.4cmを測る。156は、復元口径10.6cmを測る。

157は、緑彩の陶器片で、中国産華南彩釉陶鳥形水注の羽根の部分であると推定される。

158・159は、瀬戸美濃産陶器天目碗である。それぞれ、復元口径11.6cm／器高5.95cm／高台径4.0cm、復元口径11.2cm／器高5.75cm／高台径4.3cmを測る。

160・161は、備前産焼締陶器甕である。製作時に施された刻書が認められる。

第20図167は、丸瓦である。内外面に布目痕跡が存在する。

第20図168は、石製鞆羽口である。凝灰岩を用い、送風口は直径約2cm程を測る。

SE251(掘削時)

第19図162～165は、掘り方出土の遺物群である。

162は、京都系土師器皿で復元口径8.2cmを測る。

163は、中国産白磁皿で、上田分類において白磁E群に分類されているものである。復元口径10.3cmを測る。

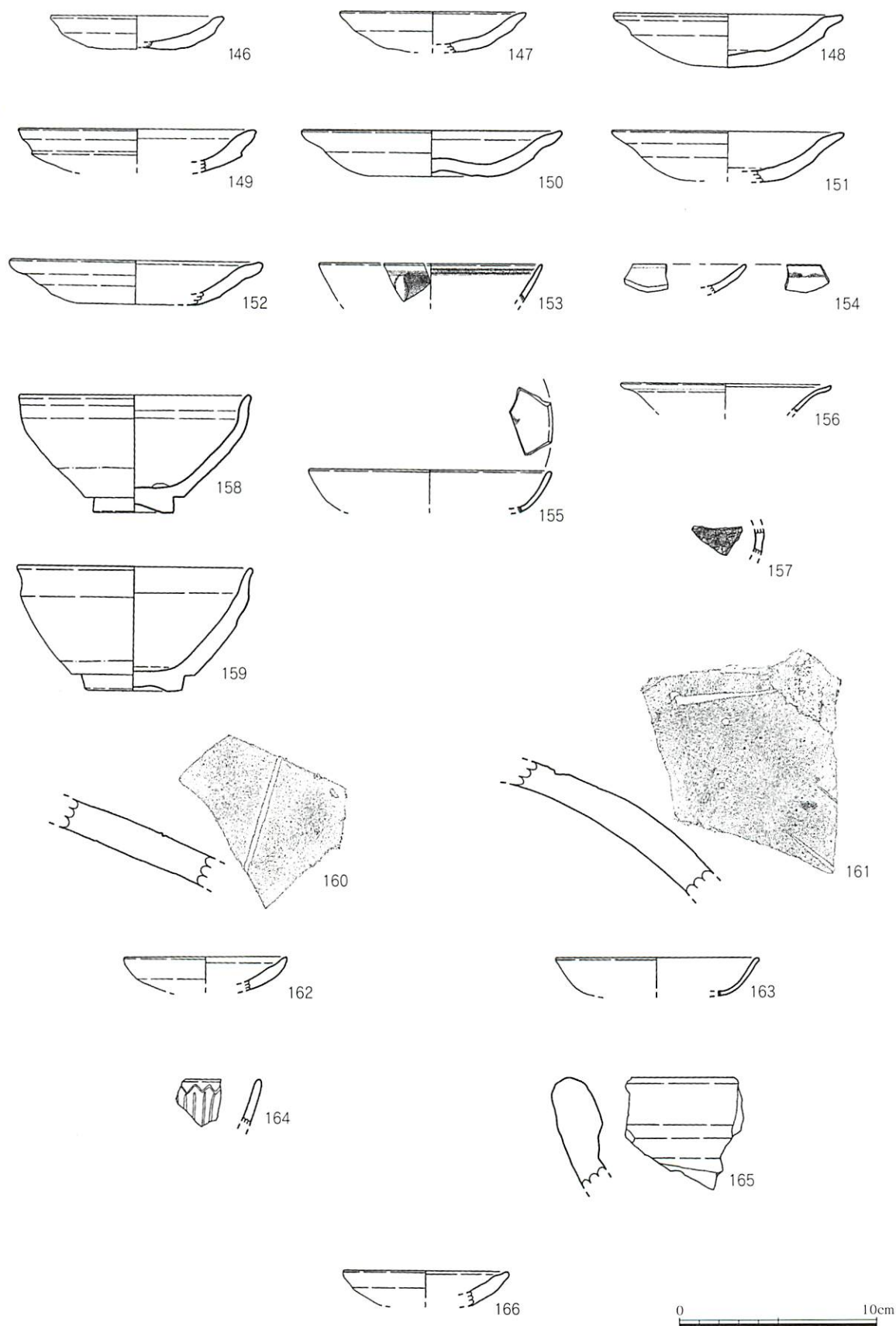
164は、中国産青磁碗で森田分類においてB－Ⅳ類に分類されるものである。串描きによる細連弁が確認される。

165は、備前産焼締陶器甕の口縁部である。

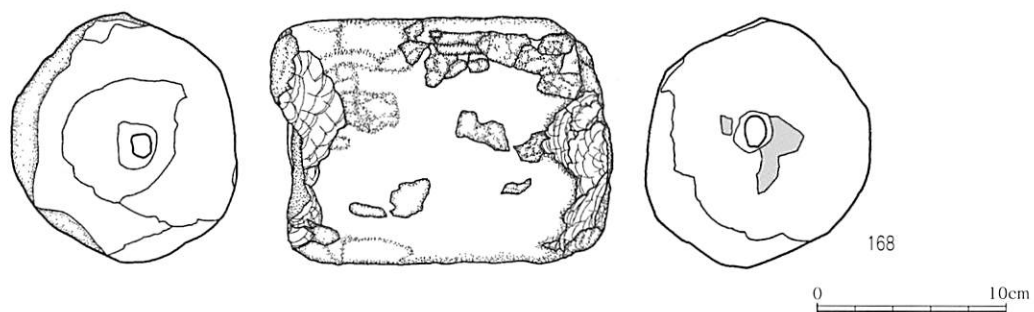
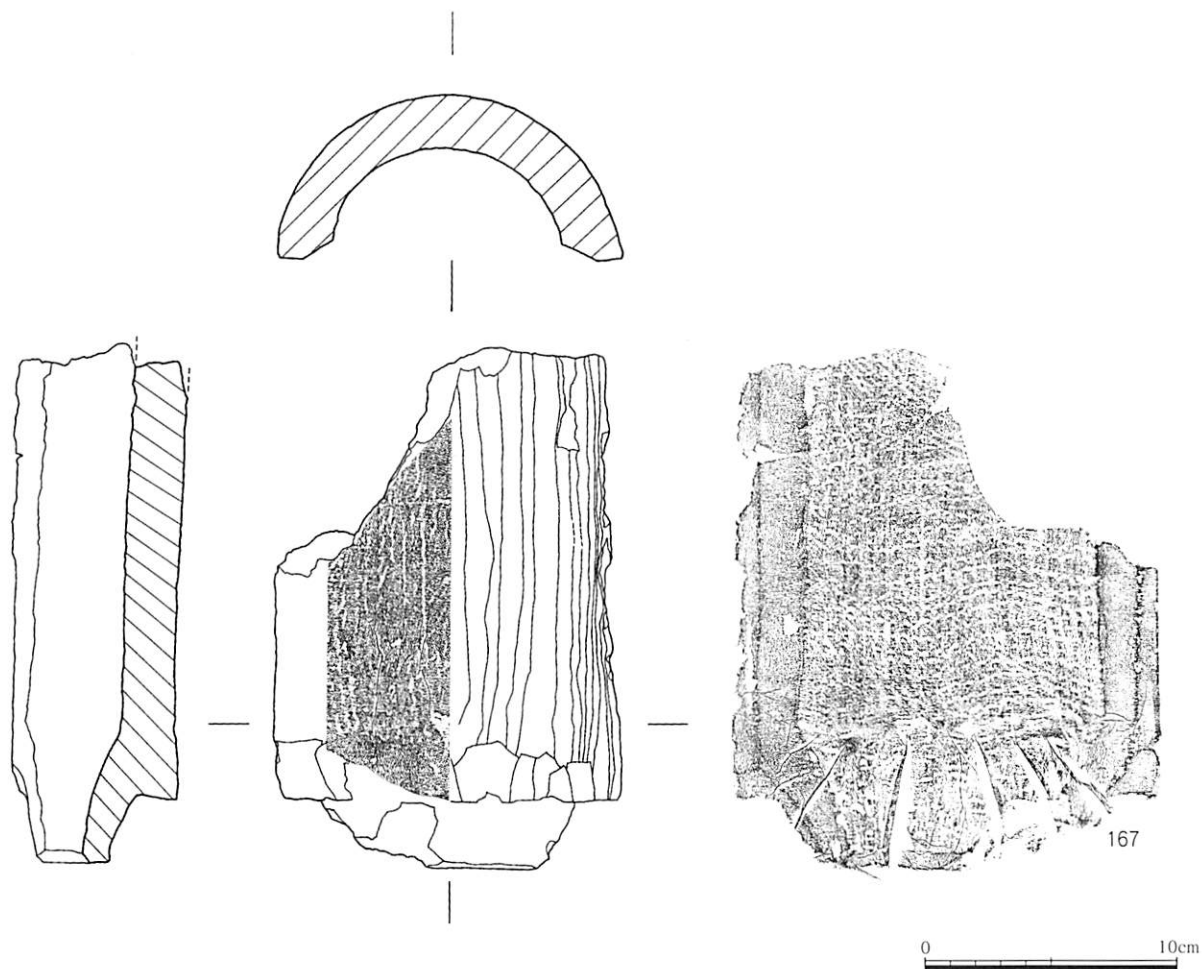
SE255(機能時)

第19図166は、京都系土師器皿で復元口径8.4cmを測る。

遺構最下面において遺物が検出されているが、廃絶時の流入品である可能性も否定できない。



第19図 SE250系列(SE250・SE251・SE255)出土遺物実測図①(1/3)



第20図 SE250系列(SE250)出土遺物実測図②(1/3)

SE260系列

調査区による制限から、その約70%の調査に留まった。廃絶に関しては、やはり、掘り返しをおこない、井戸廃絶時に井戸枠等を除去した後、念入りに埋め戻されているようである(第21図参照)。

SE260(廃絶時)

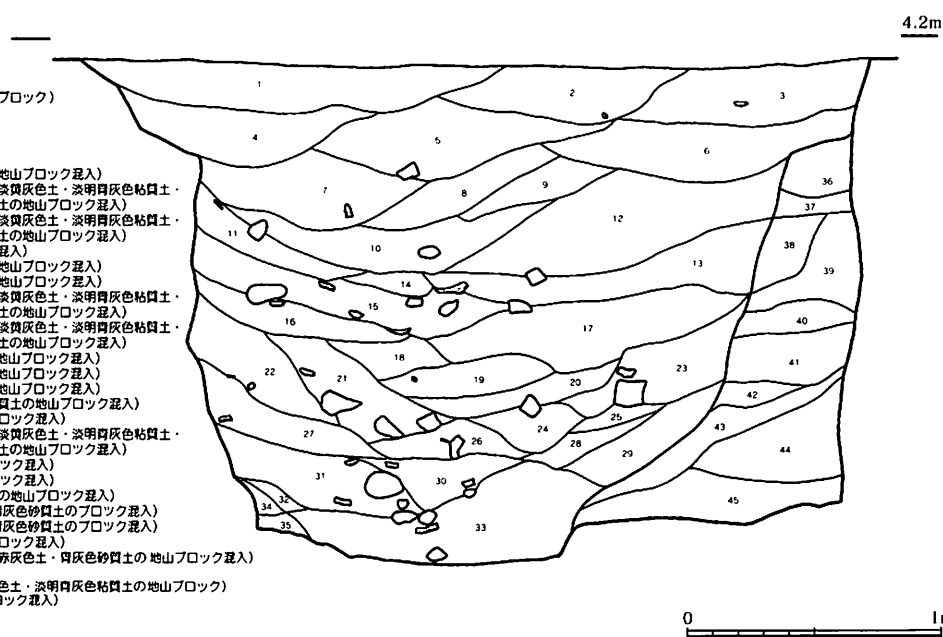
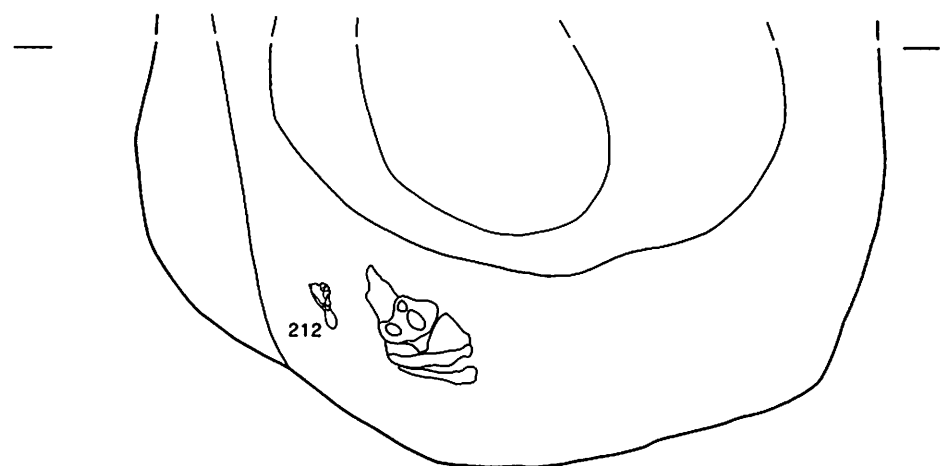
第22図169～189は、遺構廃絶時に混入した遺物群である。

169は、京都系土師器皿である。169は、復元口径4.7cm／器高1.6cm、170は、復元口径7.2cm、171は、復元口径8.5cm、172は、復元口径10.8cm／器高2.35cm、173は、復元口径10.8cm、174は、復元口径10.8cm／器高2.5cm、175は、復元口径12.4cm、176は、復元口径12.6cm、177は、復元口径12.6cm／器高2.5cm、178は、復元口径12.6cm、179は、復元口径12.8cm、180は、復元口径14.1cmを測る。

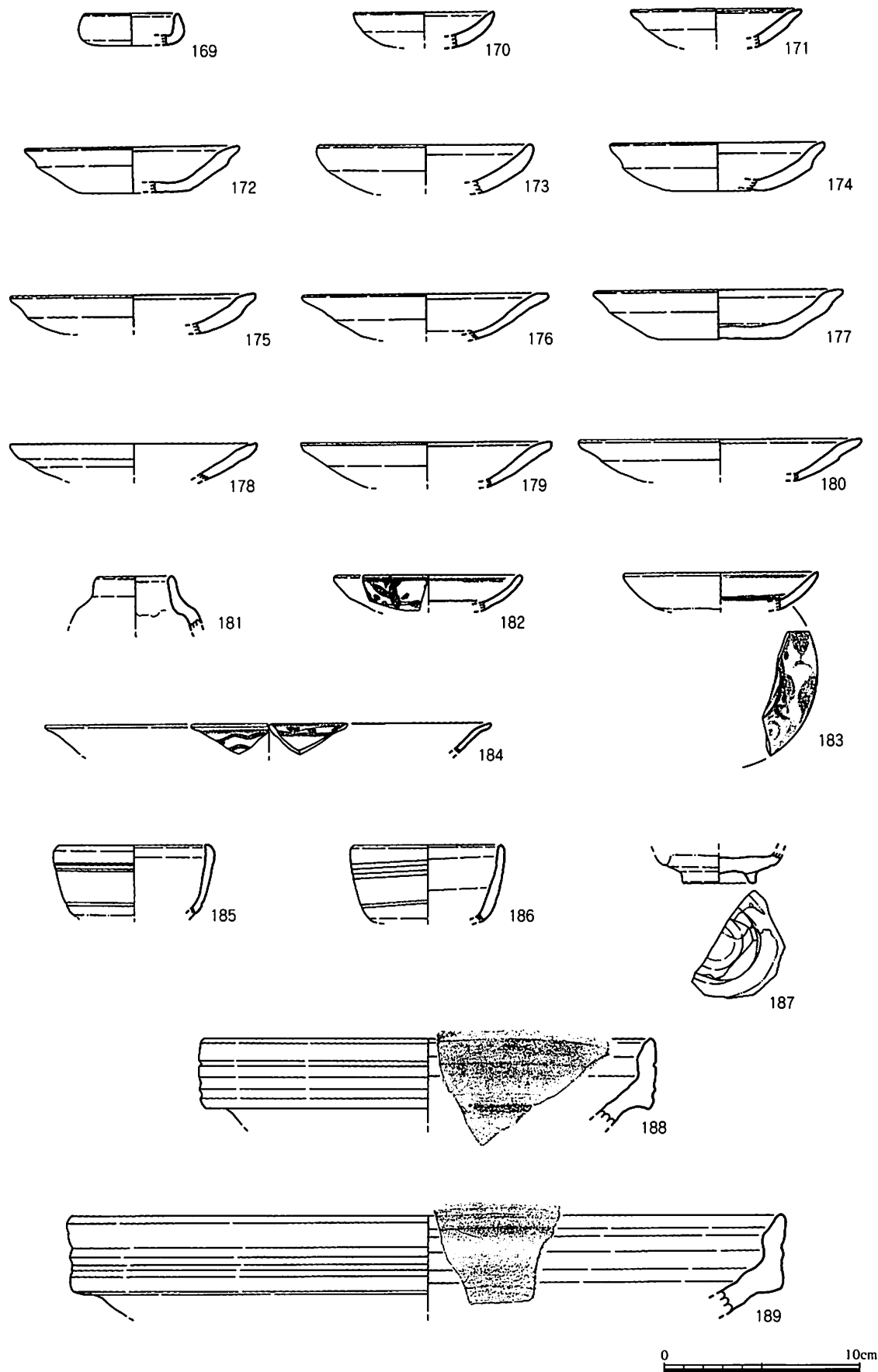
181は、手捏ね成形による焼塩壺で復元口径3.6cmを測る。

SE260

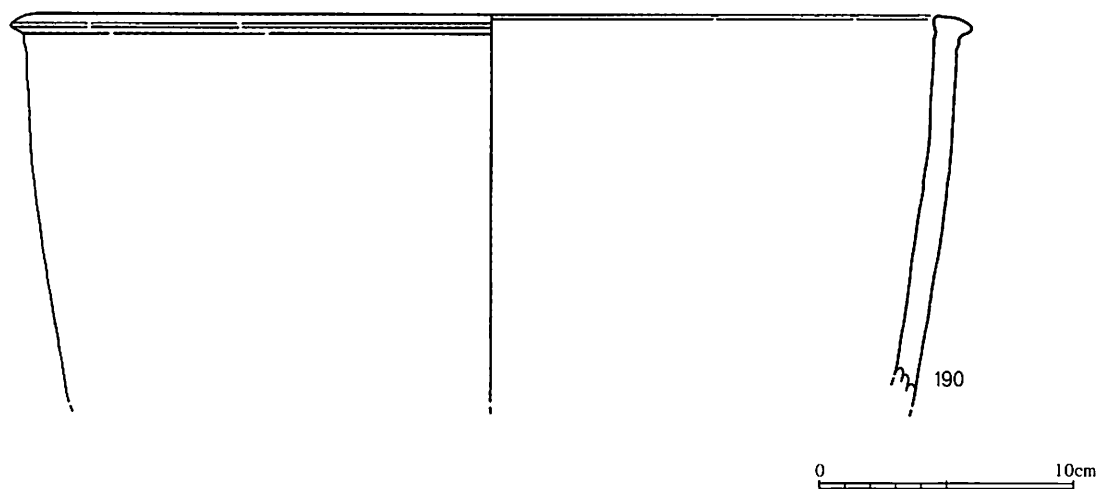
1. 廃絶時の埋土
2. 腐オリブ灰色土(淡黄灰色土の地山ブロック)
3. 明灰色土(淡黄灰色土・淡黄灰色土の地山ブロック混入)
4. 茶灰色土(淡黄灰色土・灰色砂質土・淡黄灰色土・淡明黄灰色粘質土・淡明赤灰色土・黄灰色砂質土の地山ブロック混入)
5. 暗茶灰色土(淡黄灰色土・灰色砂質土・淡黄灰色土・淡明黄灰色粘質土・淡明赤灰色土・黄灰色砂質土の地山ブロック混入)
6. 茶褐色土(淡黄灰色土の地山ブロック混入)
7. 暗茶褐色土(淡黄灰色土・淡黄灰色土の地山ブロック混入)
8. 灰黄色土(淡黄灰色土・淡黄灰色土の地山ブロック混入)
9. 明灰色土(淡黄灰色土・灰色砂質土・淡黄灰色土・淡明黄灰色粘質土・淡明赤灰色土・黄灰色砂質土の地山ブロック混入)
10. 淡灰色土(淡黄灰色土・灰色砂質土・淡黄灰色土・淡明黄灰色粘質土・淡明赤灰色土・黄灰色砂質土の地山ブロック混入)
11. 暗灰色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
12. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
13. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
14. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
15. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
16. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
17. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
18. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
19. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
20. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
21. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
22. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
23. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
24. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
25. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
26. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
27. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
28. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
29. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
30. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
31. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
32. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
33. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
34. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
35. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
36. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
37. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
38. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
39. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
40. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
41. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
42. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
43. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
44. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)
45. 暗褐色土(淡黄灰色土・灰色砂質土の地山ブロック混入)



第21図 SE260遺構実測図(1/30)



第22図 SE260系列(SE260)出土遺物実測図①(1/3)



第23図 SE260系列(SE260)出土遺物実測図②(1/3)

182・183は、中国産漳州窯系染付皿である。それぞれ、復元口径9.6cm、復元口径9.8cmを測る。184は、中国産染付皿で復元口径22.6cmを測る。

185～187は、中国産白磁筒形碗である。口縁部外面に、二重沈線が施されている。185は復元口径7.6cm、186は、復元口径8.0cmを測る。187は、挟り高台で復元高台径3.7cmを測る。上田分類白磁D群に該当するものであろうか。

188・189は、備前産焼締陶器揃鉢である。それぞれ、復元口径22.8cm、復元口径36.0cmを測る。

第23図190は、瓦質土器火鉢である。復元口径27.8cmを測る。

SE261(掘削時)

第24図191～第25図213は、掘り方出土の遺物群である。

191～202は、京都系土師器皿である。191は、復元口径8.0cm／器高2.0cm、192は、復元口径8.0cm／器高1.95cm、193は、復元口径9.4cm、194は、復元口径9.7cm／器高2.2cm、195は、復元口径10.0cm、196は、復元口径10.0cm、197は、復元口径10.8cm／器高2.3cm、198は、復元口径13.0cm、199は、復元口径11.0cm、200は、復元口径11.2cm、201は、復元口径12.0cm、202は復元口径13.0cmを測る。

203・204は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群と分類されるものである。203は、復元口径13.3cmを測る。204は、口縁部が外反し、小野分類染付碗E群の中でもE-IX類と細分されるもので復元口径17.0cmを測る。外面に花文・口縁部内面には四方襷文が施される。

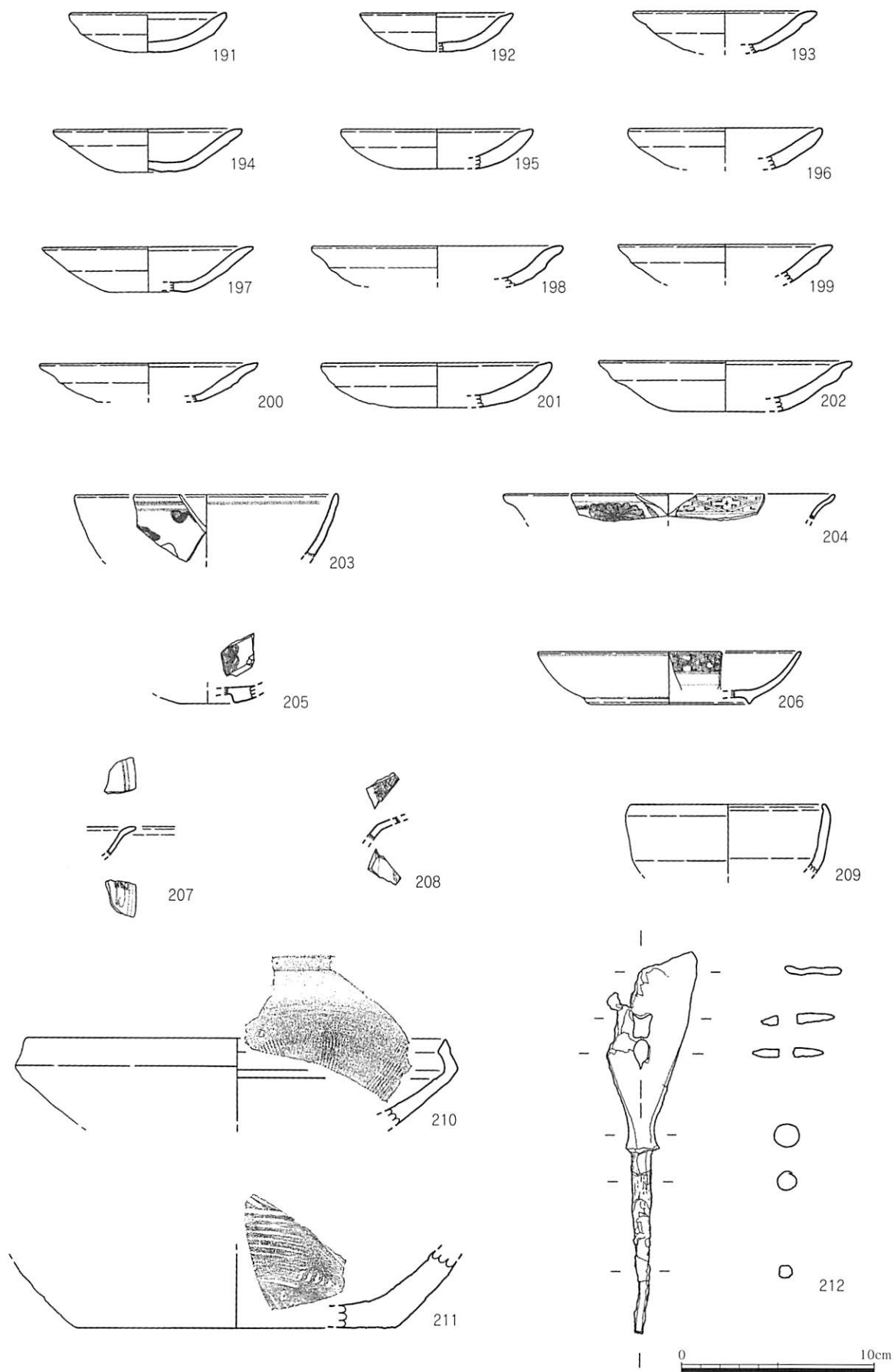
205～208は、中国産染付皿である。205は、小野分類において染付皿C群に分類されるもので、復元高台径2.8cmを測る。206は、小野分類において染付皿E群に分類されるもので、復元口径13.5cm／器高2.65cm／高台径8.4cmを測る。口縁部外面には一重界線を内面には四方襷文が施される。207は、小野分類において染付皿B-1群に分類されるものである。208は、小野分類において染付皿F群に分類されるものと考えられる。

209は、唐津系陶器灰釉碗で、釉色は緑灰色に発色する。復元口径10.0cmを測る。

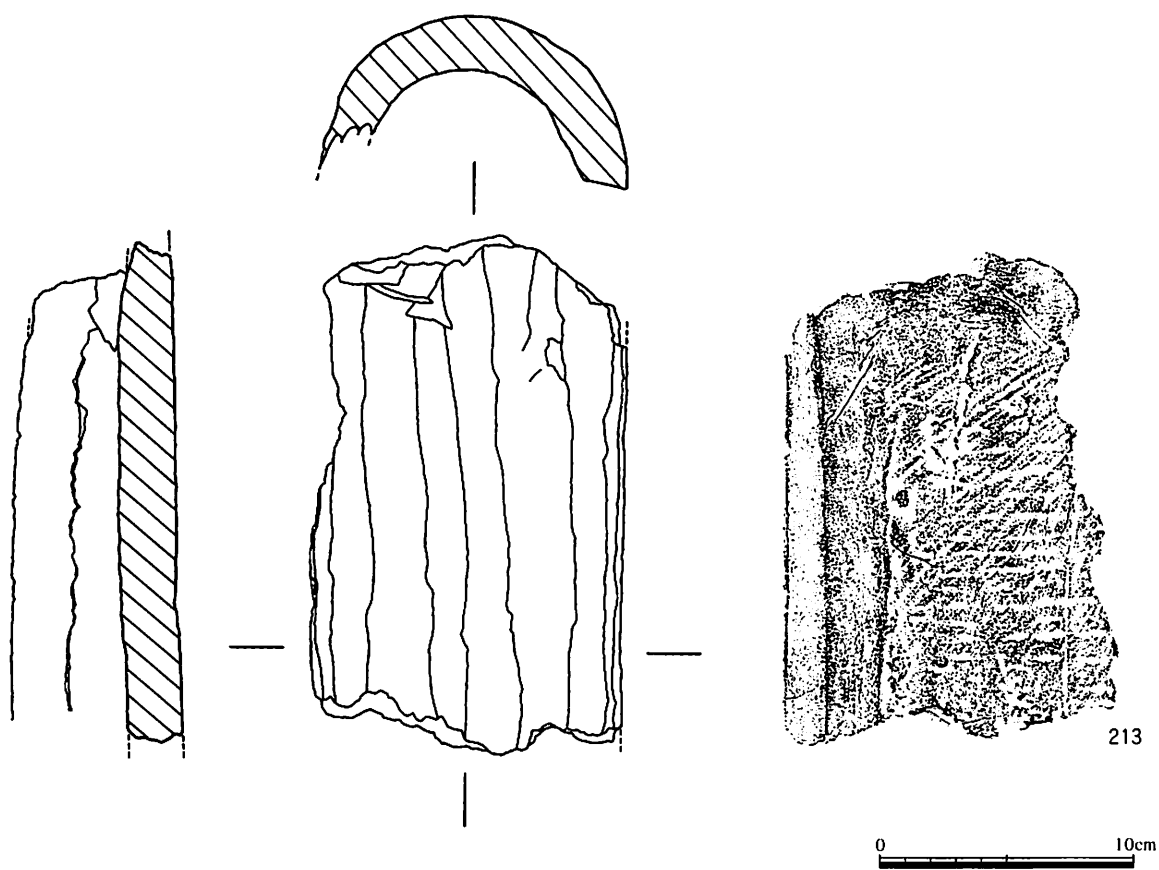
210・211は、備前産焼締陶器揃鉢である。210は、小柄なもので復元口径21.6cmを測り、211は、復元底径16.6cmを測る。

212は、鉄製刈又鍬である。透かし装飾を有し、茎には木質が錆着する。

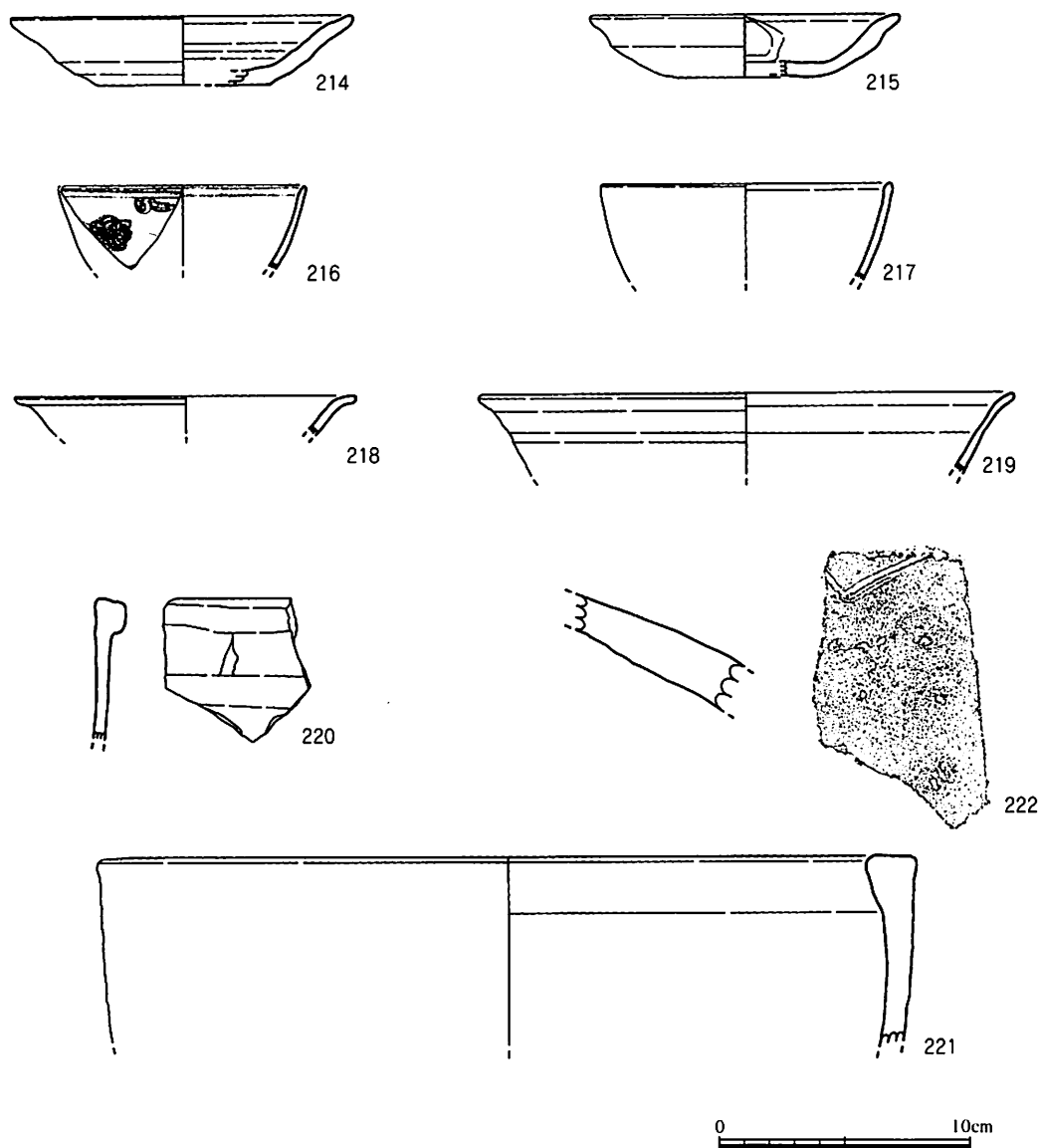
213は、丸瓦である。外面にはヘラ削りが内面にはコビキ痕が確認される。



第24図 SE260系列(SE261)出土遺物実測図③(1/3)



第25図 SE260系列(SE261)出土遺物実測図④(1/3)



第26図 SE260系列(SE263)出土遺物実測図⑤(1/3)

SE263(機能時)

第26図214～222は、SE263出土遺物である。遺構最下面において遺物が検出されているが、廃絶時の流入品である可能性も否定できない。

214は、ロクロ成形土師器皿である。法量は、復元口径13.3cm／器高2.75cm／復元底径6.8cmを測る。

215は、京都系土師器皿で、法量は、復元口径12.1cm／器高2.5cmを測る。土師器内面に、ナデ上げ痕が確認される。

216は、中国産染付碗で、小野分類において染付皿E群に分類されるものである。

217は、中国産白磁碗で、上田分類において白磁E群に分類されるものである。復元口径11.5cmを測る。

218は、中国産白磁皿で、上田分類において白磁E群に分類されるものである。復元口径13.5cmを測る。

219は、朝鮮産陶器灰釉碗で復元口径21.3cmを測る。口縁部が外反するもので、SE270出土遺物との接合が確認された。

220は、瓦質土器鍋である。外面に、削り調整を施している。221は、瓦質土器火鉢で復元口径32.6cmを測る。

222は、備前産焼締陶器甕である。製作時に施された刻書が認められる。

SE270系列

井戸内から、土師質土器製の井戸杵片が出土している。井戸遺構の25%未満のみの調査であったので全貌は不明であるが、廃絶に関しては、やはり、掘り返しをおこない、井戸廃絶時に井戸杵等を除去した後、念入りに埋め戻されている可能性がある。或いは、隣接して井戸遺構が掘削されている可能性も考えられる。

土師質或いは瓦質性の井戸杵に関しては、中世大友府内町跡では、現状で第3次調査での一例のみが知られる。全国的には、大阪府堺市の堺環濠都市遺跡の例が著名で、14世紀頃から、その存在が知られる。

SE270(掘削時)

第27図223～241は、SE270出土遺物である。

223～233は京都系土師器皿である。223は、復元口径8.5cm／器高2.1cm、224は、復元口径9.0cm／器高2.1cm、225は、復元口径9.4cm、226は、復元口径9.6cm、227は、復元口径10.6cm／器高1.95cm、228は、復元口径10.6cm、229は、復元口径10.9cm／器高2.5cm、230は、復元口径11.0cm／器高2.75cm、231は、復元口径12.0cm／器高2.4cm、232は、復元口径12.2cm／器高2.1cm、233は、復元口径12.3cmを測る。

234は、中国産染付碗である。口縁部が外反し、小野分類染付碗E群の中でも、E-IX類と細分されるものである。

235・236は、中国産染付皿である。236は、高台径8.8cmを測り、内底面に鳥文が施され、高台内には円形の落款銘が施されていたと考えられる。

237～239は、備前産焼締陶器である。237・238は、搦鉢で、238には交叉搦り目が確認できる。239は、瓶の底部であると推定される。底部は、底径8.8cmを測り、製作時の刻書が認められる。

240は、結晶片岩製の用途不明石製品である。

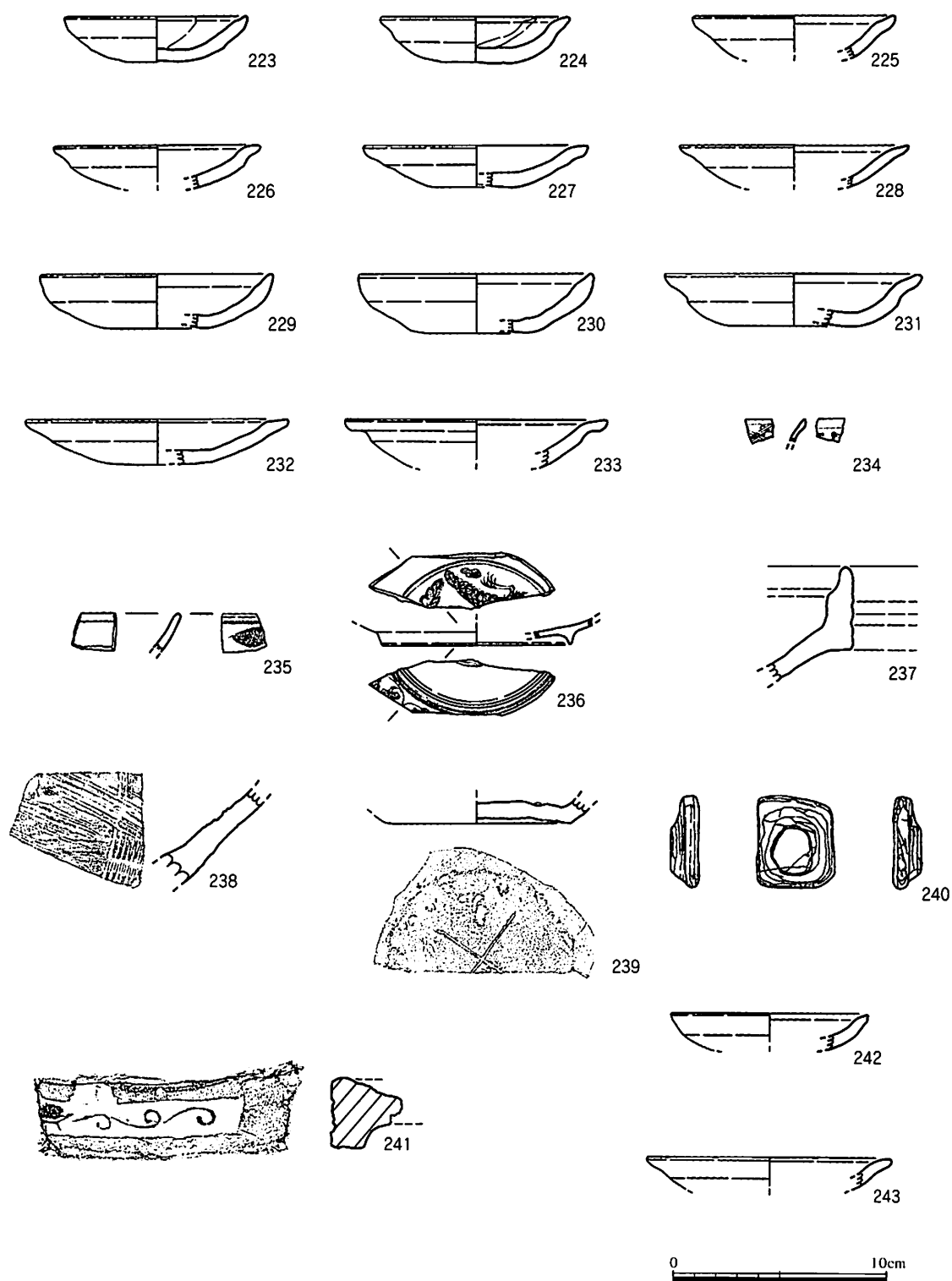
241は、軒平瓦である。中央に宝珠文らしき紋様が確認できる。

SE312(機能時・廃絶時)

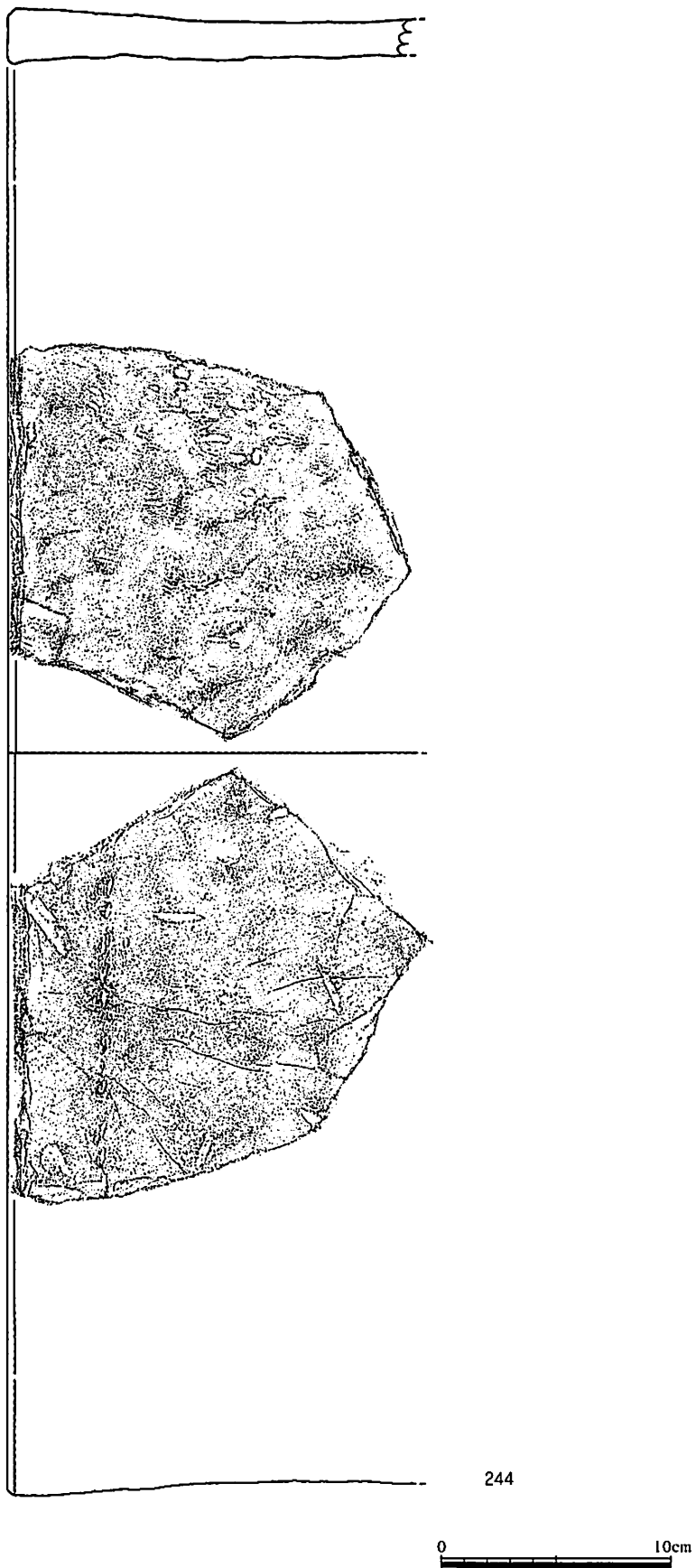
第27図242・243は、遺構最下面において遺物が検出されているが、廃絶時の流入品である可能性も否定できない。第28図244などは、井戸廃絶時のものであろう。

242・243は、京都系土師器皿である。それぞれ、242は、復元口径9.2cm／器高1.7cm、243は、復元口径11.3cm／器高1.5cmを測る。

244は、土師質の井戸杵で、復元口径64.0cmを測る。胴部外面に、製作時のものと考えられる縄目痕が観察される。また、内面には、使用時のものと考えられる傷跡が確認される。



第27図 SE270系列(SE270/SE312)出土遺物実測図①(1/3)



第28図 SE270系列(SE312)出土遺物実測図②(1/3)

2. 土坑遺構

土坑遺構に関しては、SKとSXの調査記号を付しているが、SKを円形土坑、SXを長土坑としている。概ね、円形土坑群は遺跡西側に、長土坑群は遺跡南側に配置されている。

土坑群は、井戸遺構と同様に、中央部東側の4-J05グリッド南半と4-K05グリッド北半を避けるように、遺構の配置がなされている。この遺構配置も、やはり、建造物を避けた結果としての遺構配置であると推定されるものである。土坑群の過密性も、都市遺跡に特有の遺構形成状況であるといえる。日常的な廃棄行為を繰り返していた傍証となる現象であろう。

また、調査区内南側には、SX341・SX399・SX429と長土坑群が展開する。『戦国時代の府内復元想定図』を参照すると調査区外南側には、御北町筋の道路が敷設されている想定となっているため、SX399の方位軸もN-275°-W方位軸と、二之大路のN-5°-E方位軸と直角に交わる方位軸であるため、街区の方位軸に規制された遺構配置であると考えられる。

SX121

遺構は、調査区の南側に位置する。遺構形状は、平面プランが東西1.5m、南北1.0mの長方形を呈する。深さは、約30cmである(第29図参照)。

第30図245～261、第31図262～271、第32図272～279は、SX121出土遺物である。

245は、ロクロ成形土師器小皿である。復元口径7.8cm／器高1.7cm／復元底径5.1cm。

246～260は、京都系土師器である。246は、復元口径9.0cm／器高1.9cm、247は、復元口径10.0cm／器高2.2cm、248は、復元口径10.0cm／器高1.6cm、249は、復元口径10.6cm／器高2.3cm、250は、復元口径10.6cm／器高2.5cm、251は、復元口径10.7cm、252は、復元口径10.7cm／器高2.4cm、253は、復元口径10.8cm、254は、復元口径11.5cm、255は、復元口径12.0cm／器高2.15cm、256は、復元口径11.4cm、257は、復元口径12.0cm、258は、復元口径12.6cm、259は、復元口径12.9cm／器高2.8cm、260は、復元口径13.4cm／器高2.2cmを測る。

261は、燭台形土師質土器で、復元底径7.4cmを測る。

262～268は、中国産染付碗である。262～268は、小野分類において染付碗E群に分類されるものである。262は、復元口径10.2cm／器高5.3cm／高台径4.2cmを測る。263は、復元口径14.7cm／器高7.3cm／高台径6.0cmを測る。264は、外面に馬文を描き、復元口径10.7cmを測る。265は、復元口径12.5cmを測る。266は、口縁部が外反し、小野分類において染付碗E群の中でもE-IX類に細分されるもので、復元口径14.5cmを測る。外面には、暗花文装飾、口縁部内面には四方禪文が施される。267・268は、高台部内底面が、いわゆる饅頭心形状を呈し、高台部内底には落款銘が確認される。267は、復元高台径5.2cmを測る。268は、復元高台径5.1cmを測る。

269は、中国産染付大皿で、復元高台径15.8cmを測る。内底面には草花文が施される。

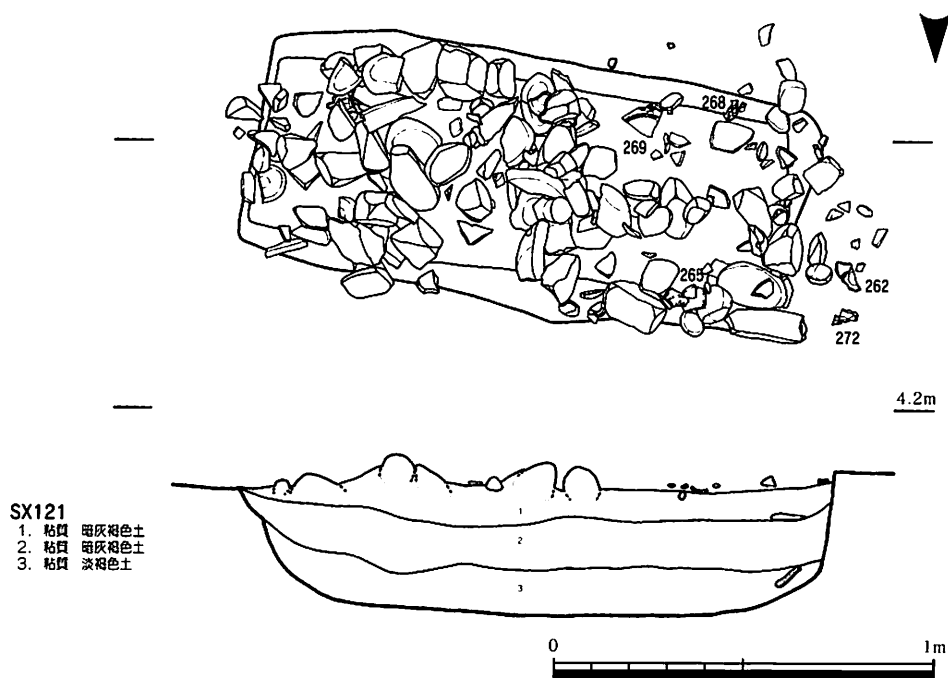
270は、中国産染付大鉢で、漳州窯系の製品であると思われる。

271は、中国産青磁碗で、復元底径5.3cmを測る。外面に、串描き文様が確認される。

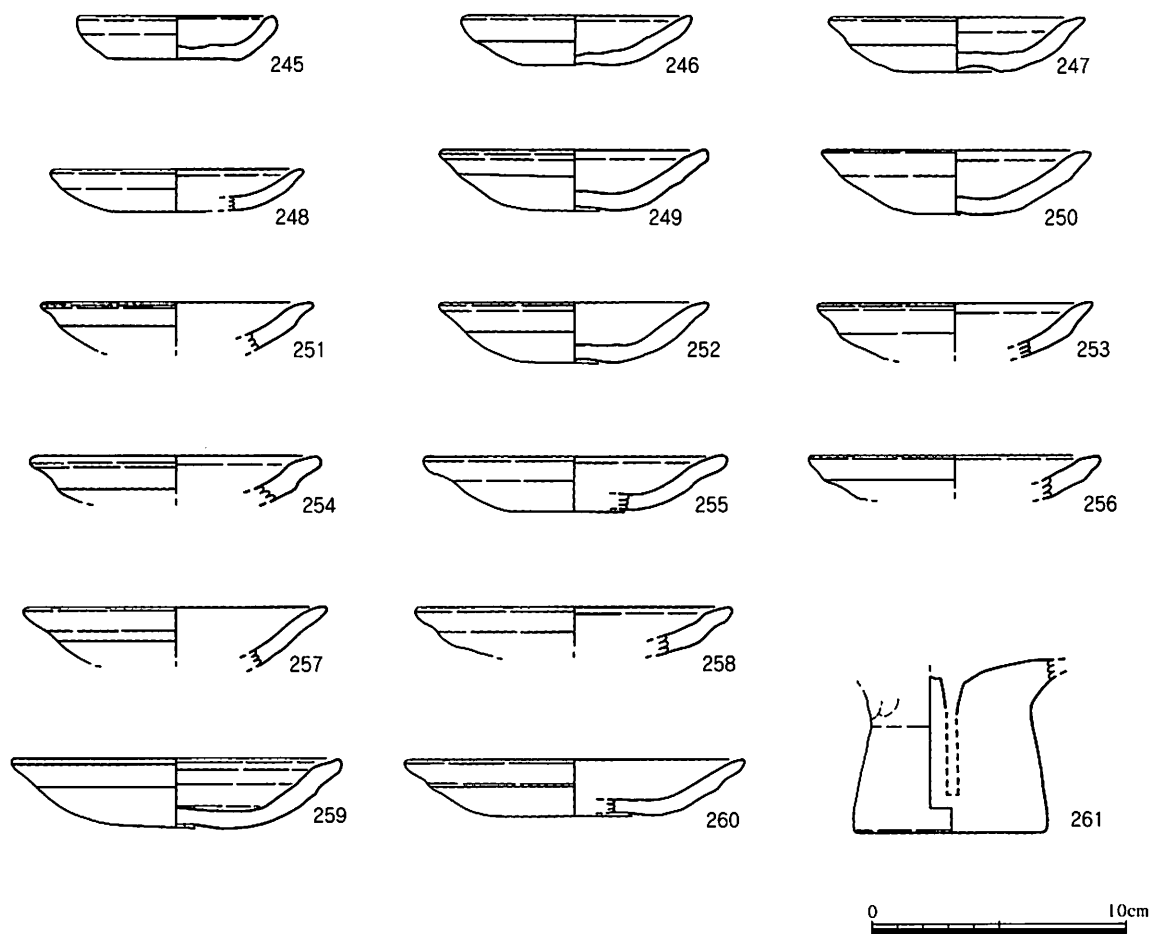
272～275は、華南彩釉陶鶴形水注である。口径は、3.9cmを測る。273～275は胴部である。

276・277は、備前産焼締陶器瓶である。276は、体部に製作時に施された△の刻書が確認される。277は、復元底径6.4cmを測る。278は、備前産焼締陶器描鉢である。279は、手捏ね成形の埴塼で、復元口径12.4cmを測る。

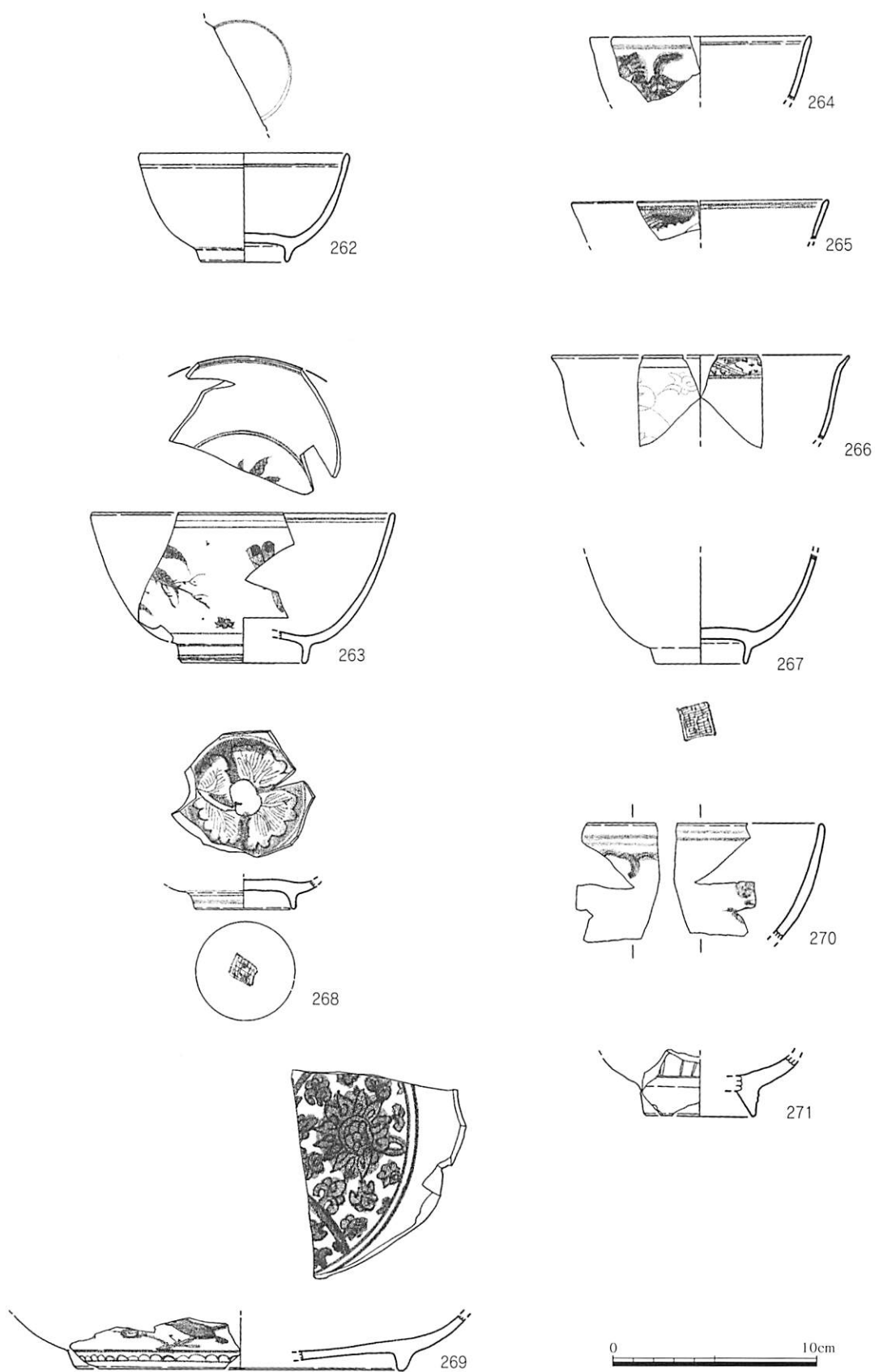
また、当遺構からは、青銅製の鹵形分銅が出土している。詳細は、特殊遺物の項にて後述する。



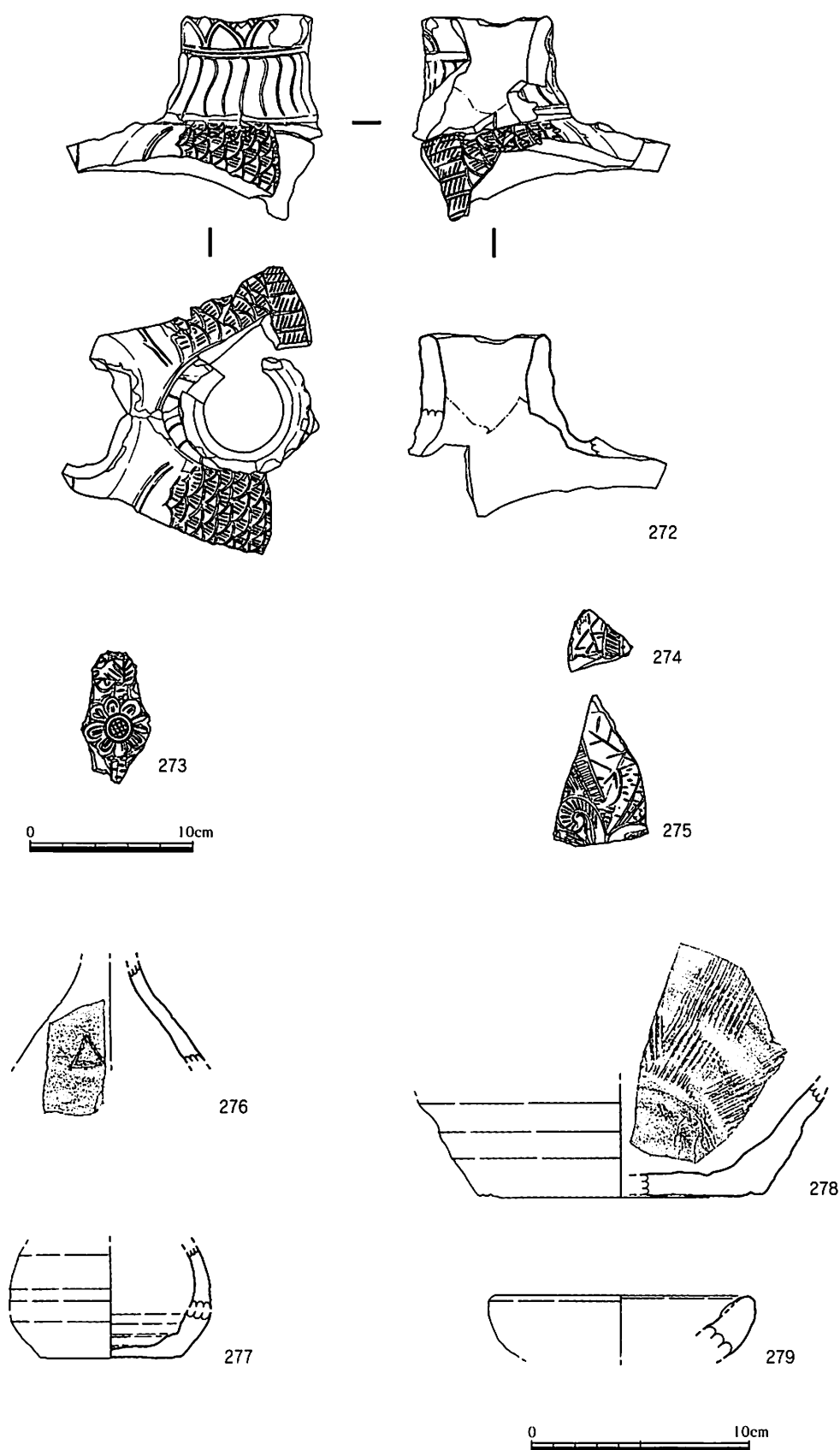
第29図 SX121遺構実測図(1/20)



第30図 SX121出土遺物実測図①(1/3)



第31図 SX121出土遺物実測図②(1/3)



第32図 SX121出土遺物実測図③(1/3)

SK106

SK312・SK384・SX446を削平する。

第33図280は、京都系土師器皿で、復元口径11.0cmを測る。

SK134

SK134は、SE100に掘削を受け、SX341を掘削する。

第34図281は、ロクロ成形土師器小皿で、復元口径7.6cm／器高1.35cm／復元底径6.6cmを測る。

SK136

SK136は、楕円形の平面プランを呈する土坑で、SK237・SP287・SK137を掘削する(第35図参照)。

第36図282は、京都系土師器皿で、復元口径11.4cmを測る。283は、京都系土師器皿で、復元口径11.8cmを測る。284は、中国産染付皿で、小野分類において染付皿E群に分類されるものである。復元口径12.4cmを測る。

SK137

SK137は、SK136に掘削を受ける(第37図参照)。

遺構からは、人頭大以上の礫が1点、拳大の礫が数点出土している。人頭大の礫に関しては、礎石に用いられたかのような平坦面が確認される。しかし、厚みを有する為、礎石には向かないものと思われる。平坦面に高打痕が確認されるため金床石のように、平坦面を何らかの用途に用いたものである可能性も考えられる。周辺遺構から、鞆の羽口や埴塙も出土しているため、周辺に鍛冶関連の遺構が展開する可能性も考えられる。

第38図285は、豊後特有の京都系土師器坏で、復元口径11.6cm／器高3.25cmを測る。

SK145

第39図286は、京都系土師器皿で、復元口径12.5cmを測る。

SK150

SK150は、円形の平面プランを呈する土坑である(第40図参照)。

第41図287は、土錘である。長軸5.0cm、短軸1.1cmを測る。

SX203

SX203は、東西を長軸とする長土坑で、SK150に掘削され、SE230を掘削する(第42図参照)。

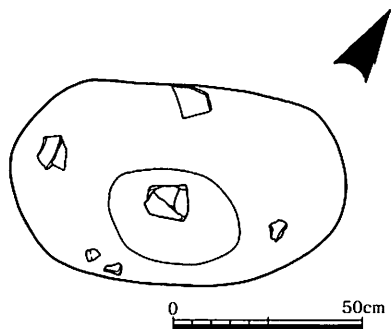
第43図288・289は、京都系土師器皿である。それぞれ、288は復元口径12.0cm、289は復元口径12.0cm／器高2.4cmを測る。

SX204

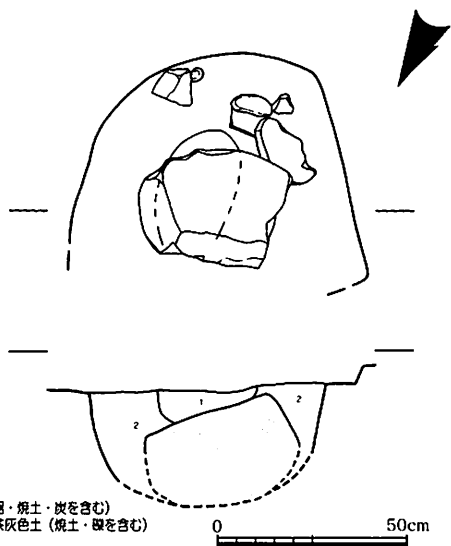
SX204は、東西を長軸とする長土坑で、SK220・SX234・SE238を掘削する(第44図参照)。

第45図290～292は、京都系土師器小皿である。それぞれ、290は、復元口径9.0cm／器高1.8cm、291は、復元口径10.4cm、292は、復元口径10.9cmを測る。

293は、朝鮮産陶器碗で、復元口径13.8cmを測る。



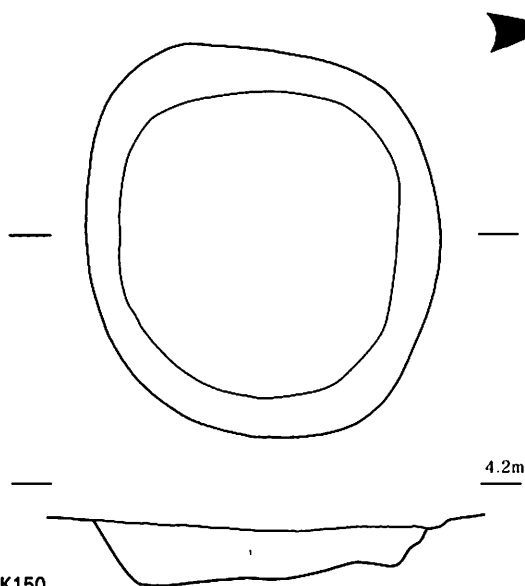
第35図 SK136遺構実測図(1/20)



SK137

1. 茶褐色土 (土器・灰土・炭を含む)
2. やや軟質 淡茶灰色土 (灰土・炭を含む)

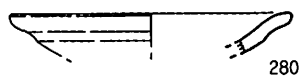
第37図 SK137遺構実測図(1/20)



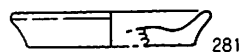
SK150

1. 砂質 灰褐色土 (淡灰褐色粘質ブロック・炭・灰土を含む)

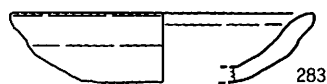
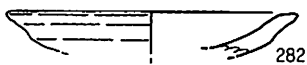
第40図 SK150遺構実測図(1/20)



第33図 SK106出土遺物実測図(1/3)



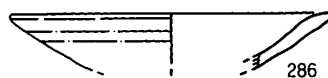
第34図 SK134出土遺物実測図(1/3)



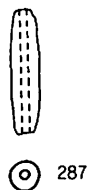
第36図 SK136出土遺物実測図(1/3)



第38図 SK137出土遺物実測図(1/3)

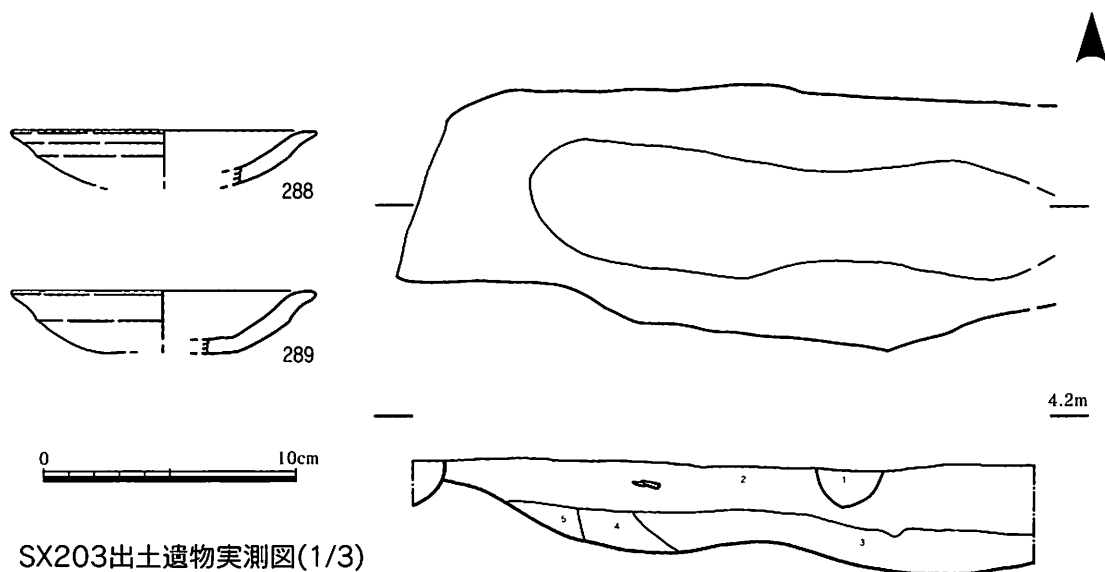


第39図 SK145出土遺物実測図(1/3)



第41図 SK150出土遺物実測図(1/3)





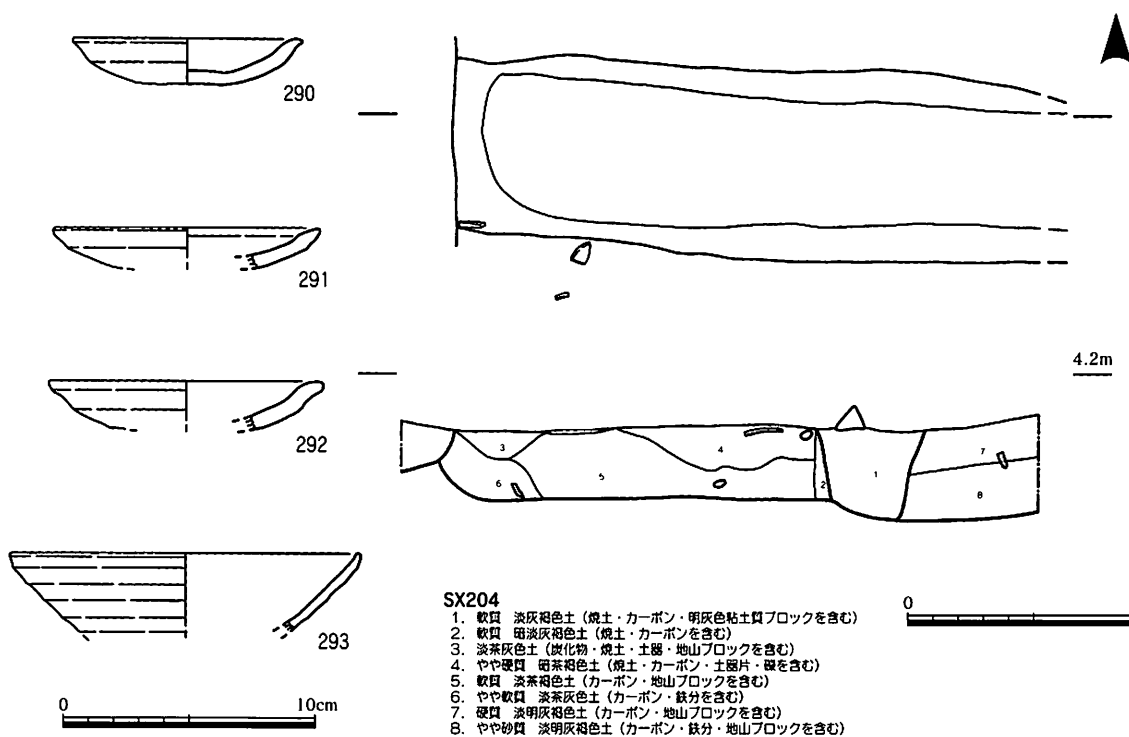
第43図 SX203出土遺物実測図(1/3)

SX203

1. やや軟質 淡褐色灰土（炭化物を含む）
2. 硬質 淡褐色灰土（炭化物・灰土・土器・小円礫を含む）
3. やや砂質 淡褐色土（炭化物・灰土・土器・地山ブロックを含む）
4. やや軟質 淡褐色土（灰土・粘質土ブロックを含む）
5. やや硬質 暗褐色土

0 1m

第42図 SX203遺構実測図(1/3)



SX204

1. 軟質 淡褐色土（灰土・カーボン・明灰色粘土質ブロックを含む）
2. 軟質 暗褐色土（灰土・カーボンを含む）
3. 淡褐色土（炭化物・灰土・土器・地山ブロックを含む）
4. やや硬質 暗褐色土（灰土・カーボン・土器片・礫を含む）
5. 軟質 淡褐色土（カーボン・地山ブロックを含む）
6. やや軟質 淡褐色土（カーボン・鉄分を含む）
7. 硬質 淡明褐色土（カーボン・地山ブロックを含む）
8. やや砂質 淡明褐色土（カーボン・鉄分・地山ブロックを含む）

0 1m

第45図 SX204出土遺物実測図(1/3)

第44図 SX204遺構実測図(1/3)

SK220

SK220は、円形の平面プランを呈する土坑である(第46図参照)。

遺構からは、人頭大以上の礫が2点、拳大の礫が2点出土した。人頭大の礫の内1点は、SK137から出土したものに類似し、礎石に用いられたかのような平面が確認される。しかし、これも厚みを有する為、礎石には向かないものと思われる。やはり、平坦面に高打痕が確認されるため金床石のように、平坦面を何らかの用途に用いたものである可能性が考えられる。周辺遺構から、鞆の羽口や埴塙も出土しているため、周辺に鍛冶関連の遺構が展開する可能性も考えられる。

第47図294～297は、SK220出土遺物である。

294は、ロクロ成形土師器小皿で、復元口径7.2cm／器高1.3cm／底径6.1cmを測る。295は、京都系土師器小皿で、復元口径9.0cm／器高1.9cmを測り、灯明芯痕が確認される。

296は、中国産染付皿で、小野分類においてE群に分類されるものである。復元口径11.8cmを測る。

297は、備前産短徑壺で、復元口径31.2cmを測る。

SX234

第48図298・299は、SX234出土遺物である。

298は、京都系土師器小皿で、復元口径9.6cm／器高2.45cmを測る。

299は、中国産染付皿で、小野分類において染付皿E群に分類されるもので、復元口径13.8cmを測る。

SK237

SK237は、円形の平面プランを呈する土坑である(第49図参照)。

第50図300・301は、SK237出土遺物である。

300は、京都系土師器坏で、復元口径11.5cm／器高3.1cmを測る。

301は、京都系土師器皿で、復元口径12.2cm／器高2.35cmを測る。

SX272

SX272は、遺構からは多数の河原石が出土した(第51図参照)。河原石は、意図的に全ての上面をほぼ同レベルにそろえたものと考えられる。構築法としては、浅い土坑内に礫の平坦面を上にして配置したもので、礫の間には青灰砂が流れ込んでいる。栃木県の下古館遺跡の調査事例から、出入り口的な機能を果たしていたものと考えられる。

SK275

SK275は、楕円形の平面プランを呈す土坑である(第52図参照)。

第53図302～317は、SK275出土遺物である。

302は、ロクロ成形土師器小皿で、復元口径6.2cm／器高1.85cm／復元底径3.0cmを測る。

303～306は、京都系土師器皿である。それぞれ、303は、復元口径8.4cm、304は、復元口径9.0cm／器高2.05cm、305は、復元口径9.5cm／器高2.0cm、306は、復元口径11.6cm／器高1.9cmを測る。

307・308は、中国産染付碗で、小野分類においてE群に分類されるものである。307は、復元口径10.1cmを測る。308は、口縁部が外反し、小野分類において染付碗E群の中でもE-Ⅸ類に細分されるものである。

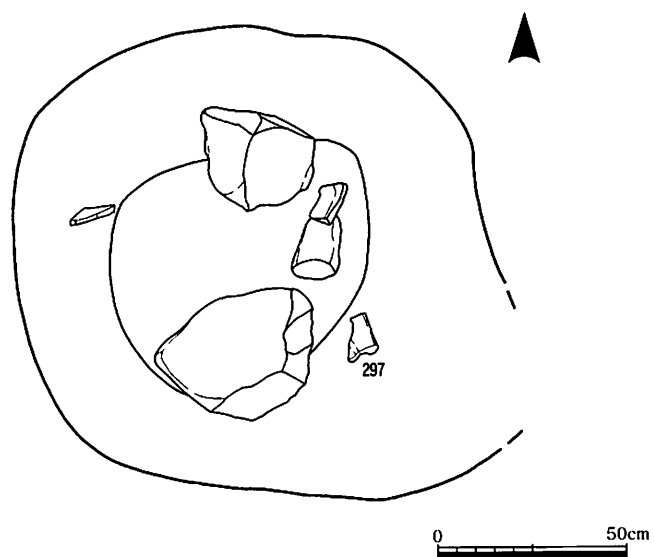
309～312は、中国産染付皿である。

309は、口縁部内面に四方襷を施し、復元口径12.6cmを測る。

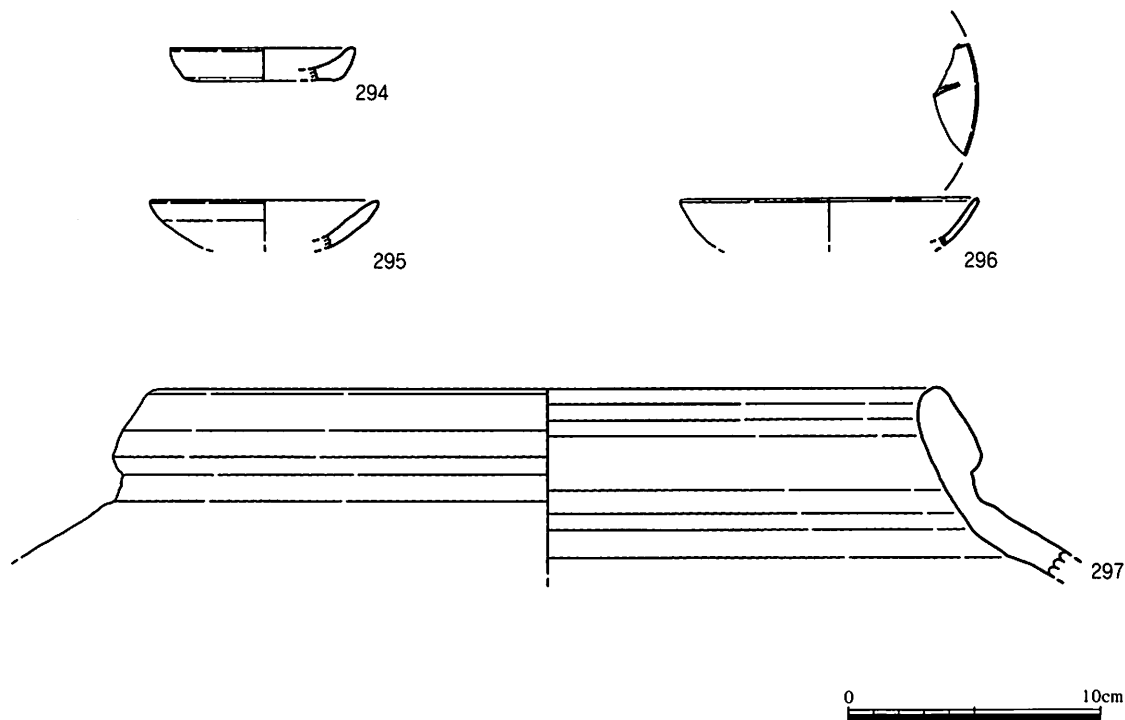
311は、内底面蛇ノ目軸ハギで、漳州窯系の製品である可能性があり、復元口径10.4cmを測る。

312は、小野分類において染付皿F群に分類されるものになると考えられ、外面には白戴線状の二重圈線を施す。

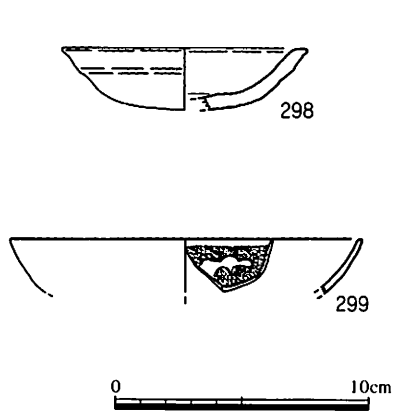
313は、中国産白磁皿で、上田分類において白磁E群に分類されるものである。復元口径13.6cmを測る。



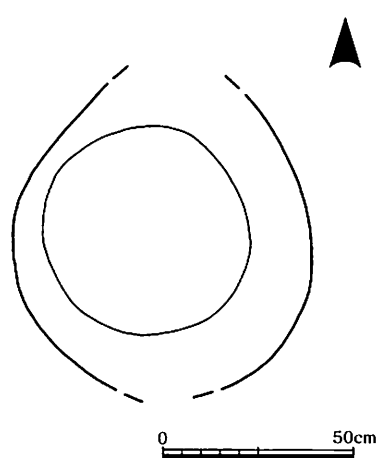
第46図 SK220遺構実測図(1/20)



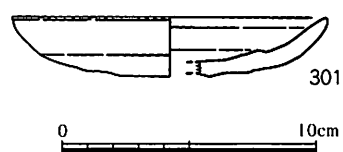
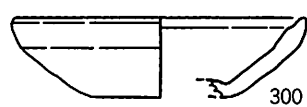
第47図 SK220出土遺物実測図(1/3)



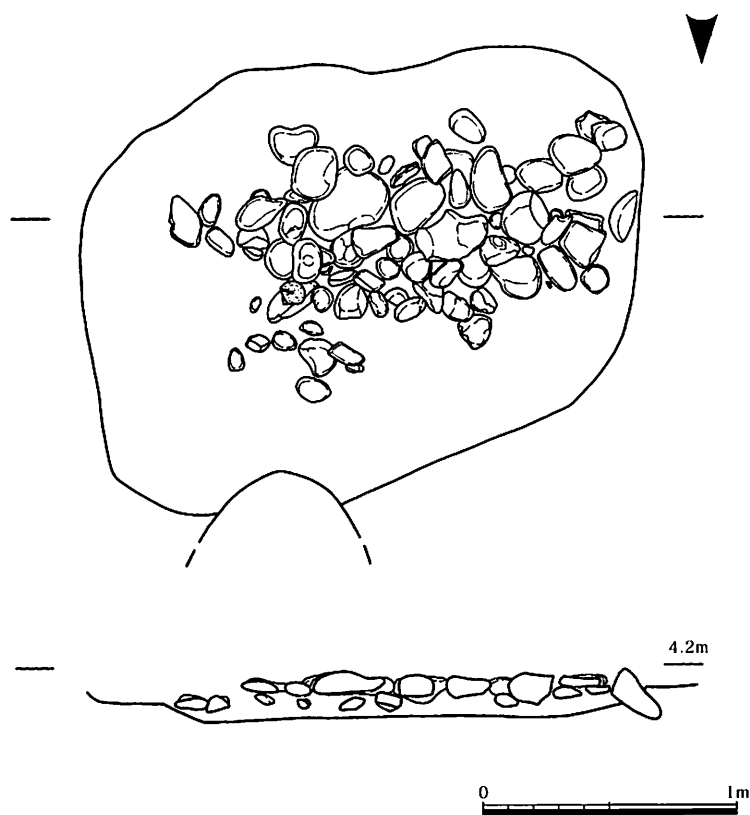
第48図 SX234出土遺物実測図(1/3)



第49図 SK237遺構実測図(1/20)



第50図 SK237出土遺物実測図(1/3)



第51図 SX272遺構実測図(1/20)

314は、華南彩釉陶鳥形水注で、鳥形水注の尾の部分と考えられる。釉薬は、緑釉と黄釉が確認できる。

315は、朝鮮産灰釉陶器碗で、復元口径15.6cmを測る。口縁部は、内湾するものである。

316は、備前産焼締陶器摺鉢である。復元底径は、13.0cmを測る。

317は、瓦質土器火鉢である。法量は、復元口径47.6cm／器高23.0cm／復元底径43.0cmを測る。本来、脚が3本～4本付くものと考えられる。

SK278

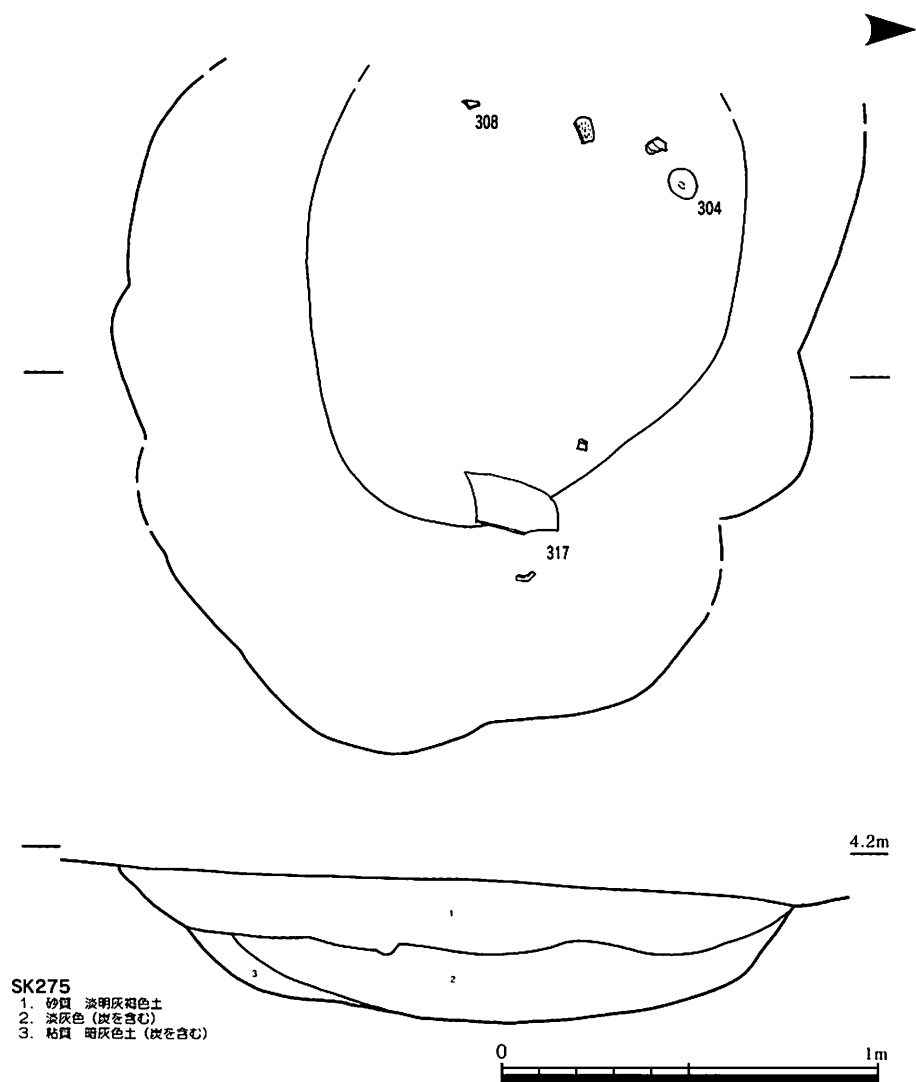
第55図318～321は、SK278出土遺物である。

318は、ロクロ成形土師器小皿で、法量は復元口径7.4cm／器高2.0cm／復元底径4.8cmを測る。

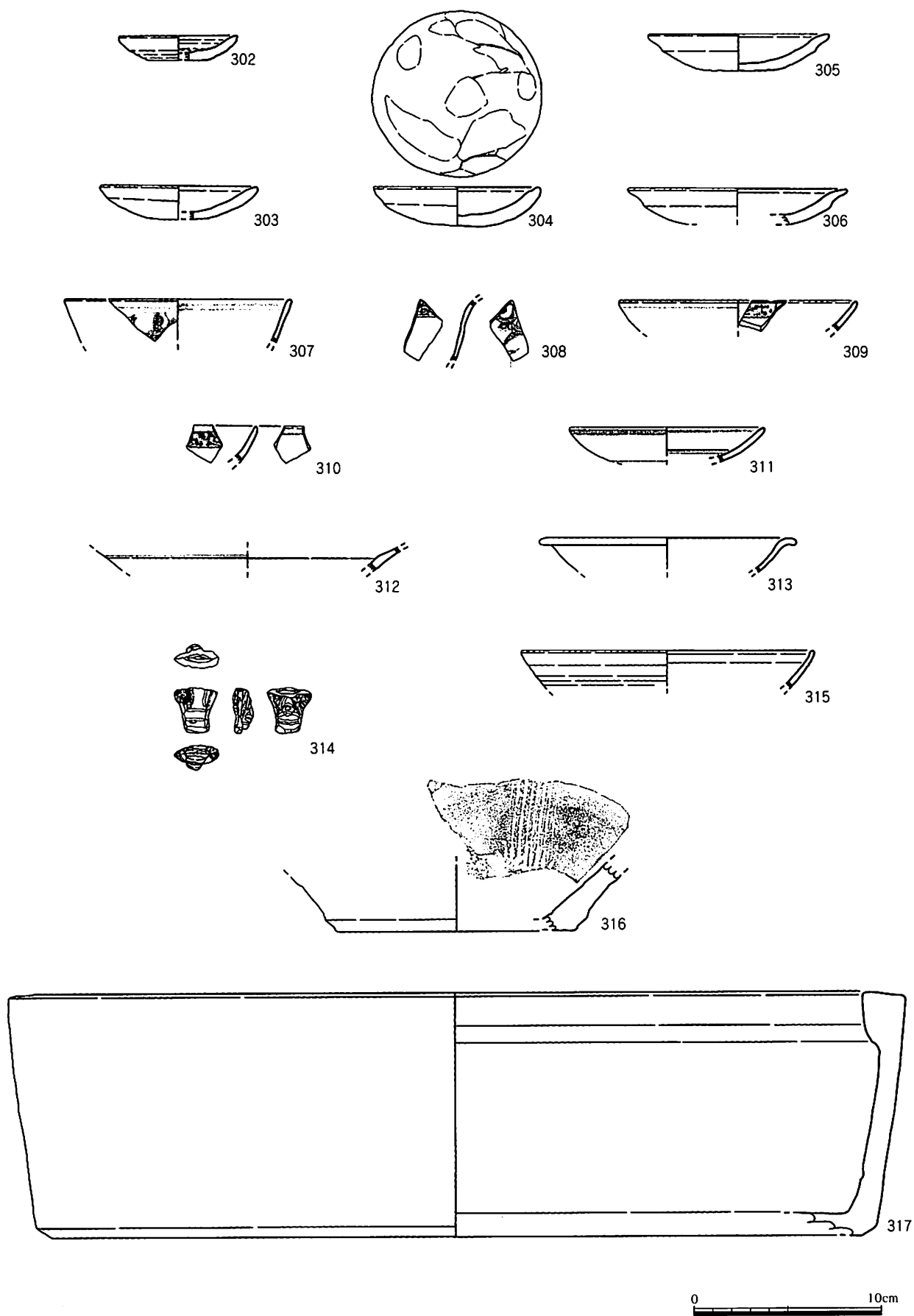
319は、京都系土師器小皿で、法量は復元口径10.4cm／器高2.3cmを測る。

320は、中国産白磁皿で、上田分類において白磁E群に分類されるものである。法量は復元口径10.8cmを測る。

321は、瓦質土器鍋の口縁部である。



第52図 SK275遺構実測図(1/20)



第53図 SK275出土遺物実測図(1/3)

SK286

第55図322・323は、SK286出土遺物である。

SK286は、隣接するSK287に掘削される。

322は、ロクロ成形土師器小皿で、復元口径9.2cm／器高2.2cm／復元底径4.9cmを測る。323は、ロクロ成形土師器皿で、復元口径11.2cm／器高2.4cm／復元底径5.8cmを測る。

SK287

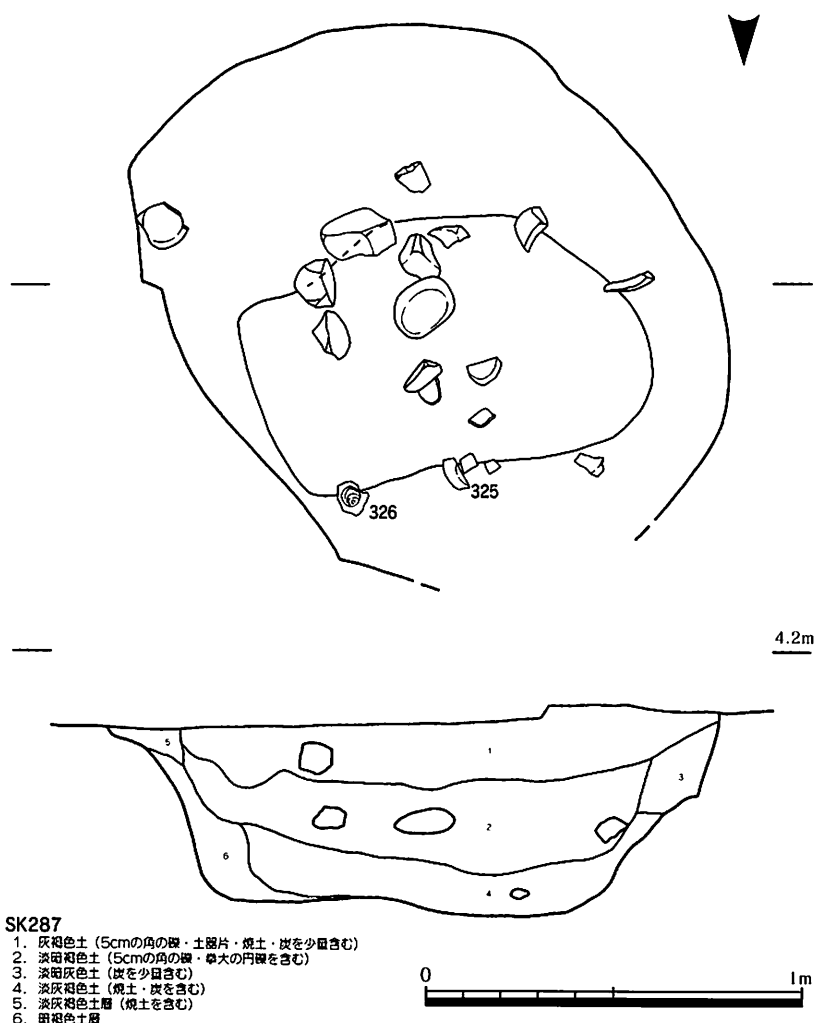
SK287は、楕円形の平面プランを呈する土坑である(第54図参照)。SK287は、隣接するSK286を削平する。

第55図324～329は、SK287出土遺物である。

324～329は、ロクロ成形土師器皿である。それぞれ、324は、復元口径12.0cm／器高2.3cm、325は、ロクロ成形土師器復元口径12.0cm／器高2.2cm、326は、復元底径5.8cmを測る。

327・328は京都系土師器皿である。327は小皿で、328は、京都系土師器大皿で、法量は、復元口径15.8cmである。

329は、土師質土器鍋の口縁部である。



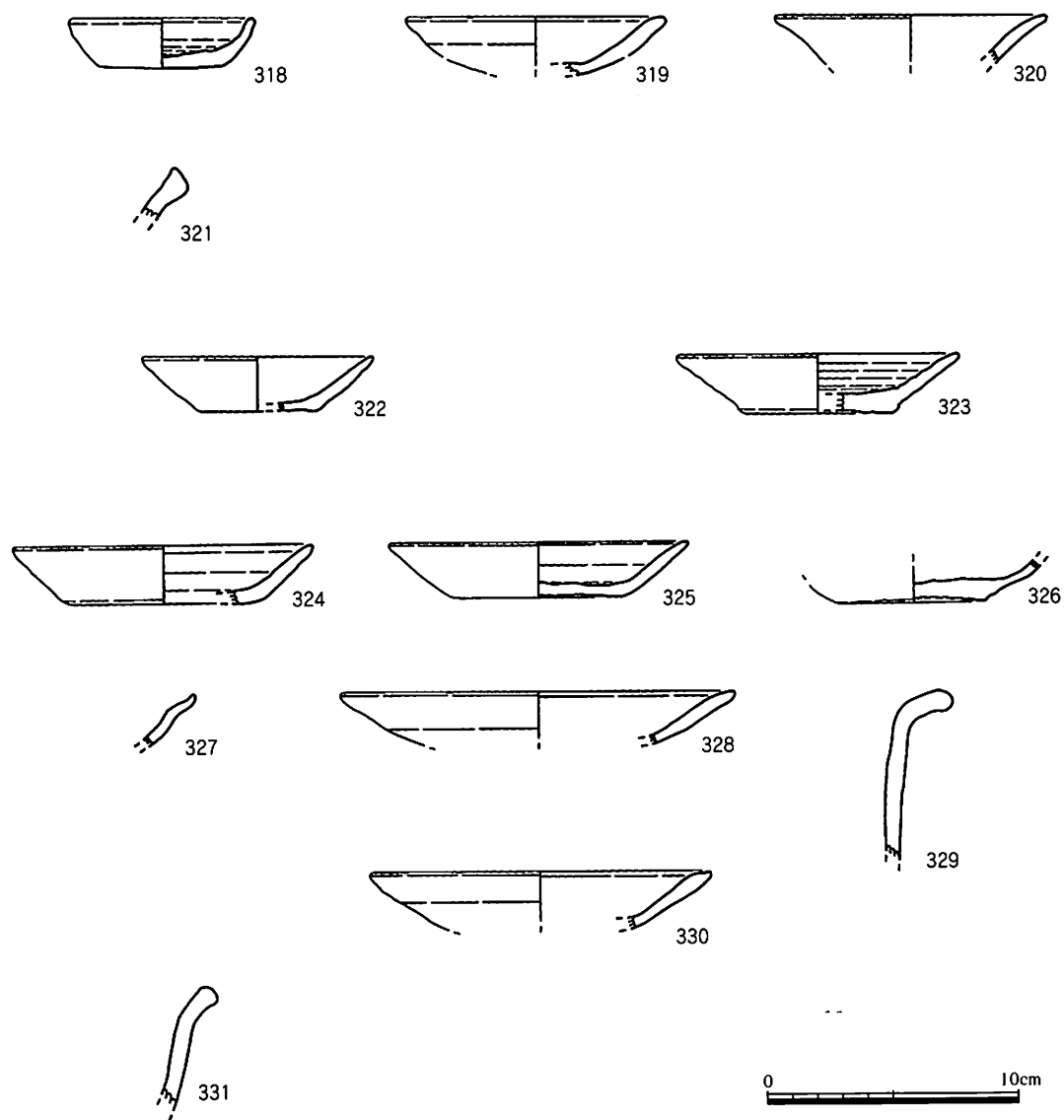
第54図 SK287遺構実測図(1/20)

SK289

第55図330は、京都系土師器で、復元口径13.6cm／器高2.3cmを測る。

SK313

第55図331は、土師質土器鍋の口縁部である。



第55図 SK278/SK286/SK287/SK289/SK313出土遺物実測図(1/3)

SX331

遺構は、楕円形の平面プランを呈する浅いものである(第56図参照)。遺構内からは、339の鉄器上に京都系土師器が伏せられた状態で検出された。

第57図332～339は、SX331出土遺物である。

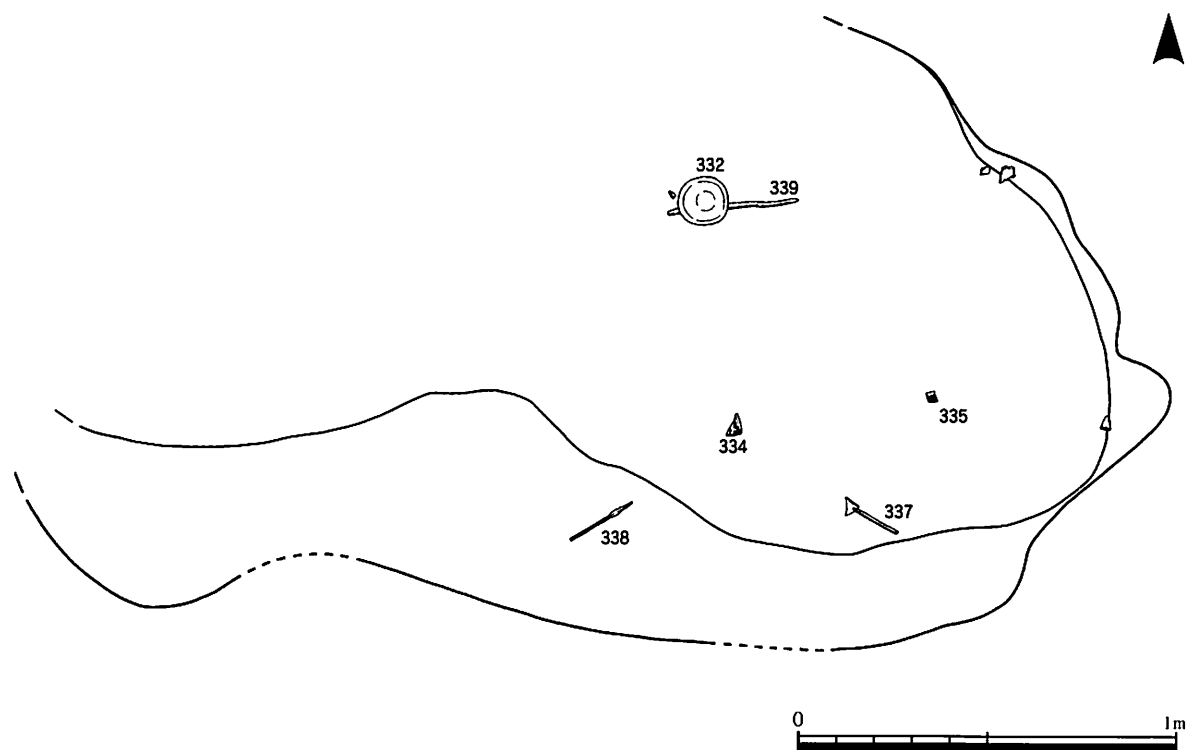
332・333は、京都系土師器皿である。332は、口径12.7cm／器高2.75cm、333は、復元口径11.8cmを測る。

334は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群の中でもE-IX類に細分されるもので、復元口径16.5cmを測る。絵付けは、外面に草花文、口縁部内面に四方禪文を施されている。

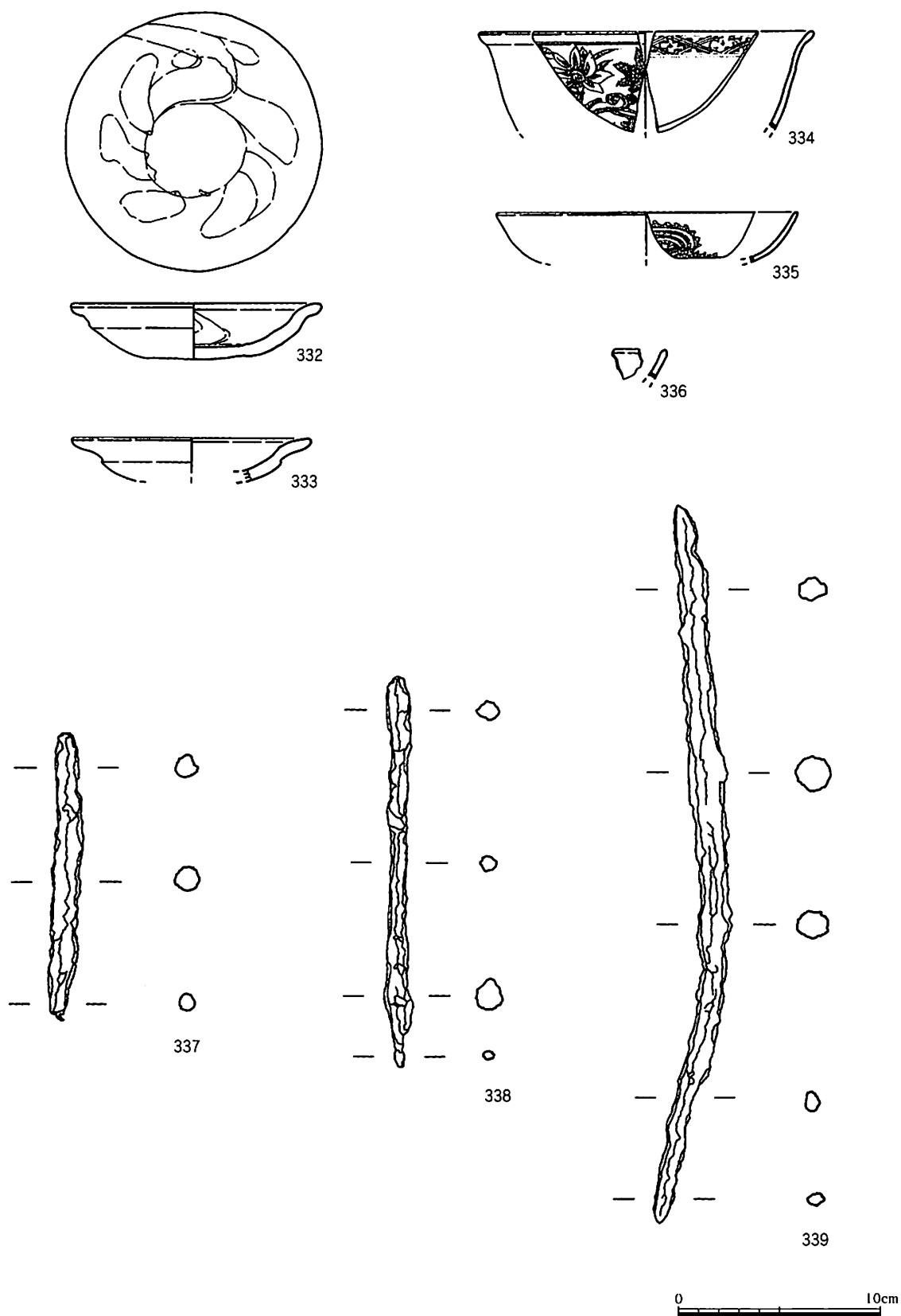
335は、中国産染付皿で、小野分類において染付皿E群に分類されるもので、復元口径15.0cmを測る。

336は、朝鮮産灰釉陶器碗の口縁部である。

337～339は、用途不明鉄器である。長軸はそれぞれ、337は14.0cm、338は19.2cm、339は35.3cmを測り、厚みは5mm～1.7mmを測る。



第56図 SX331遺構実測図(1/20)



第57図 SX331出土遺物実測図(1/3)

SK335

第58図340～348は、SX335出土遺物である。

340・341は、ロクロ成形土師器皿である。340は、復元口径10.8cm、341は、復元口径13.6cmを測る。342・343は、京都系土師器皿である。342は、復元口径9.4cm／器高1.9cm、343は復元口径11.0cmを測る。

344は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群に分類されるもので、復元口径13.5cmを測る。

345・346は、中国産染付皿である。345は、小野分類において染付皿B-1群に分類されるものである。346は、復元高台径8.0cmを測り、二次被熱が確認される。

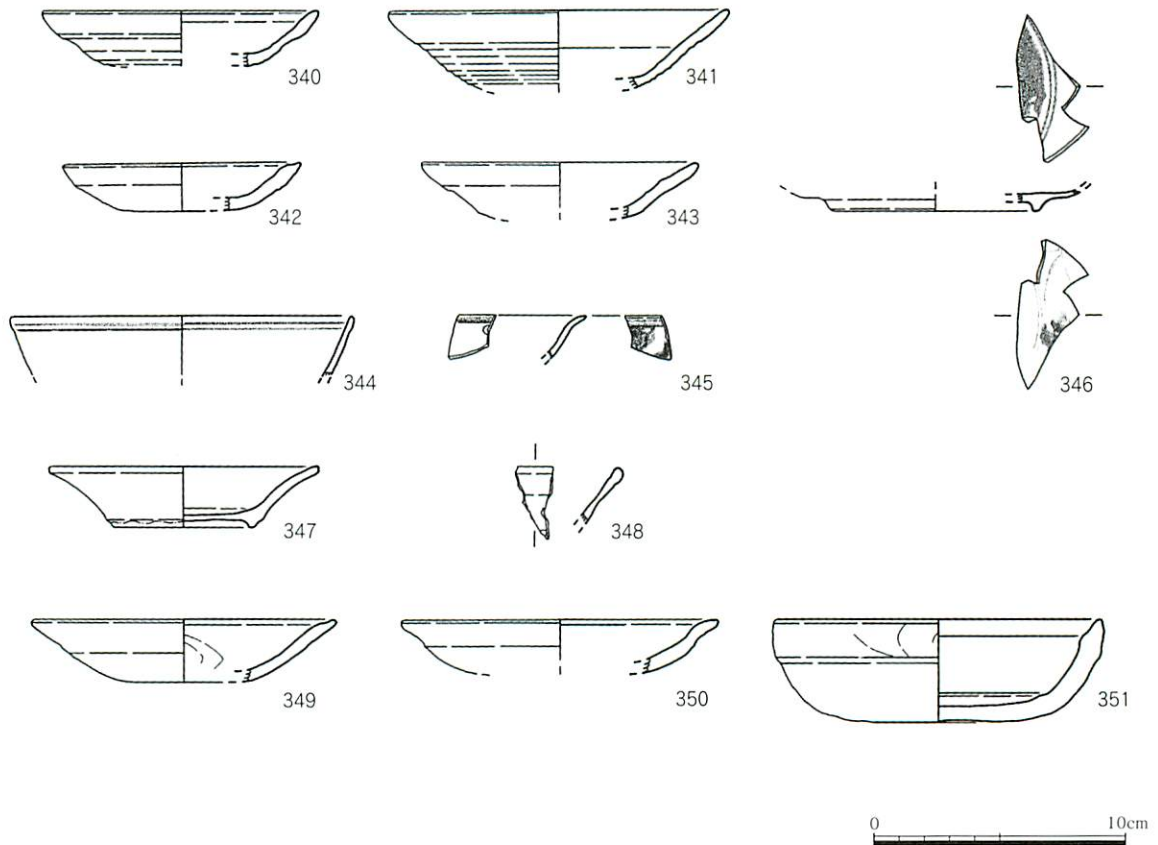
347は、中国産白磁皿で、上田分類において白磁E群に分類されているものである。法量は、復元口径10.6cm／器高2.4cm／復元高台径5.5cmを測る。

348は、朝鮮産灰釉陶器碗の口縁部である。

SK336

第58図349～351は、SK336出土遺物である。

349・350は、京都系土師器皿である。349は、復元口径12.0cm／器高2.4cm、350は、復元口径12.6cmを測る。351は、豊後特有の京都系土師器坏である。法量は、復元口径12.8cm／器高4.1cmを測る。



第58図 SK335/SK336出土遺物実測図(1/3)

SX341

SX341は、長方形の平面プランを呈する土坑である(第59図参照)。

第60図352～364は、SX341出土遺物である。

352は、ロクロ成形土師器で、復元口径12.1cm／器高2.7cm／復元底径7.7cmを測る。

353～356は、京都系土師器皿である。それぞれ、353は、復元口径9.0cm、354は、復元口径11.0cm、355は、復元口径11.0cm、356は、復元口径12.2cm／器高2.05cmを測る。

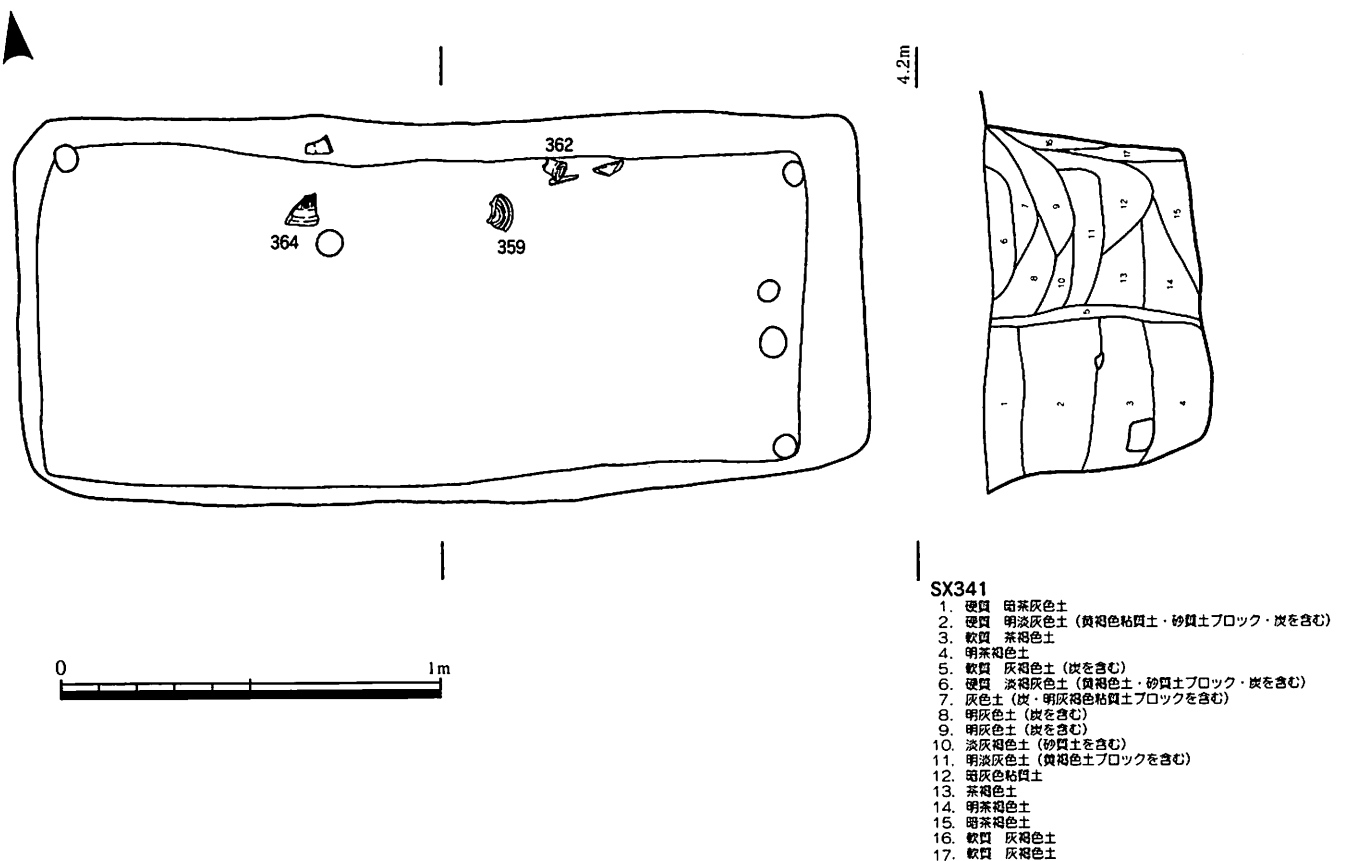
357・358は、中国産染付碗である。357は、小野分類において染付碗C群に分類されるもので、復元口径12.6cmを測る。358は、小野分類において染付碗E群に分類されるもので、復元口径14.4cmを測る。

359は、中国産染付皿である。漳州窯系の製品と考えられ、復元口径10.6cm／器高2.6cm／復元高台径6.0cmを測る。内底面には、蛇ノ目釉ハギが確認される。

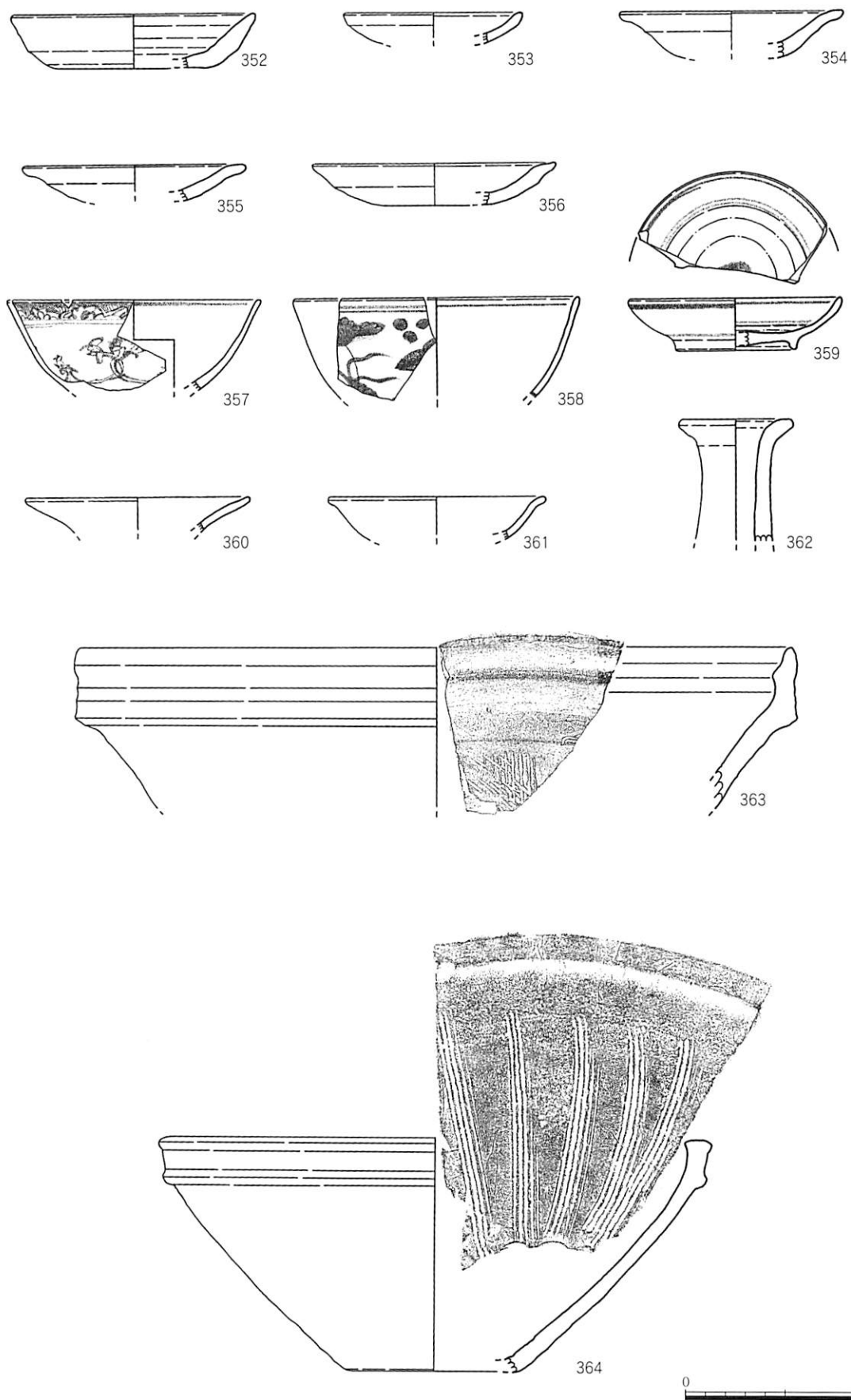
360・361は、中国産白磁で、共に上田分類において白磁E群に分類されるものである。それぞれ、360は、復元口径11.2cm、361は、復元口径11.0cmを測る。

362・363は、備前産焼締陶器である。362は、瓶で、口径5.7cmを測る。363は、摺鉢で復元口径35.4cmを測る。

364は、瓦質土器摺鉢で、復元口径27.6cm／器高11.65cm／復元底径9.9cmを測る。揃り目は、5本で1単位である。注ぎ口が残存している。



第59図 SX341遺構実測図(1/20)



第60図 SX341出土遺物実測図(1/3)

SK345

第62図365～367は、SK345出土遺物である。

365・366は、京都系土師器である。365は、京都系土師器特小皿で、復元口径4.9cm／器高1.8cmを測る。366は、京都系土師器小皿で、復元口径10.4cm／器高1.8cmを測る。367は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群に分類されているもので、復元口径11.9cmを測る。

SX351

第62図368は、SX351出土中国産青磁碗で、森田分類においてB－Ⅳ類に分類されるものである。法量は、復元高台径5.8cmを測る。内外面にヘラ描き紋様を施す。

SK358

第62図369は、SK358出土漳州窯系染付皿である。復元口径7.5cmを測る。当資料は、二枚の皿が焼成時に釉着した不良品であると考えられる。このような不良品は、本来、生産地遺跡において処分されるべきものであり、今後、このような資料或いは窯道具癒着資料の存在が、まさに、荷落・荷揚げ地、府内の実情を示すものと考えられる。

SX367

第62図370～372は、SX367出土遺物である。

370は、ロクロ成形土師器皿で、復元口径11.6cm／器高1.8cm／復元底径6.3cmを測る。

371は、京都系土師器皿で、復元口径13.0cm／器高2.1cmを測る。

372は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群に分類されるもので、復元口径11.9cmを測る。

SK375

SK375は、隣接するSE260系列に掘削され、SX403とSX417を掘削する。掘削順序としては、(新)SK260→SK375→SK403→SK417(旧)となる。SK375とSK417出土土師器は、ほぼ同時期のものと考えられる。しかし、後述するSK403は、染付皿F群を含むため、SK375出土遺物はSX417の混入品である可能性が高い。また、SK403とSE260出土土師器は、ほぼ同時期のものと考えられる。

第62図373～375は、SK375の出土遺物である、本遺構からは、京都系土師器皿が3点出土している。土師器の法量は、それぞれ、373は、復元口径13.4cm／器高2.1cm、374は、復元口径13.4cm／器高2.15cm、375は、復元口径13.2cm／器高2.3cmとなっている。

SK381

第62図376は、SX381出土京都系土師器皿で、復元口径13.0cm／2.1cmを測る。

SX383

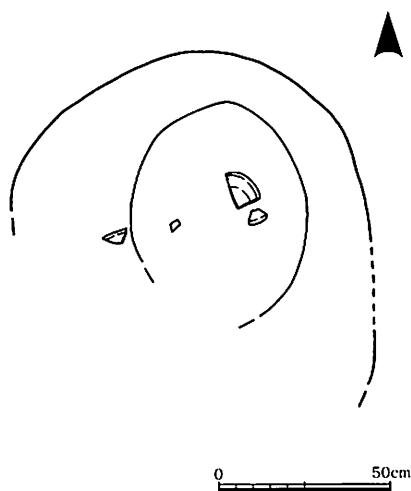
第62図377は、SX383出土京都系土師器皿で、復元口径13.0cmを測る。

SK391

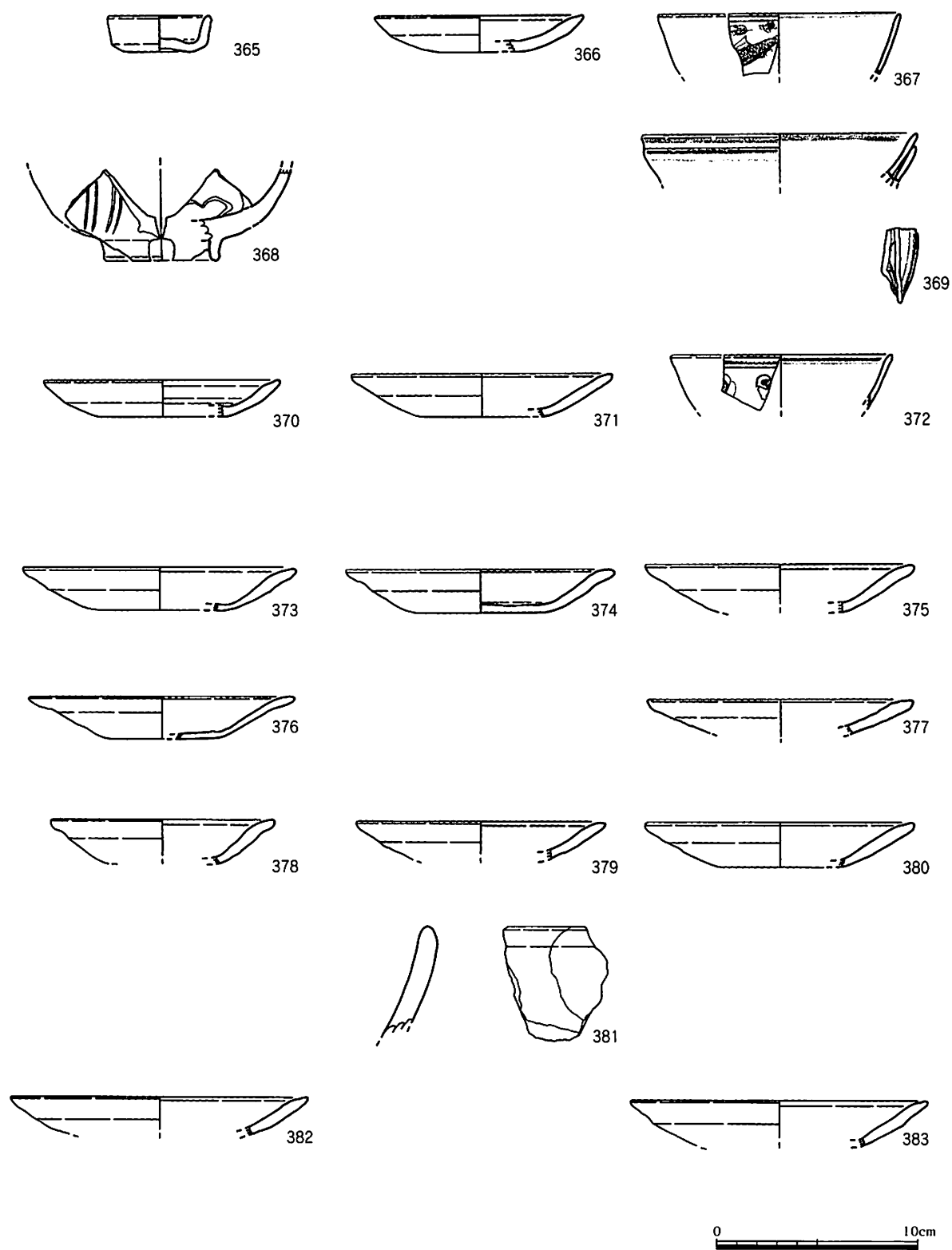
第62図378～380は、SK391出土京都系土師器である。それぞれ、378は、復元口径11.0cm、379は、復元口径12.4cm、380は、復元口径13.2cm／器高2.2cmを測る。381は、瓦質土器火鉢である。

SK396

第62図382・383は、SK369出土京都系土師器皿である。382は、復元口径14.6cm／器高2.3cmを測る。383は、復元口径14.6cm／器高1.9cmを測る。



第61図 SK375遺構実測図(1/20)



第62図 SK345/SX351/SK358/SX367/SK375/
SK381/SX383/SK391/SK396出土遺物実測図(1/3)

SX399

SX399遺構は、浅い溝状の遺構である。多量の礫と遺物が破碎された形で検出された(第63図参照)。

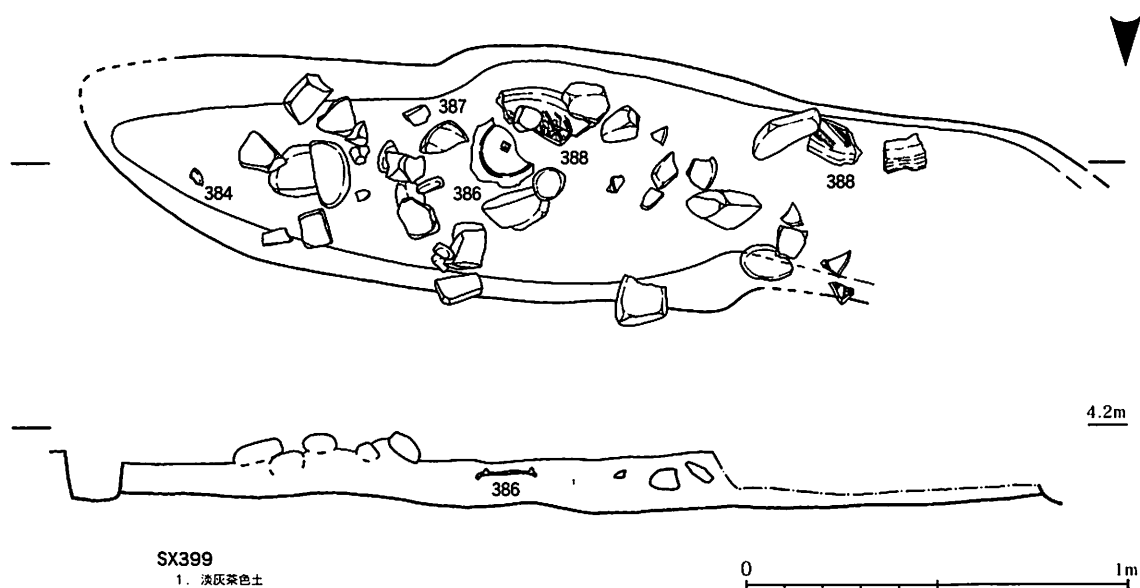
第64図384～386・第65図387・388は、SX399出土遺物である。

384・385は、京都系土師器小皿である。それぞれ、384は、復元口径8.8cm／器高1.6cm、385は、復元口径10.8cm／器高2.4cmを測る。

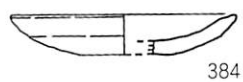
386は、中国産染付大皿で、復元高台径14.7cmを測る。資料は、口縁部が欠損しているため判別しにくい、わずかに口縁端部にかけて屈曲することが判別できるため、本来、小野分類における染付皿F群に分類されるものであると判断できる。絵付けは、内面に草花文、高台部内面に落款の文様を施す。

387・388は、備前産焼締陶器である。387は瓶、388は摺鉢である。388は、復元口径31.8cm／器高14.7cm／復元高台径13.5cmを測り、交叉揃り目が確認されている。

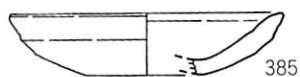
『戦国時代の府内復元想定図』を参照すると、SX399の南側調査区外には、御北町筋の道路が敷設されている想定となり、SX399の方位軸もN-275°-W方位軸と、二之大路のN-5°-E方位軸と直角に交わる方位軸であると考えられることから、街区の方位軸に規制された遺構配置であると考えられる。同様の方位に乗る長土坑としては、SX341・SX429が挙げられ、調査区南側に集中していることが指摘される。



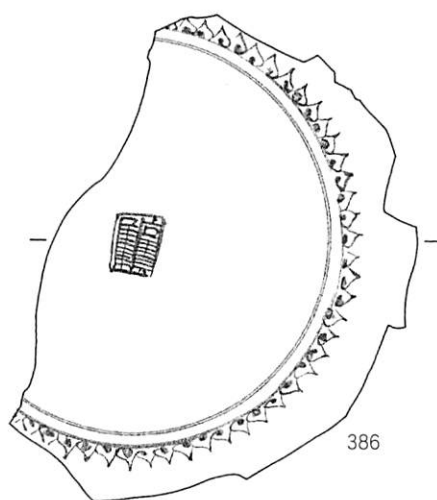
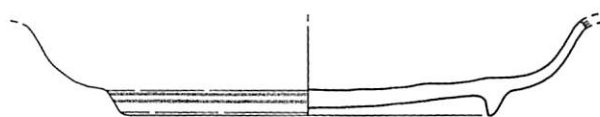
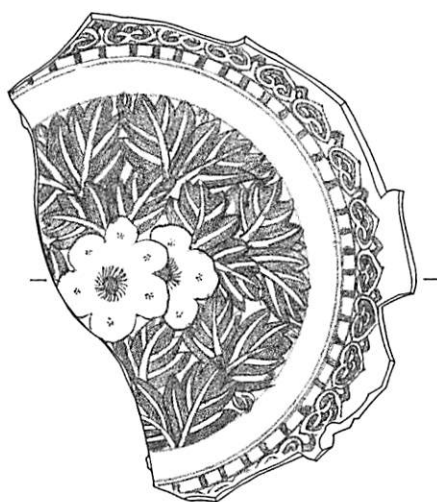
第63図 SX399遺構実測図(1/20)



384



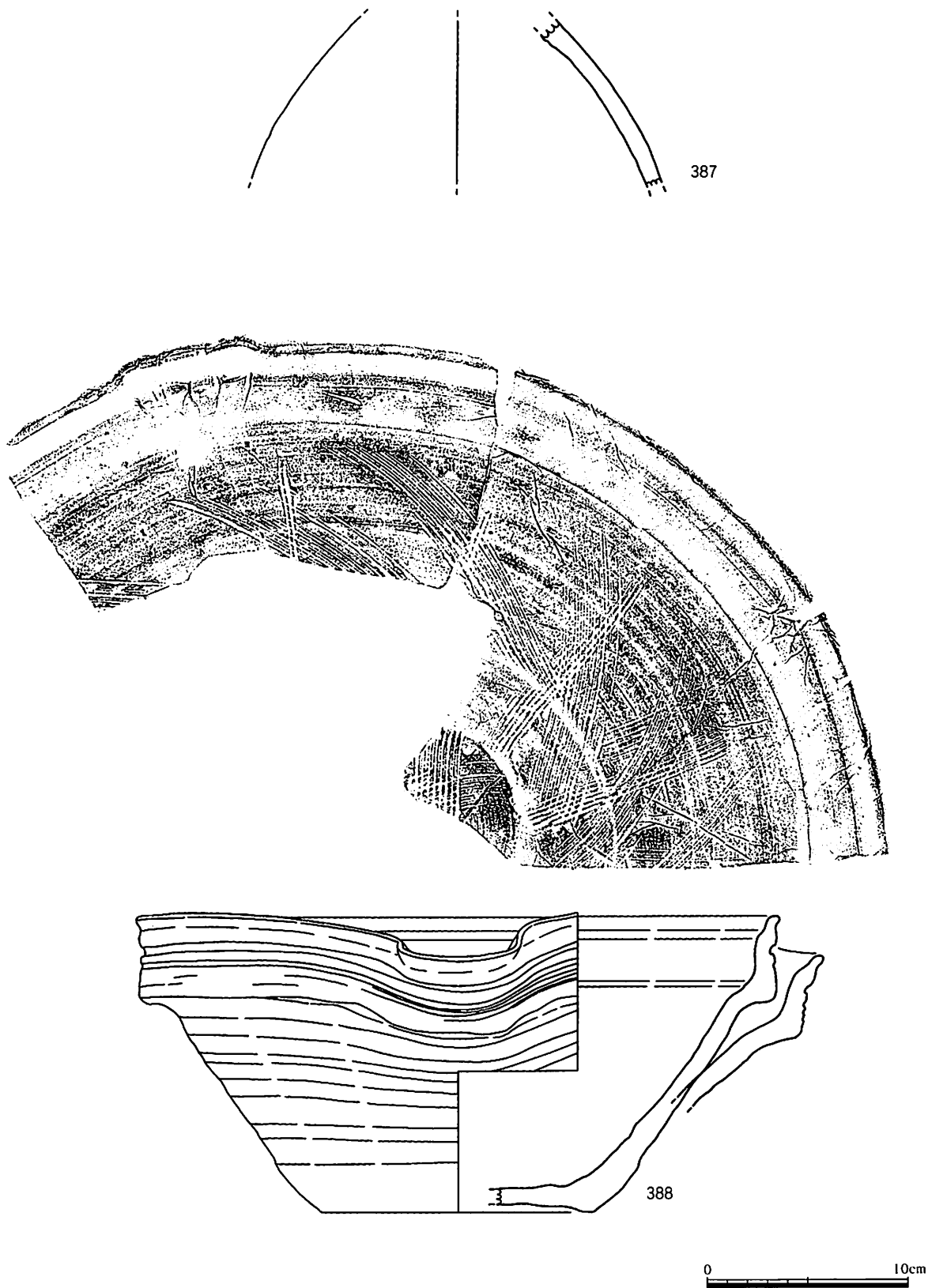
385



386



第64図 SX399出土遺物実測図①(1/3)



第65図 SX399出土遺物実測図②(1/3)

SK403

第66図389は、中国産染付皿で、小野分類において染付皿F群に分類されるものである。法量は、復元口径19.9cmを測る。口縁部内面には、折枝文を施し、外面には宝文の退化したものを施す。内外面共に、次様式の芙蓉手の絵付けが施されていることが指摘される。

SK407

第66図390～393は、SK407出土遺物である。

390～392は京都系土師器である。390・391は、京都系土師器小皿である。それぞれ、390は、復元口径10.5cmを測り、391は、復元口径11.1cmを測る。391には、灯明芯痕跡が確認される。

392は、焼塩壺の蓋と考えられる。法量は、復元口径6.6cm／器高4.4cmを測る。

393は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群に分類されるもので、復元口径12.5cmを測る。

SK408

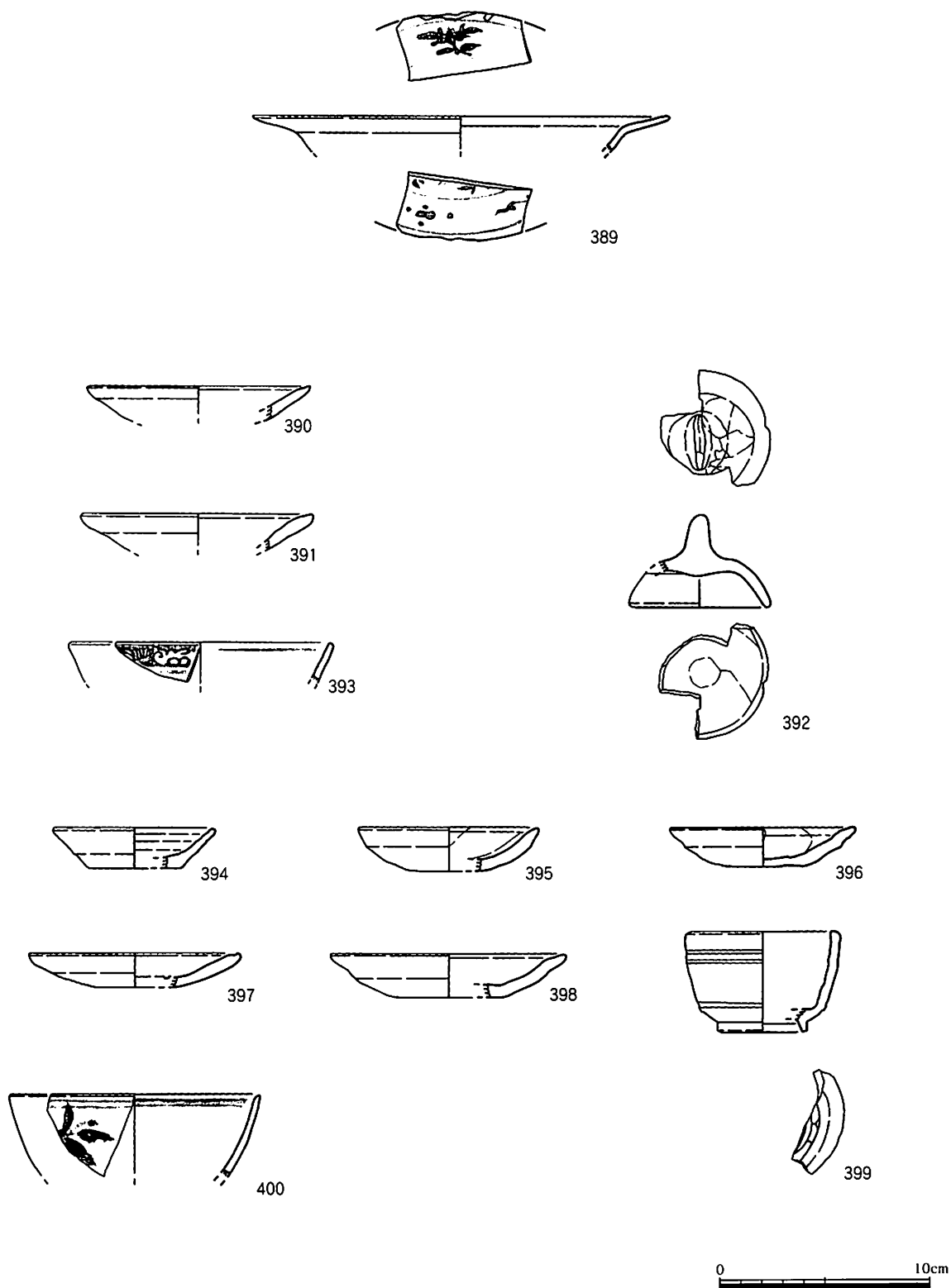
第66図394～400は、SK408出土遺物である。

394は、ロクロ成形土師器小皿で、復元口径7.7cm／器高1.95cm／復元底径4.6cmを測る。

395～398は、京都系土師器皿である。395は、復元口径8.7cm／器高2.1cm、396は完形品で、復元口径8.8cm／器高1.9cm、397は、復元口径10.0cm／器高1.6cm、398は、復元口径11.2cm／器高2.1cmを測る。

399は、中国産白磁筒形碗で、法量は、復元口径7.3cm／器高4.8cm／復元底径4.2cmを測る。資料は、口縁部外面に二重沈線を施し、高台は抉り高台を有する。上田分類における白磁D群に該当するものであろうか。

400は、中国産染付碗で、小野分類において染付碗E群に分類されるもので、法量は、復元口径11.9cmを測る。



第66図 SK403/SK407/SK408出土遺物実測図(1/3)

SK414

第68図401～404は、SK414出土遺物である。

401・402は、京都系土師器皿である。法量は、それぞれ、401は、復元口径8.6cm／器高1.8cm、402は、復元口径9.9cm／器高2.4cm、403は、復元口径13.5cm／器高2.25cmを測る。401には、内面に時計回りのナデ調整痕が確認できる。

404は、中国産染付小盃である。復元高台径2.3cmを測る。

SK416

第68図405・406は、SK416出土遺物である。

405は、京都系土師器小皿である。完形品で、法量は、口径8.8cm／器高1.9cmを測る。内面には、時計回りのナデ調整痕が確認できる。

406は、中国産染付小皿である。法量は、復元口径9.8cmを測る。漳州窯系の製品であると思われる。

SX417

SX417は、南北に長い長土坑である(第67図参照)。

第68図407～413は、SX417出土遺物である。

407～411は、ロクロ成形土師器皿である。法量は、それぞれ、407は、復元口径9.9cm／器高2.25cm／復元底径5.4cm、408は、復元口径10.5cm／器高2.2cm／復元底径6.1cm、409は、復元口径11.5cm／器高2.1cm／復元底径5.5cm、410は、復元口径11.4cm／器高2.05cm／復元底径5.2cm、411は、復元口径11.6cm／器高2.3cmを測る。

412・413は、京都系土師器皿である。412は小皿で、口径8.8cm／器高2.0cm、413は、復元口径15.8cm／器高1.9cmを測る。412には、内面に時計回りのナデ調整痕が確認できる。

SX426

遺構は、調査区の南側に位置する。柱穴列Hの南側に隣接する。遺構形状は、平面プランが東西1.5m、南北1.0mの長方形を呈する。深さは、5cmと浅い。

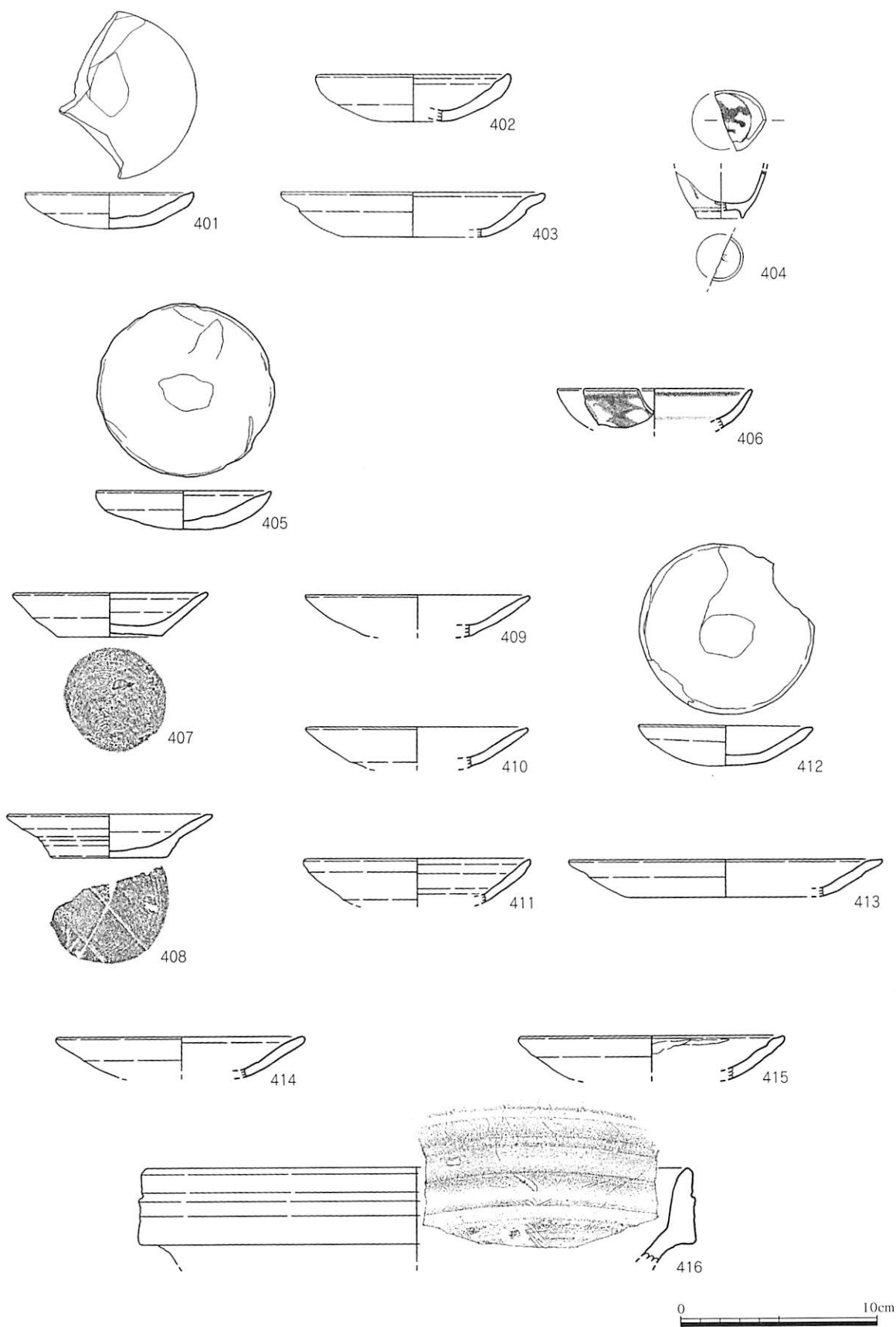
第68図414～416は、SX426出土遺物である。

414・415は、京都系土師器皿である。法量はそれぞれ、414は、復元口径12.6cm、415は、復元口径13.4cmを測る。

416は、備前産焼締陶器摺鉢で、法量は復元口径27.6cmを測る。



第67図 SX417遺構実測図(1/20)



第68図 SK414/SK416/SX417/SX426出土遺物実測図(1/3)

SX429

第69図417・418は、SX429出土遺物である。

417は、中国産染付瓶である。法量は、口径5.0cm／器高13.1cm／高台形6.2cmを測る。高台畳付に砂が付着し、砂高台となっている。漳州窯系の製品であると考えられる。

418は、中国産染付皿で、小野分類においてE群に分類されるものである。法量は、復元口径10.7cmを測る。

また、当遺構からは、ガラス製品が出土している。色調はクリアーホワイトを呈する(第75図479参照)。詳細は、特殊遺物の項で述べている。

SX446

第69図419は、SX446出土遺物である。

419は、京都系土師器皿で、法量は、復元口径11.4cmを測る。



第69図 SX429/SX446出土遺物実測図(1/3)

3. 柱穴遺構

柱穴遺構に関しては、SPの調査記号を付している。当調査区においては、柱痕の確認される柱穴遺構が多く確認され、時には木材の腐蝕後、空洞化した状態で検出されたものも少なくない。遺構断面図に関しては、そのような柱痕の確認されるものを抜き出して掲載した(第70図参照)。

しかし、これらの柱穴は、掘建柱建物を復元するには困難であり、おぼろげながら把握できるのは柱穴が群を成して東西に並ぶ現象である。

SP114

SP114は、SX429を掘削する。

当遺構からは、ガラス製品が出土している。クリアーブルーに発色する(第75図478参照)。詳細は、特殊遺物の項で述べる。

SP125

第71図420は、京都系土師器皿で、法量は、復元口径12.2cmを測る。

SP166

第71図421は、京都系土師器小皿で、法量は、復元口径8.8cmを測る。

SP211

第71図422は、京都系土師器小皿で、法量は、復元口径7.5cmを測る。

SP227

第71図423・424は、京都系土師器皿で、423は復元口径12.8cm／器高2.9cmを測る。

第71図425・426は、中国産染付皿で、小野分類において染付皿E群に分類されるものである。425は、復元口径14.6cmを測る。

第71図427は、中国産染付小盃で、法量は、復元口径6.2cmを測る。

また、当遺構からは、ガラス製品が出土している。穴の空いたビーズ形状で、クリアーブルーの発色を呈する。詳細は特殊遺物の項で述べている。(第75図参照)

SP241

第71図428は、中国南部か東南アジア等の南海産の製品であると考えられる鉄釉陶器で、復元口径29.3cmを測る。

SP252

第71図429は、中国産染付皿で、法量は、復元口径8.8cmを測る。漳州窯系の製品と考えられる。

SP276

第71図430～434は、SP276出土遺物である。

430～434は、京都系土師器である。法量は、それぞれ、430は、復元口径10.1cm／器高2.25cm、431は、復元口径10.9cm、432は、復元口径12.0cm／器高2.4cm、433は、復元口径12.0cm、434は、復元口径13.2cmを測る。432には灯明芯痕が確認できる。

SP293

第71図435は、京都系土師器皿で、法量は、復元口径12.1cmを測る。

SP295

第71図436は、京都系土師器皿で、法量は、復元口径14.0cmを測る。

SP329

第71図437は、備前産焼締陶器摺鉢の底部で、法量は、復元底径14.1cmを測る。

SP337

第72図438は、SP337出土遺物である。

438は、瓦質土器摺鉢である。法量は、復元口径36.0cmを測る。掘目は、5本で1単位である。注ぎ口が残存している。

SP340

第72図439は、SP340出土遺物である。

439は、中国産染付小碗で、法量は、復元口径7.2cmを測る。

SP371

第72図440は、ロクロ成形土師器皿で、法量は、復元口径11.2cm／器高2.0cm／復元底径6.4cmを測る。

SP353

第72図441は、京都系土師器小皿で、法量は、復元口径9.4cm／器高2.2cmを測る。

第72図442は、京都系土師器皿で、法量は、復元口径13.3cm／器高2.15cmを測る。

SP400

第72図443は、ロクロ成形土師器皿の底部で、法量は、復元高台径6.2cmを測る。

SP402

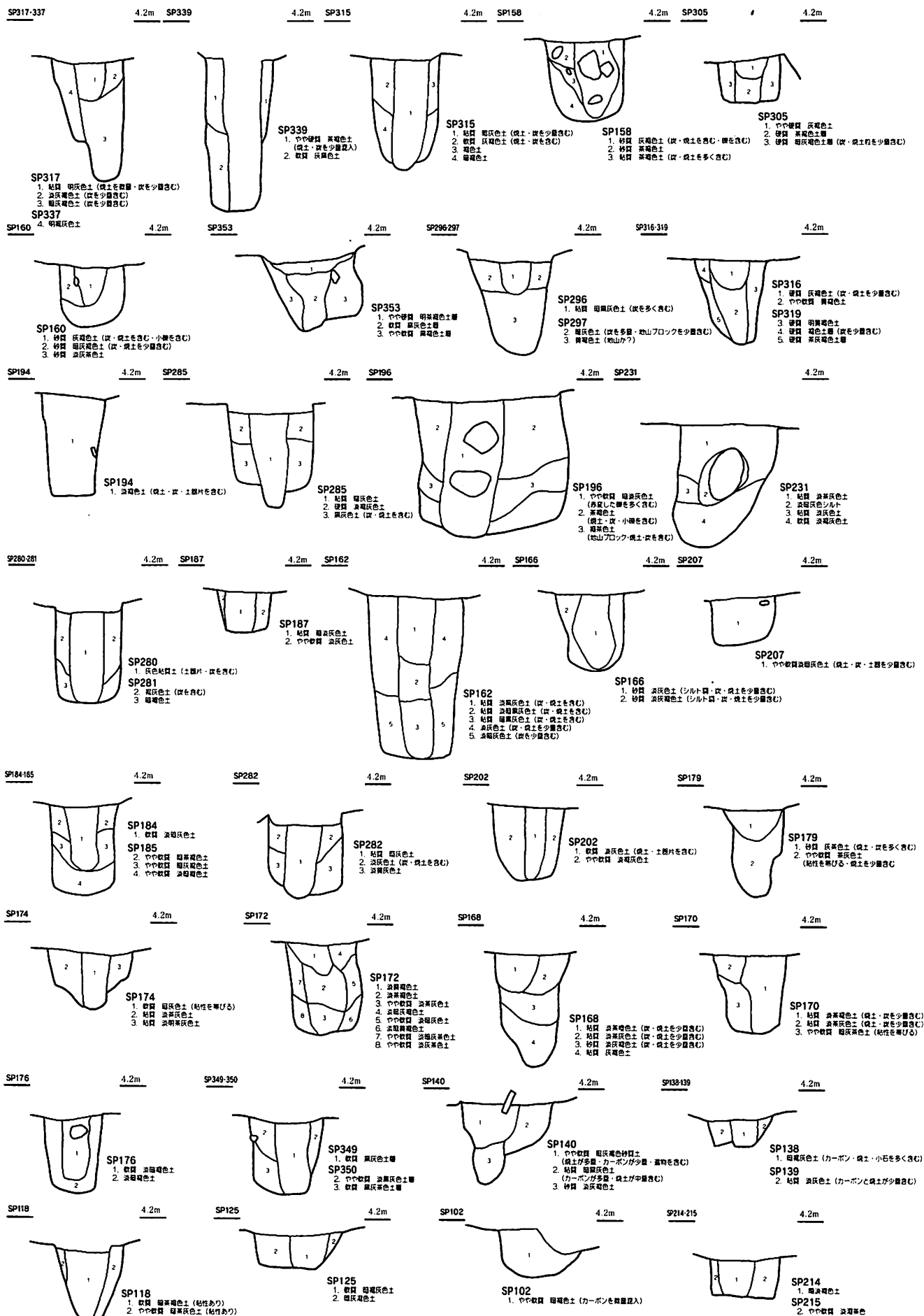
第72図444は、京都系土師器小皿で、法量は、復元口径10.6cmを測る。

SP411

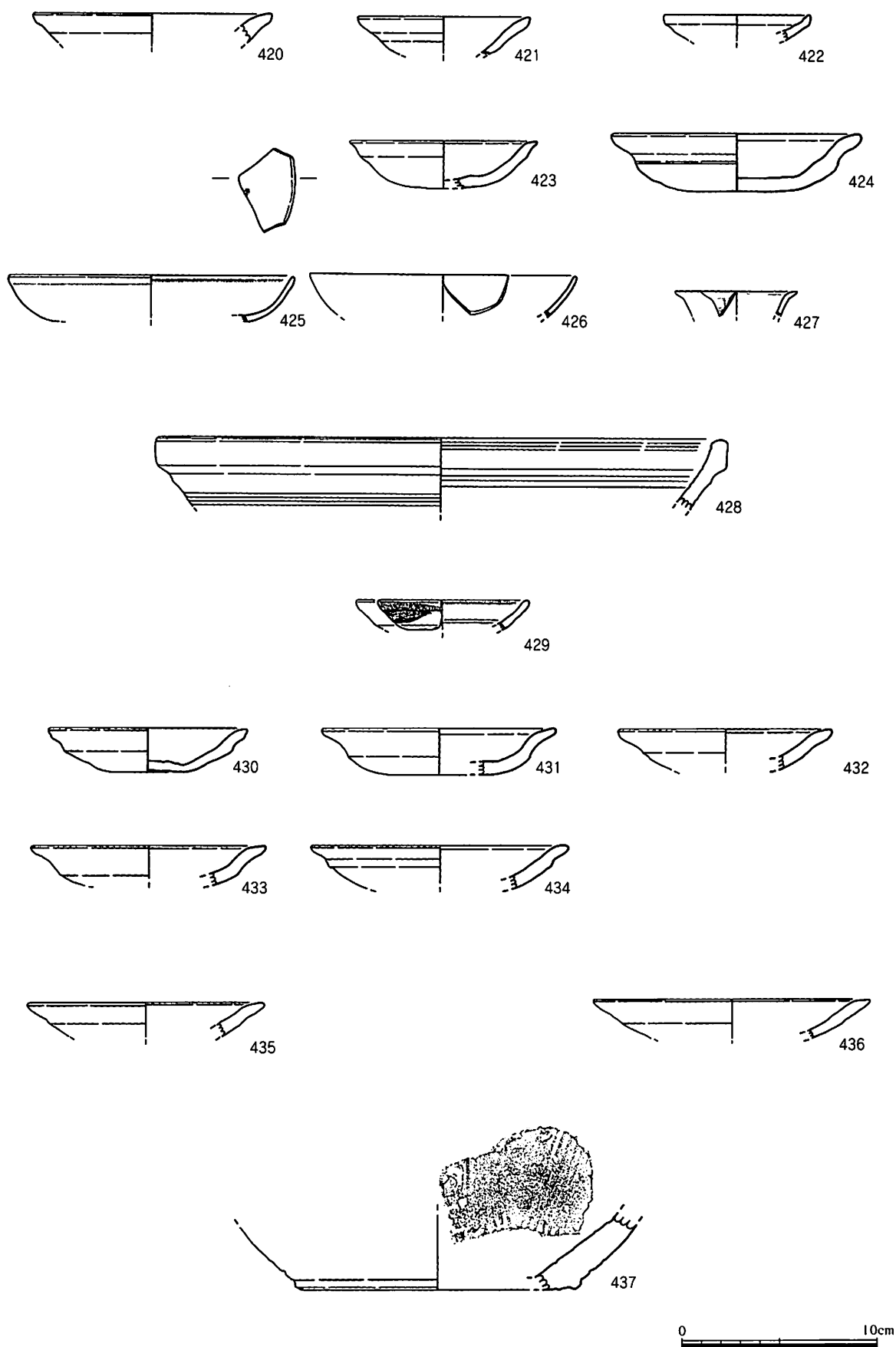
第72図445・446は、SP411出土遺物である。

445は、京都系土師器皿で、法量は、復元口径12.5cmを測る。

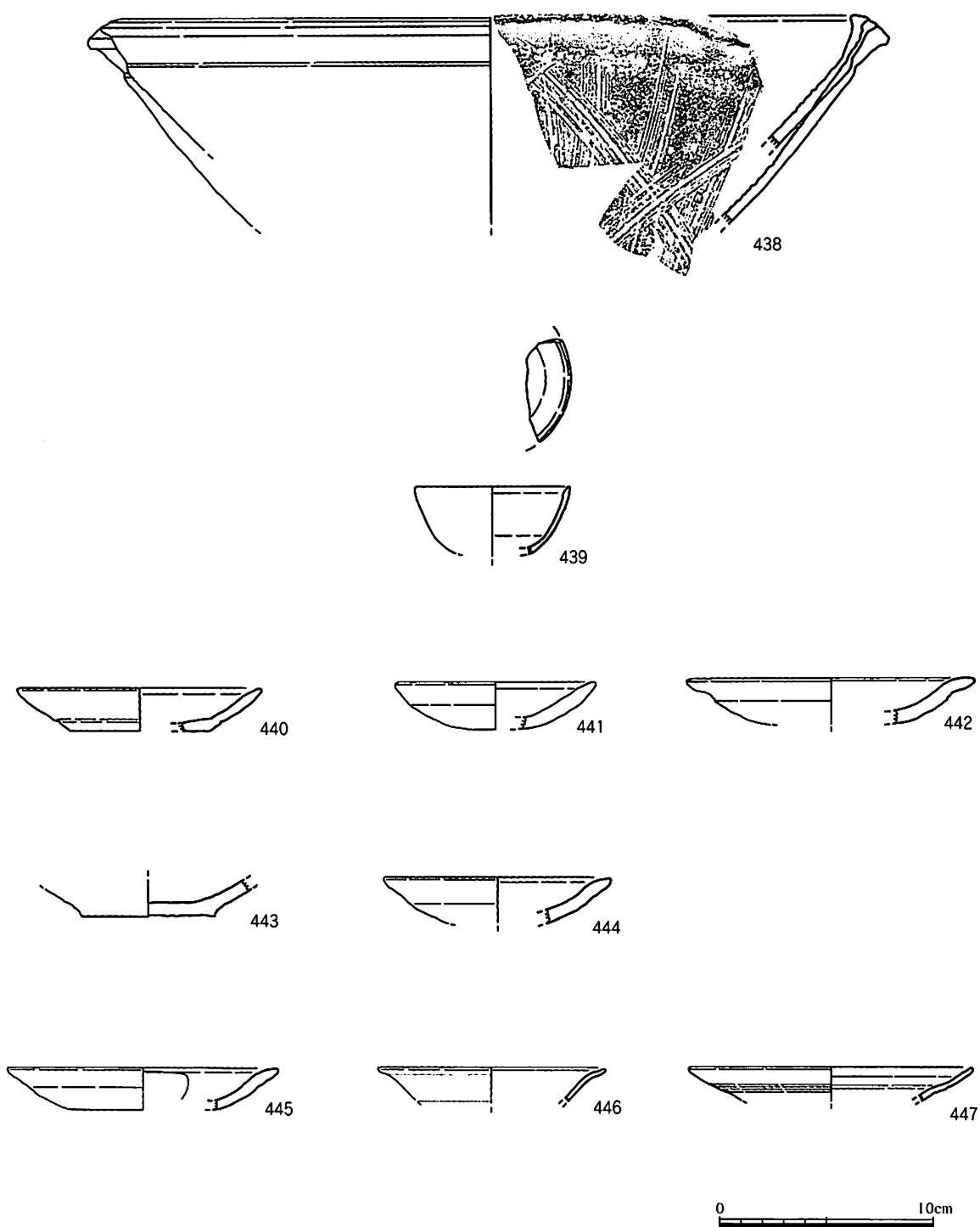
446は、中国産染付皿で、法量は、復元口径10.6cmを測る。



第70図 柱穴遺構実測図(1/40)



第71図 柱穴遺構出土遺物実測図①(1/3)



第72図 柱穴遺構出土遺物実測図②(1/3)

SP447

遺構は、調査区の南側に位置し、柱穴列Gの南側に隣接する。遺構形状は、平面プランが東西1.5m、南北1.0mの長方形を呈する。深さは、10cm程で浅い。

第72図447は、ロクロ成形土師器皿で、復元口径13.2cmを測る。非常に薄く、白色の胎土を用いている。

柱穴群列について

前述の通り、これらの柱穴群は、掘建柱建物を復元するには困難であり、おぼろげながら把握できるのは柱穴が群を成して東西に並ぶ現象である。柱穴群列は、以下のように大まかにまとめられる。図みに、いずれの柱穴列も、N-5°-Eグリッドプランに乗るものである(第82図参照)。

柱穴列A…4-I04、4-I05間の東西に展開する柱穴列である。

柱穴列B…4-I04、4-I05間の東西に展開する柱穴列である。

柱穴列C…4-J04、4-J05の東西に展開する柱穴列である。

柱穴列D…4-J04、4-J05間の東西に展開する柱穴列である。

柱穴列E…4-J04、4-I05間の東西に展開する柱穴列である。

柱穴列F…4-J04、4-J05、4-K05間の東西に展開する柱穴列である。

柱穴列G…4-K04、4-K05間の東西に展開する柱穴列である。

柱穴列H…4-K04、4-K05の東西に展開する柱穴列である。

柱穴列I…4-J04、4-K05の南北に展開する柱穴列である。

柱穴列J…4-I04、4-I05、4-J04、4-K04の南北に展開する柱穴列である。

柱穴列K…4-I05、4-J04、4-J05、4-K04の南北に展開する柱穴列である。

柱穴列L…4-I05、4-J05の南北に展開する柱穴列である。

柱穴列M…4-I05、4-J05、4-K05、4-L05の南北に展開する柱穴列である。

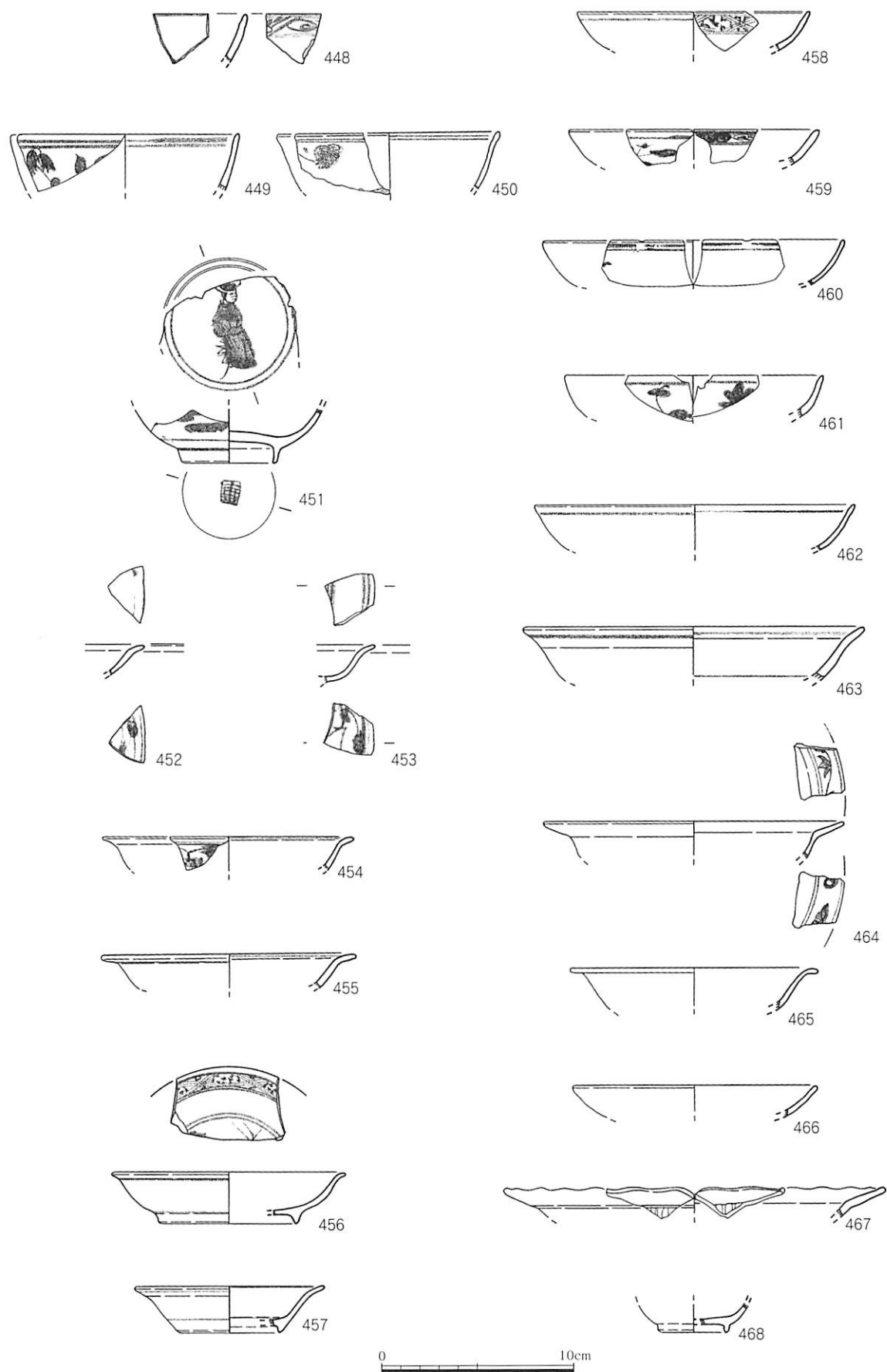
推定建物について

当調査区における推定建物に関しては、中世都市研究会第六回における飯村均氏の『都市研究の方法』「遺跡のかたち都市のかたち」という発表の中で提示されている「見つからないが必ずあるもの」の存在を想定したい²¹。飯村氏は、「見つからないが必ずあるもの」に関して、斉木秀雄氏の研究を引用²²しながら板壁掘建柱建物を意識し「一地下にほとんど穴を掘らない、しかも建築部材が残らないような一遺構を想定する必要がある」と提唱されている。同様の遺構に関しては、礎石建物や、近世に入ってから広がりを見せるという寝せ柱上に柱を立てる建築物が想定されよう。

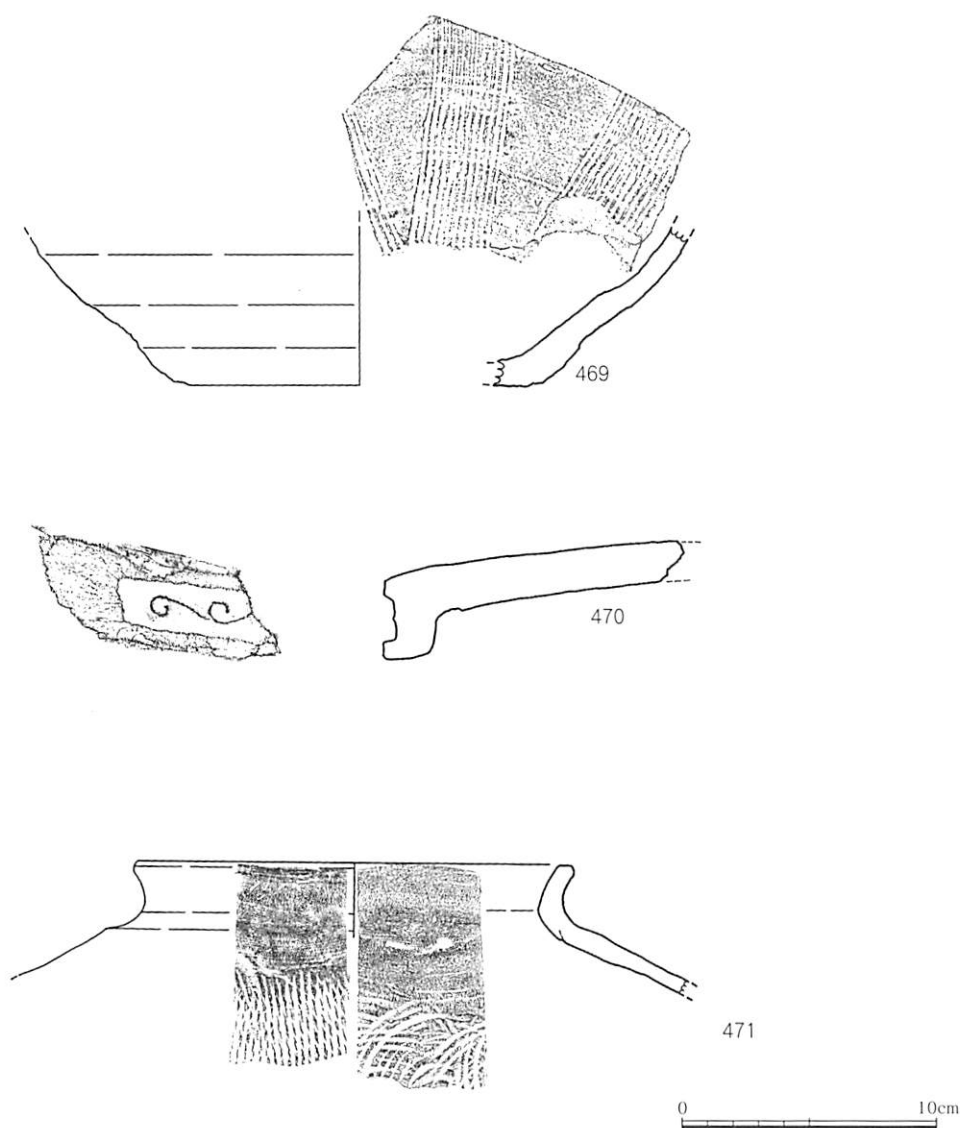
推定建物A…4-I04、4-I05グリッドの北側に展開すると考えられる掘立柱建物跡である。柱穴列Aと柱穴列Bが二列平行しており、敷地境を示すものである可能性も考えられる。

推定建物B…4-J04・J05、4-K04・K05グリッドに展開すると考えられる掘立柱建物跡である。柱穴列C或いは柱穴列D・Eの南側、柱穴列H或いはGの北側、柱穴列I或いはJ・Kの東側と柱穴列3列に囲まれる区域(ほぼ4-J05・K05に該当する区域)は、他のグリッドと比較して遺構密度が著しく低く、柱穴遺構のみが確認される。逆に、遺構密度の高い区域はある遺構を避けた遺構配置としても解釈ができる。よって、この領域に建造物が存在した可能性が高いと考えられる。栃木県の下古館遺跡の調査事例から、出入り口的な機能を果たしていたと考えられるSX272も、この推定建物Bに取り付くものと考えられる(第82図参照)。

また、周辺に展開する廃棄土坑や井戸跡などの生活痕跡遺構が、推定建物Bに規制されるように配置されている点を考慮すると、整地層形成直後に建物が建造され、そのため、その周囲に生活痕跡遺構が展開するというように解釈できることとなる。更には、その遺構群からは、16世紀後半にほぼ限定される遺物群が出土し、調査区南側の長土坑群の東西軸(N-275°-W方位軸)に柱穴群列の方位が大まかに一致することから、この時期に街区の一つすなわち「短冊状地割」²³が形成されたことが考えられる。



第73図 SX004出土遺物実測図①(1/3)



第74図 SX004出土遺物実測図②(1/3)

4. 表土(SX004)出土遺物

第73図448～468・第74図469～471は、遺構検出時に出土した遺物群である。

第73図448～451は、中国産染付碗で、小野分類において染付E群に分類されるものである。448～450は、口縁部、451は底部である。448は、漳州窯系の製品であると考えられる。449は、復元口径11.6cmを測り、450は、復元口径11.4cmを測る。451は、内底部に唐人を描き、高台内には落款が確認される。高台径4.9cmを測る。

第73図452～464は、中国産染付皿である。

第73図452～457は、外反口縁を呈する中国産染付皿である。454～455は、小野分類において染付皿B-1群に分類されるものである。それぞれ、454は、復元口径12.8cm、455は、復元口径13.0cmを測る。456は、小野分類において染付皿B-2群に分類されるもので、法量は、復元口径12.0cm／器高2.6cm／復元高台径7.0cmを測る。457は、復元口径9.6cm／器高2.45cm／復元高台径5.0cmを測る。

第73図458～462は、直立口縁を呈する中国産染付皿で、小野分類において染付皿E群に分類されるものである。法量は、それぞれ、458は、復元口径12.0cm、459は、復元口径12.7cm、460は、復元口径15.4cm、461は、復元口径13.2cm、462は、復元口径16.2cmを測る。463は、外反口縁を呈する中国産染付大皿或いは鉢で、法量は、復元口径17.5cmを測る。463に関しては、胎土が黄褐色を呈する陶器質のもので、漳州窯系の製品であると考えられる。

第73図464は、外折口縁を呈する皿で、小野分類において染付皿F群に分類されるものである。法量は、復元口径15.4cmを測る。

第73図465・466は、中国産白磁で、上田分類において白磁E群に分類されるものである。465は、外反口縁の皿で、復元口径12.7cmを測る。466は、直立口縁の皿で、復元口径12.5cmを測る。第73図467は、外折口縁の大皿で、復元口径19.6cmを測る。第73図468は、小盃の高台部分で、復元口径3.6cmを測る。

第74図469は、備前産焼締陶器摺鉢である。

第74図470は、軒平瓦である。

第74図471は、須恵器甕である。

5. 特殊遺物について

①銅銭について

当調査のSX121・SP174・SE230・SE261・SK273・SK275の6遺構から、6枚の銅銭が出土している(第75図参照)。それぞれ、SX121から472「皇宋通寶」(1038年初鑄)、SP174から473「至道元寶」(995年初鑄)、SE230から474「元符通寶」(1098年初鑄)、SE261から475「〇〇元寶」、SK273から476「〇〇寶」、SK275から477「至道元寶」(995年初鑄)が出土している。

②ガラス製品について

ガラス製品に関しては、ボタン形ガラス製品2点(青・白)と、ビーズ形状ガラス製玉1点が確認されている(第75図参照)。府内へのガラスの流入は、南蛮貿易といわれる東南アジアを経由する間接的な西欧との貿易が開始されて増加するものと想定される。

478は、SP114出土品で色調がクリアブルーを呈し、断面は、かまぼこ状になっている。成分分析から、ケイ素・カルシウム・カリウムを主成分とするカリガラスであることが分かっている。

SX429出土の479も、478と同様の形状を呈するが、色調はクリアホワイトを呈する。成分的にも、478と同様である。478・479は、断面かまぼこ状を呈し、平坦面には接着痕跡が確認される。本来は、金属製の台座などに装着するものと考えられる。

SP227出土の480は、ビーズ形状のガラス製品で、成分は鉛・ケイ素・カリウム・カルシウムを主成分とする鉛ガラスであることが判明している。

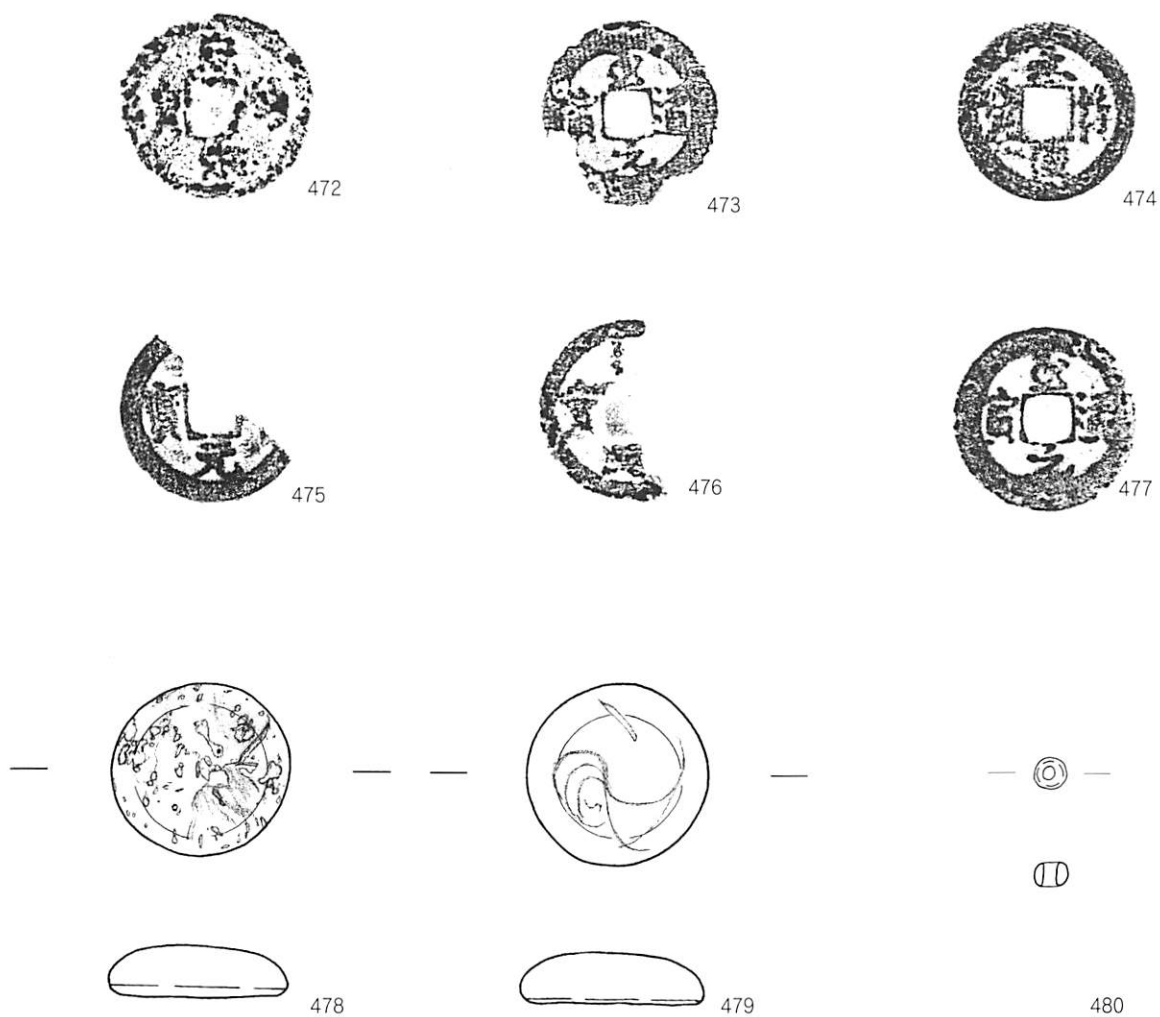
③繭形分銅について

SX121からは、繭形分銅が出土している(第76図481参照)。繭形分銅は、計量行為に用いるものである。そのほとんどを主成分銅によって、構成されている。現状での重量は、7.7gを計量する。元来は、2匁の計量に用いられたものであろうか。

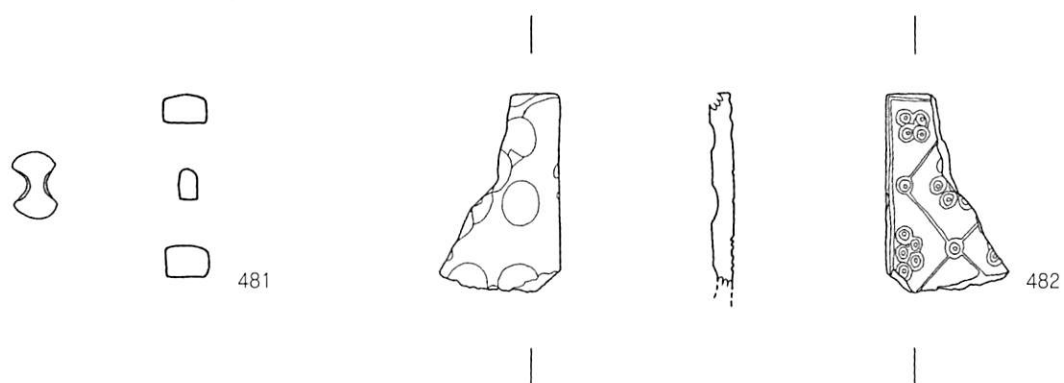
④骨製品について

骨製品として、特に注目されるものはSX195出土の骨牌である(第76図482参照)。韓国の民俗資料に、当資料と酷似する「骨牌」という遊具が存在し²⁴、当資料も遊具であると想定されるが、韓国に伝わっているものと同様のものとは断定できない。しかし、利便性から骨牌という名称を使用する。骨牌に関しては、島津侵攻直後の一括資料であると考えられている中世大友府内町跡第3次調査SX210遺構からの出土が知られるが、当資料には背紋が施されているのに対し、SX210遺構出土資料は無紋である²⁵。

日本国内における同様の骨製品は、確認されていないが、非常に類似した文様構成を持った骨角製品が大坂城跡で確認されている²⁶。大阪城出土資料は、0.5cm程の厚さを持つ直径2cm程の円盤状の骨角製品である。報告文には、「角の先端に近い部分を3～5mmの厚さで薄切りにしたものである。両面共に細かく先刻した小円文を組み合わせ、装飾としている。小円文の径は1～2mmである。円板の外縁にそって内側にも1～2条の圏線を線刻している。線刻にはコンパス状の道具を使用したと見られる。側面には装飾はない。遊戯具であろうか。」と、推測を交えた報告が成されている。



第75図 銅銭拓本(1/1)／ガラス製品実測図(1/1)



第76図 蘭形分銅実測図(1/1)／骨牌実測図(1/1)

当調査区出土骨牌も、背には同様の文様が施され、表にはサイコロ或いはドミノのような目が彫られているため遊戯具であると推察されるが、使用法に関しては定かではない。今後、韓国の民俗事例等、海外の遊戯具に関する調査が必要となろう。

第Ⅳ章 中世大友府内町跡第14次調査におけるSX203・SX204土壌分析

株式会社 埋蔵文化財サポートシステム

1. はじめに

トイレ遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種子群集組成の特徴などから識別することが可能であり、遺体群集から食物の種類を探ることも可能となっている。

2. 試料

分析試料は、中世とされるSX203下層から採取された淡褐色土およびSX204(4-105)から採取された淡明褐色土の2点である。

3. 分析法および結果

<寄生虫卵分析>

人や動物などに寄生の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

(1)方法

微化石分析法を基本に、以下のように行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 脱イオン水を加えて攪拌
- 3) 篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
- 4) 25%フッ化水素酸を加えて30分静置(2~3度混和)
- 5) 遠心分離(1500rpm、2分間)による水洗の後にサンプルを2分割
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

(2)結果

寄生虫卵および明らかな消化残査は、いずれの試料からも検出されなかった。

<花粉分析>

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(1)方法

花粉粒の分離抽出は、中村(1973)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎

表1 中世大友府内町跡 第14次調査における寄生虫卵・花粉分析結果

分類群		SX203	SX204
学名	和名	下層	4-I05
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉		
Cryptomeria japonica	スギ	1	
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属		1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	
Artemisia	ヨモギ属	2	
Fern spore	シダ植物孢子		
Monolate type spore	単条溝孢子	1	
Trilate type spore	三条溝孢子	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	1	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	5	0
Total pollen	花粉総数	6	1
	試料 1cm ³ 中の花粉密度	1.8	0.3
		× 10	× 10
Unknown pollen	未同定花粉	0	0
Fern spore	シダ植物孢子	2	0

表2 中世大友府内町跡 第14次調査における種実同定結果

分類群			SX203	SX204
			下層	4-I05
学名	和名	部位	200cm ³ 中	150cm ³ 中
Herb	草本			
Hordeum vulgare L.	オオムギ	果実	1	
Total	合計		1	0

- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。

(2)結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉2、草本花粉3、シダ植物孢子2形態の計7である。分析結果を表1に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔樹木花粉〕

スギ、シイ属ーマテバシイ属

〔草本花粉〕

イネ科、アカザ科ーヒユ科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 検出状況

SX203下層では、スギ、イネ科、アカザ科ーヒユ科、ヨモギ属、SX203-4-105ではシイ属ーマテバシイ属が検出されたが、いずれも微量である。

<種実同定>

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

(1)方法

以下の方法で、種実の抽出と同定を行った。

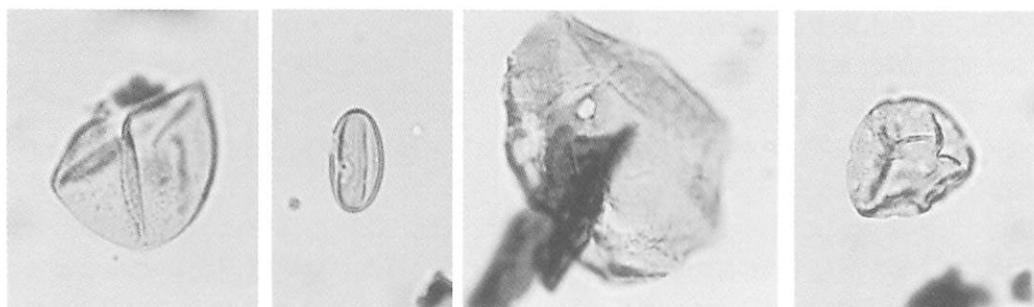
- 1) 試料200ccに水を加えて泥化
- 2) 攪拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(2)結果

SX203下層ではオオムギ果実が検出された。同定された種実の学名、和名および粒数を表2に示し、分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

中世大友府内町跡第14次調査の花粉・胞子

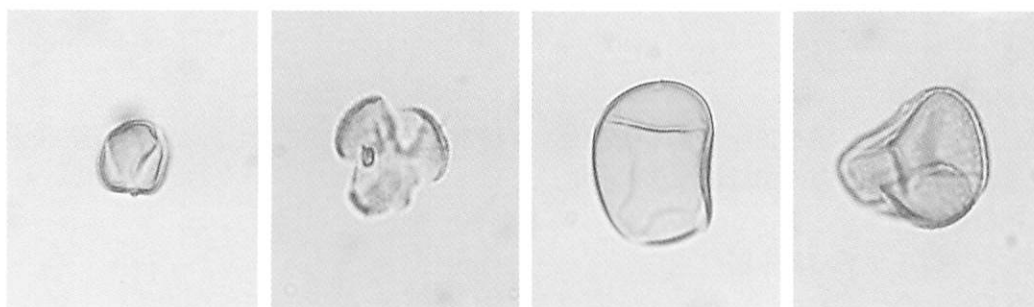


1 スギ

2 シイ属

3 イネ科

4 アカザ科—ヒユ科



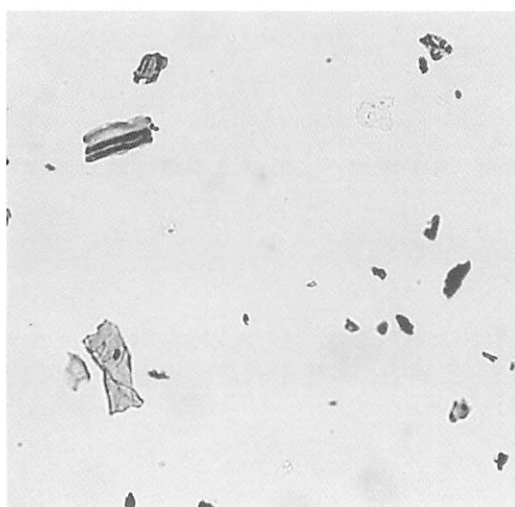
5 ヨモギ属

6 ヨモギ属

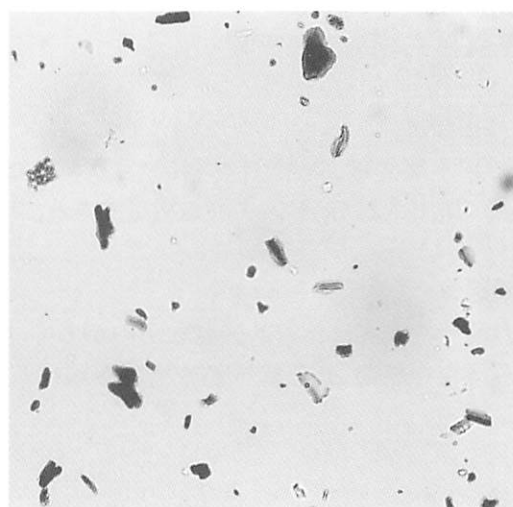
7 シダ植物単条溝胞子

8 シダ植物三条溝胞子

10 μ m



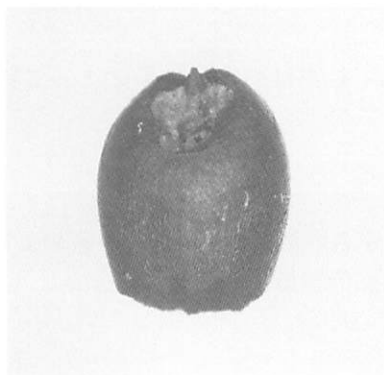
9 SX203 弱拡大写真



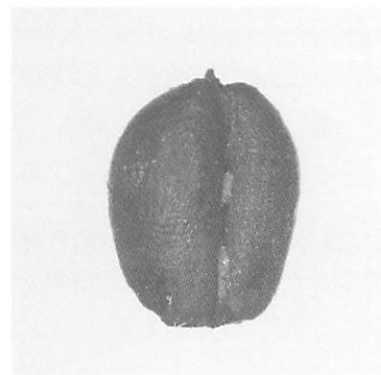
10 SX204 弱拡大写真

100 μ m

中世大友府内町跡第14次調査の種実



1 オオムギ果実



2 同左

1.0mm

オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実 イネ科

楕円形を呈す。腹部の端には胚、背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

4. 考察

分析の結果、中世とされるSX203下層およびSX204(4 - 105)の試料からは、寄生虫卵および明らかな消化残渣はまったく検出されなかった。花粉や種実もほとんど検出されないことから、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下でこれらの有機物が分解されたことが考えられるが、当初から含まれていなかった可能性も考えられる。

花粉や種実が少ないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、当時はオオムギの栽培が行われていたと考えられ、遺跡周辺にはイネ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などの人里植物や耕地雑草の性格を持つ草本類が分布していたと推定される。

文 献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard(1992)Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science 19 [p.231 - 245]

金原 正明・金原 正子(1992)「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－』奈良国立文化財研究所 [p.14 - 15]

金子 清俊・谷口 博一(1987)「線形動物・扁形動物 医動物学」『新版臨床検査講座』8 医歯薬出版 [p.9 - 55]

金原 正明(1999)「寄生虫 考古学と動物学」『考古学と自然科学』2 同成社[p.151 - 158]

中村 純(1973)「花粉分析」古今書院[p.82 - 110]

金原 正明(1993)「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店 [p.248-262]

島倉巳三郎(1973)「日本植物の花粉形態」大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集 [p.60]

中村 純(1980)「日本産花粉の標徴」大阪自然史博物館収蔵目録第13集 [p.91]

笠原 安夫(1985)『日本雑草図説』養賢堂[p.494]

笠原 安夫(1988)「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究第2巻生業』雄山閣 [p.131 - 139]

南木 睦彦(1991)「栽培植物」『古墳時代の研究第4巻生産と流通』雄山閣 [p.165 - 174]

南木 睦彦(1992)「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナル』No.355 ニューサイエンス社 [p.18 - 22]

南木 睦彦(1993)「葉・果実・種子」日本第四紀学会編『第四紀試料分析法』東京大学出版会 [p.276 - 283]

吉崎 昌一(1992)「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル』No.355 ニューサイエンス社 [p.2 - 14]

第V章 考 察

1. 遺物について

(1) 陶磁器について

①出土中国産陶磁器の分類

本報告は、先に凡例に示した、上田・小野・森田の分類・編年を基軸として用いているが、ここで本遺跡出土の中国産染付・中国産白磁について、器種ごとに器形、特に口縁部の形態分類と整理をおこなっておきたい(第77図参照)。

口縁部の分類は、碗を2種類、皿を3種類に分類している。Ⅰ類は直線的な口縁部を呈し、Ⅱ類は外反する口縁部、Ⅲ類は外折する口縁部を持つ。碗Ⅰ類に関しては、Ⅰa類からⅠb類を経由しⅠc類へと次第に口縁部が直立するように小分類をおこなった。碗Ⅱb類に関しては、口縁端部がわずかに上方に立ちあがる。陶胎の染付にも同様の口縁端部が存在し、同じくⅡ類とした。

皿に関しては、Ⅱ類の内、Ⅱa類に関しては碁笥底を呈し口縁部が屈折気味に外反するものを当てた。わずかに口縁部が上方に立ちあがるものも存在する。白磁にも同様の形態が存在し、同じくⅡa類としている。

小野分類と比較すると、本分類においては、小野分類の内、染付碗ではA群・B群・D群・F群が欠如していることが判明する。また、小野分類と対照した場合、染付碗に関しては、碗Ⅰ類だとⅠa・Ⅰb類がC群に、Ⅰc類がE群に当たり、碗Ⅱ類がE-Ⅸ類に相当する。染付皿に関しては、皿Ⅰ類だとⅠa類がC群に、Ⅰc類にE群が相当する。皿Ⅱ類には、Ⅱb類がB-1群に、Ⅱc類がB-2群に相当し、皿Ⅲ類に関しては、Ⅲb類がF群に相当する。

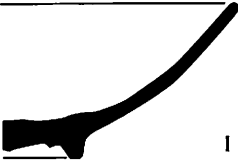
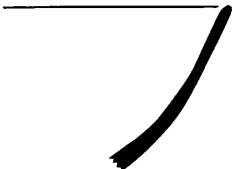
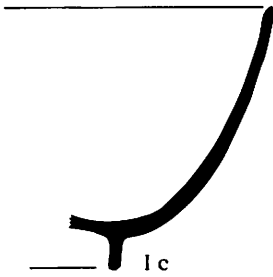
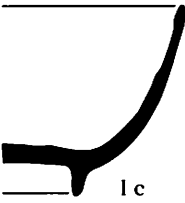
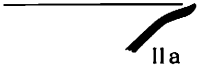
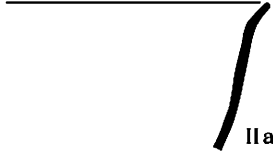
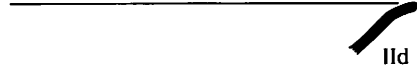
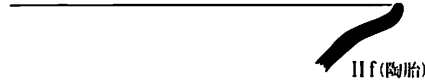
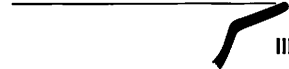
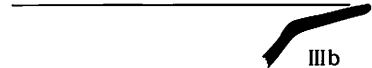
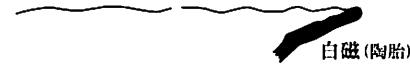
唐人町分類には、上記小野分類に対照できるもの以外に、小野分類に照合できない皿Ⅰb類・Ⅱa類・Ⅱd類・Ⅱe類・Ⅱf類が存在し、これらの製品に中世大友府内町assemblage²⁷の特性が現れている可能性がある。事実、唐人町分類染付皿Ⅱa類・d類・e類・f類・Ⅲa類に関しては、他地域においてはあまり見られない類のものである。これらの胎土は、Ⅱa・d類及びⅢa類は磁胎、Ⅱe・f類は陶胎を呈し、後者に関しては漳州窯系の製品であると考えられる。

②器種組成について

当遺跡出土陶磁器の器種の組み合わせ(assemblage)に関しては、まずは遺跡一括状況において数量を比較する。なお、今回の統計に関しては、純粋に総破片数で検討を加えている。総破片数に関しては、元来、遺構内・遺構間接合するものを考慮すると、破碎以前の個体数を乱すものであると考えられる。しかし、このようなノイズは、統計学上、調査次数の進展に伴い総破片数が増加してくるにつれて和らいでゆくものと思われる。今後、理想的には有意義な街区ごとの定量分析をおこなってゆくべきであるが、今回の分析は、その下地を作っておく意味において有意義である(第78・79図参照)。

今回、総遺物量として、カウントした遺物総破片数は、3917片である。大まかな内訳は、中世陶磁器1051片／中世土器1298片／中世瓦500片／古代土器241片／弥生土器3片／その他(近世・近代・不明等)824片となる。パーセンテージに直すと、中世陶磁器28％／中世土器36％／中世瓦13％／古代土器1％／弥生土器0％／その他(近世・近代・不明等)22％となり、中世の遺物のみを対照として比較すると、中世陶磁器37％／中世土器45％／中世瓦18％となる。

中世陶磁器に関して、産地別(産地不明製品を除く)に検討を加えると、中国産679片／国産319片／朝鮮産50片／東南アジア産3片に大別され、それぞれ、中国産65％／国産30％／朝鮮産5％／東南アジア産0％となり、中国産の製品が過半数以上を占める。また、国産陶磁器に関しては、30％の数値を示すが、30％中の87％を甕など大型製品の多い備前産焼締陶器が占めるため、本来は、もう少しパーセンテージを減じて考えたほうがよいものと思われる。また、朝鮮産陶磁器に関しても他の遺跡と比

	碗		皿
I	 I a (陶胎)	I	 I a
	 I b		 I b (陶胎)
II	 I c	II	 I c
	 I c		 II a
III	 II a	III	 II a
	 II a		 II b
III	 II b	III	 II c
			 II d
			 II e (陶胎)
			 II f (陶胎)
			 III a
			 III b
			 白磁 (陶胎)

第77図 貿易陶磁器口縁部形態分類表①(唐人町案)

較した場合5%は高数値であり、同一個体或いは、数脚で1セットとなるような、すなわち特殊な集合を、カウントしている可能性がある。以上のように、国産・朝鮮産陶磁器を考慮した場合、実質は中国産陶磁器の割合をもう少し多めに見積もる必要が生じるかもしれない。

次に、器種組成を検討すると、中国産染付が碗・皿(碗202片/皿116片)共に主体を占めるが、皿が碗の約半数程度の点数(碗64%/皿36%)となる(大皿を含む)。しかし、これに漳州窯系(碗25片/皿31片)と中国産白磁(碗21片/皿50片)を加算すると、漳州窯系・中国産白磁が皿の点数を伸ばすため、碗・皿のみの組成で言えば、(碗248片/皿197片)と碗の割合が多くはなるが、白磁と漳州窯系製品を加えることによって染付の器種組成を補完するようなかたちで、(碗56%/皿44%)と碗・皿のバランスがとれてくる。今後、食膳形態も考慮していく必要が生じてくるであろう。

更に器種組成から、小野分類を主軸に、唐人町分類を補足として用いて、器種ごとの細分類(群)別組成を検討する。

中国産染付碗に関しては、(C群2片/E群120片/E-IX類8片/不明72片)となり、それぞれ(C群1%/E群59%/E-IX類4%/不明36%)の割合を示す。所属する群が判明しているもののみを比較すると(C群2%/E群92%/E-IX類6%)となり、E群が9割を占め圧倒的な割合を示す。C群に関しては、2%を占めるが、黄色味の強い陶胎を示すため漳州窯製品である可能性が高い。

中国産染付皿(大皿も含む)に関しては、(B-1群18片/B-2群1片/C群2片/E群73片/唐人町IIa類9片/F群8片/不明32片)となり、それぞれ(B-1群12%/B-2群0%/C群0%/E群51%/唐人町IIa類9%/F群6%/不明22%)の割合を示す。所属群が判明しているもののみを比較すると(B-1群16%/B-2群1%/C群2%/E群66%/唐人町IIa類8%/F群7%)となり、碗と同様E群が過半数以上を占める。皿に関しては、前述の通り、漳州窯系製品と白磁において補完される傾向にあるため、碗ほどの割合は示さない。しかし、碗と比較して、時期的にE群に先行するB-1群/C群が計18%確認されることは、留意しておく必要があり、いわゆる、「16世紀的」様相を示すものであると考えられる²⁸。また、E-IX類に関しては、16世紀末葉～17世紀初頭の様相を示すものであろう。

漳州窯系碗に関しては、(唐人町Ia類17片/X群1片/不明7片)となり、大半がC群で構成される。

漳州窯系皿(大皿も含む)に関しては、(唐人町Ia類4片/唐人町Ib類18片/X群2片/Y群1片/Z群3片/唐人町II類2片/不明4片)となり、それぞれ、(唐人町Ia類12%/唐人町Ib類52%/X群6%/Y群3%/Z群9%/唐人町II類6%/不明12%)の割合を示す。所属群が判明しているもののみを比較すると(唐人町Ib類13%/唐人町Ib類60%/X群7%/Y群3%/Z群10%/唐人町II類7%)となる。注目しておくべき現象としては、やはり、C群が一定量を示すことである。そして、蛇ノ目釉ハギが施された様々なバリエーションを持つ粗製品群、X群・Y群・Z群の存在である。

以上、総遺物量>中世遺物>中世陶磁器>産地別陶磁器>陶磁器器種という、それぞれのレベルで定量分析を試みた。要点・留意点を取り上げると、

- ①中国産染付碗・皿共に、E群を主体とした組成が見られる。
- ②食膳形態に関しては、今後考察を要するが、碗と比較して皿の割合が若干少ない傾向にある。
- ③皿に関しては、中国産染付皿を、漳州窯系製品と白磁で補完する。
- ④染付皿に関しては、E群に混じるようなかたちでB-1群/C群が一定量確認されており、いわゆる、「16世紀的」様相を示す。
- ⑤碗・皿共にC群に帰属すると考えられるものには、黄色味の強い陶胎や灰色の胎土を呈するものが多く、漳州窯系の製品と考えるのが妥当である可能性がある。

以上のように、陶磁器組成の検討をおこなった結果から、年代的な考察を中国産染付から加えると、E群を主体として、古相に碗C群と皿B-1群・C群が、新相に碗E-IX類と皿F群が含まれることが伺われる。また、南北路1沿いの中世大友府内町跡第4次・17次調査の成果と比較すると、南北路2沿いに位置する当調査区の組成には優品が多く見うけられ、このような統計処理をおこなってゆくことによって、街区ごとに組成の差異が把握されるものと考えられる。

陶 磁 器	1051片	中 国 産	679片 3片	染付	411片	碗	203片
				赤絵	1片	皿	117片
				漳州窯系	74片	小坏	2片
						大皿	26片
						瓶	1片
						不明	62片
				白磁	137片	皿	1片
						碗	25片
						皿	30片
						大皿	2片
				青磁	30片	瓶	5片
						不明	12片
						碗	21片
						坏	2片
				華南彩釉陶 青釉陶器	16片 1片	皿	50片
						大皿	1片
						小坏	6片
						不明	53片
				中国南部産陶器 東南アジア産陶器	9片 3片	粗製皿	4片
						龍泉窯系 碗	17片
						龍泉窯系 皿	2片
						龍泉窯系 酒海壺	3片
		国 産 陶 磁 器	319片	備前産焼締陶器	279片	同安窯系 碗	1片
						不明	7片
						水注	14片
						不明	2片
				瀬戸美濃産陶器	32片	小皿	1片
						壺	6片
						鉢	1片
						不明	2片
				唐津系陶器	8片	壺	3片
						摺鉢	53片
						小摺鉢	1片
						甕	198片
	朝鮮 産 陶 磁 器	50片	陶器	48片		水差し	1片
						盤	1片
						壺	7片
						小壺	4片
						瓶	4片
						不明	10片
						天目碗	26片
						皿	4片
						小坏	2片
						碗	3片
						皿	3片
						大皿	1片
						不明	1片
						碗	34片
						皿	1片
						瓶	13片
						皿	2片

第78図 陶磁器における器種組成表①

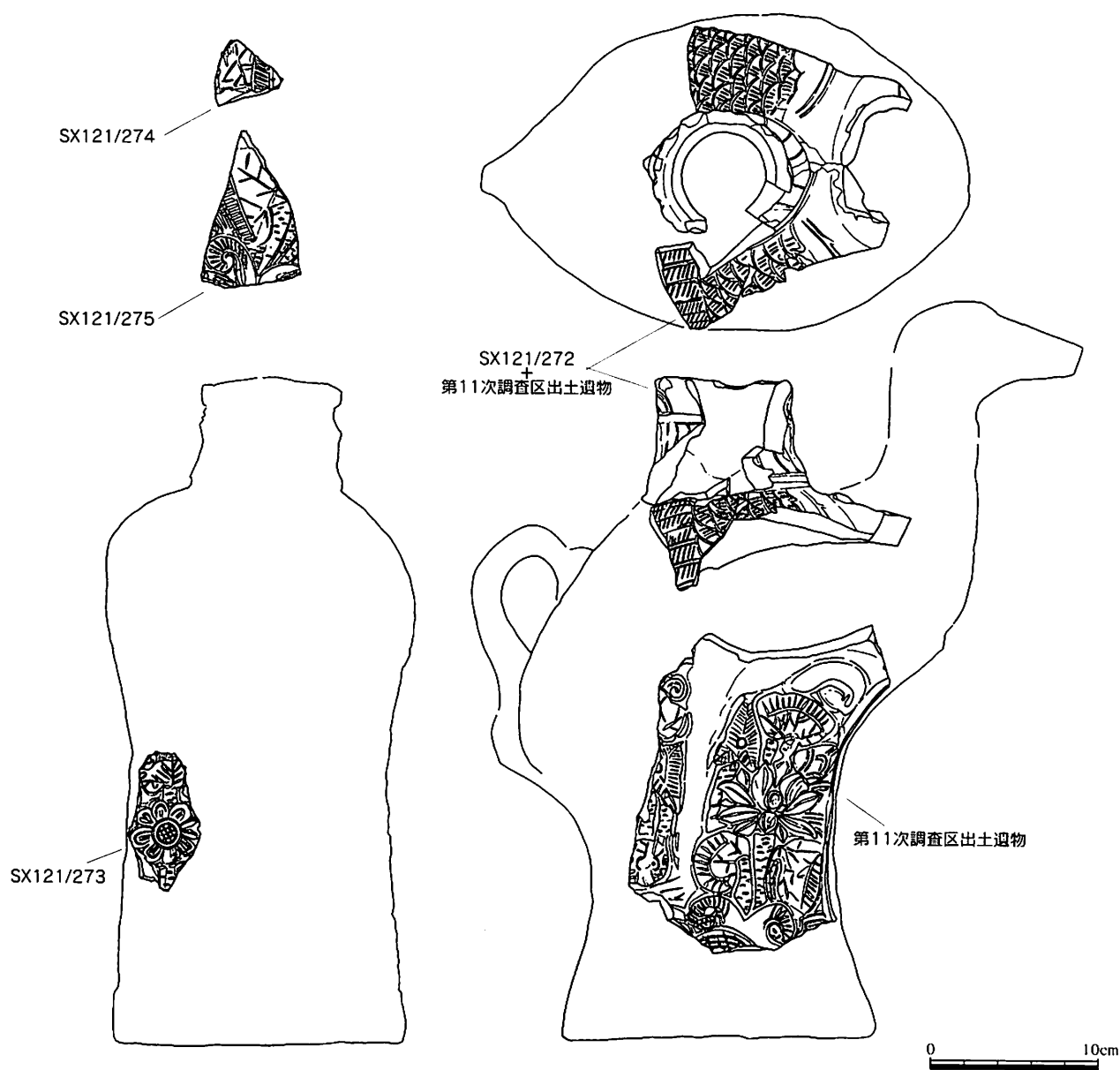
中 世 土 器	1298片	土 師 器	1188片	ロクロA群	55片	小坏	1片
						小皿	4片
						坏	50片
						小皿	6片
				ロクロB群	327片	坏	313片
						皿	6片
						不明	2片
				ロクロ不明	166片		166片
						特小皿	3片
				手捏ねC群(京都系)	635片	小皿	89片
						皿	538片
						大皿	2片
						杯	1片
						不明	2片
				焼塩壺	4片		4片
				燭台形土器	1片		1片
		土師質土器	6片		6片	鍋	4片
						埴塙	1片
						井戸杵	1片
		瓦質土器	104片		104片	火鉢	62片
						鍋	17片
						摺鉢	3片
						碗	1片
						甑	1片
						不明	20片
中 世 瓦	500片		500片		500片	平瓦	366片
						丸瓦	122片
						軒平瓦	2片
						軒丸瓦	3片
						鬼瓦	1片
						不明	6片
古 代 土 器	241片	土師器	179片		179片		179片
		須恵器	61片		61片		61片
		緑釉器	1片		1片		1片
弥生土器	3片		3片		3片		3片
そ の 他	824片		824片	近世陶磁器	22片		22片
				近代陶磁器	1片		1片
				不明土師器	44片		44片
				不明陶磁器	757片		757片
合 計	3917片		3917片		3917片		3917片

第79図 陶磁器における器種組成表②

③威信財について

当調査区からは、華南彩釉陶鶴形水注片(第80図参照)と、中国産青磁酒海壺片(第81図参照)が3点出土している。これらの遺物は、一般的に奢侈品であると考えられるもので、領主館や寺院等の拠点的性格を持つ遺跡からの出土であれば、威信財として認識されるべき遺物である。この組成に、大友氏館跡の北辺に御北町を挟んで隣接する唐人町³の特性が現れているといえる。すなわち、領主クラスに匹敵する遺物組成を示すことが指摘できる。

華南彩釉陶鶴形水注の出土例に関しては、大分県内においては当遺跡と接合関係のある大友府内町跡第11次調査区と、第4次調査区出土資料が知られる。県内以外では、琉球における確認が多く、日本本島における出土例はあまり知られていない。琉球においては、首里城京の内西北側下出土資料、そして、豊見城市伝世資料等が知られる²⁹。なお、当調査区出土品は、緑単彩釉製品である。

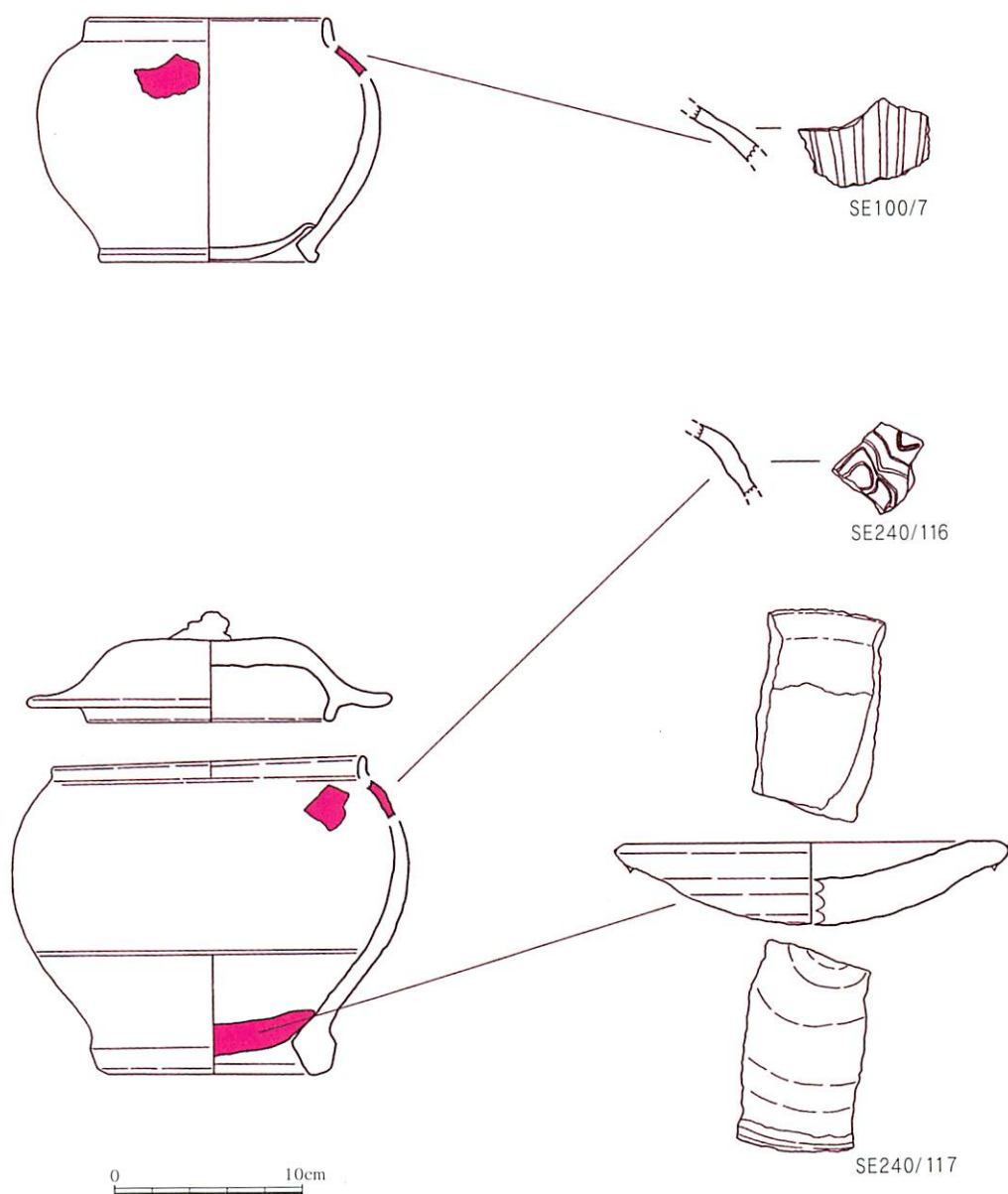


第80図 華南彩釉陶鶴形水注復元想定図(14次調査区SX121・11次調査区調査時S044出土遺物)

中国産青磁酒海壺に関しては、威信財的性格が伺われる出土例が多数確認されている。戦国期に位置付けられる当遺跡出土酒海壺に関しては、16世紀代の遺物と供伴し、明らかにアンティーク遺物として評価されるものである。

④唐津系陶器・コビキB調整瓦の位置付けについて

当調査区からは、数点の唐津系陶器が出土している。当調査区出土の唐津系陶器は、大半が遺構検出時の出土品であるが、遺構に帰属できるものとしてSE260系井戸遺構の裏込め土であるSE261号遺構が挙げられる。SE261号遺構出土唐津系陶器碗は、灰釉を施し黄緑色に発色する。底部は、欠損しており、口縁部から体部にかけて残存したものである。唐津系陶器の出現に関しては、北波多村の6古窯等、一部地域の製品のみが1580年代に遡る可能性が指摘されているが、大坂城などの消費地の出土状況に関しては、1580年代説には否定的で、1590年代以降が確実な把握年代とされる傾向にある。



第81図 中国産青磁酒海壺復元想定図

また、SE240系井戸遺構からは、コビキB調整が観察される丸瓦が出土している³⁰。コビキB調整瓦に関しては、近畿地方の瓦製作技法として、その分布の広がりにはバックボーンとしての織豊政権の存在が指摘される遺物である。九州におけるコビキB調整瓦の広がりに関しては、早くとも豊臣秀吉の九州征伐(1587年)以降、確実なところで文禄元(1592)年の朝鮮出兵以降の広がりを考えることが一般的である。

さて、SE240系とSE260系の両遺構は、井戸遺構で、その廃絶に伴う資料である。SE240に関しては、大量の破碎遺物が焼土粒と共に出土しており、断定はできないが、火災或いは戦火に伴う遺物であるとの印象を受け、島津侵攻(1586年)後の火災処理、或いは慶長の大地震(1596年)にともなう埋没である可能性が考えられる。層位SE261出土の唐津系陶器は、その井戸遺構の形成時における遺物混入であり、復興後の資料であると考えると考古学的年代観に関して言えばスムーズである。中世府内町の廃絶に関しては、諸説ある中において、まずは、幅をもって1607年の近世府内城下町完成まで含めて年代的検討をおこなうことが妥当であろう。

従って、問題は残るが1586年の島津侵攻直後に混入したコビキB調整瓦と、そして1587年～1607年にわたる中世府内町の復興～廃絶の間に位置付けられる唐津系陶器と、それぞれを位置付けるのが妥当であると考えられる。

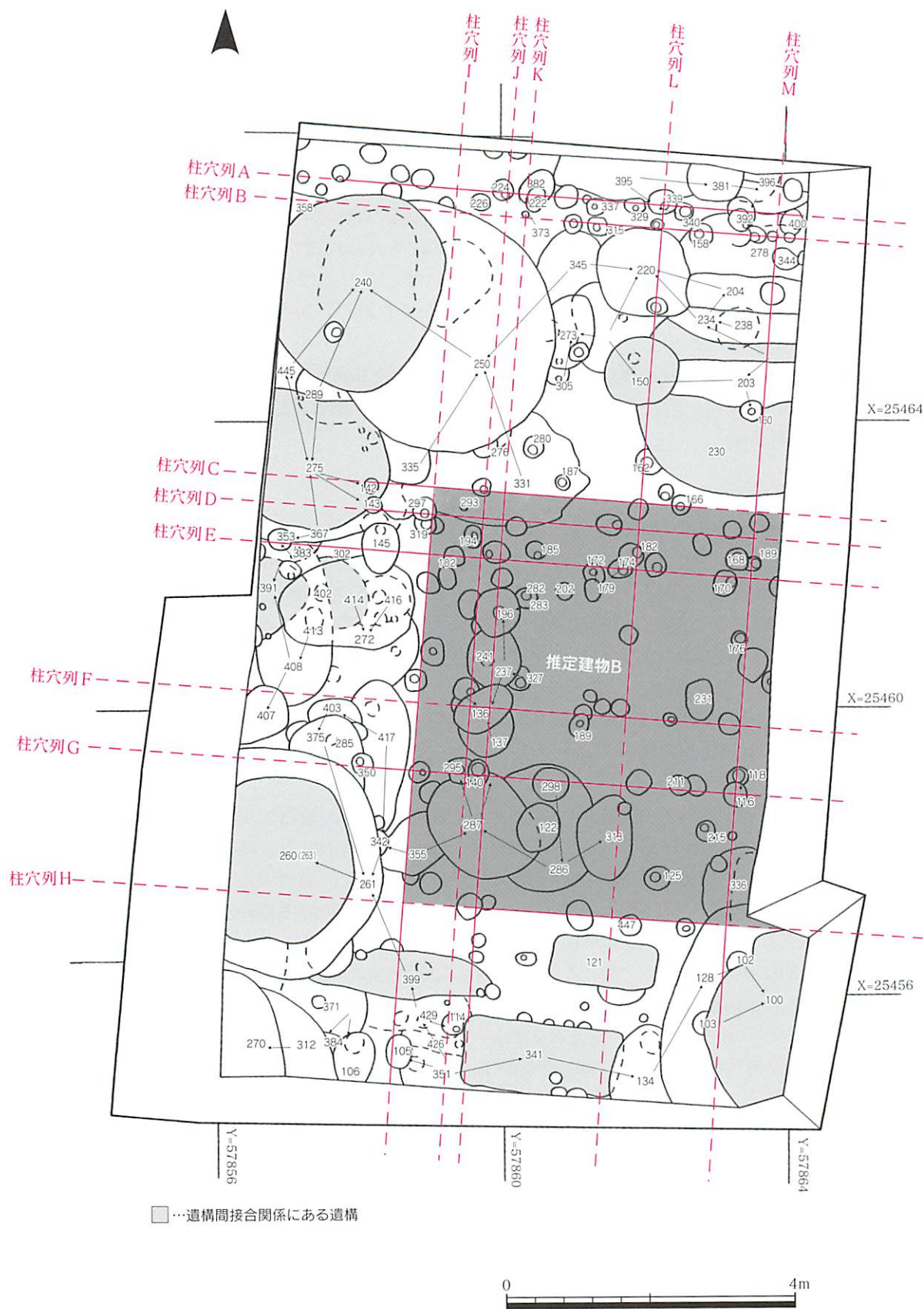
⑤遺構間接合に見る空間分析

当調査区においては、複数の遺構間において接合関係が確認されている。遺構間接合は、現時点において、SE100/SX114/SX121/SP150/SE230/SE240/SE250/SE260(SE263)/SE270/SK275/SX341/SK391/SX399/SK414/SX429の15遺構と、近隣調査区である称名寺比定地内、府内町跡第11次調査区の溝状遺構(調査時S044)出土遺物、計16遺構間における遺構間接合が確認されている。接合遺物は、13点を数える。遺構間接合したものは、第83図に一覧表として掲げているが、遺構間接合したものとしては、染付碗E群が4点、染付F群?大皿1点、漳州窯系染付碗唐人町Ⅰa類1点、漳州窯系染付碗唐人町Ⅰb類皿1点、漳州窯系染付皿唐人町Ⅰb類1点、漳州窯系染付瓶1点、白磁筒形碗1点、華南彩釉陶鶴形水注1点、朝鮮産灰釉陶器碗2点、瀬戸美濃産天目碗1点の計14点が存在する。

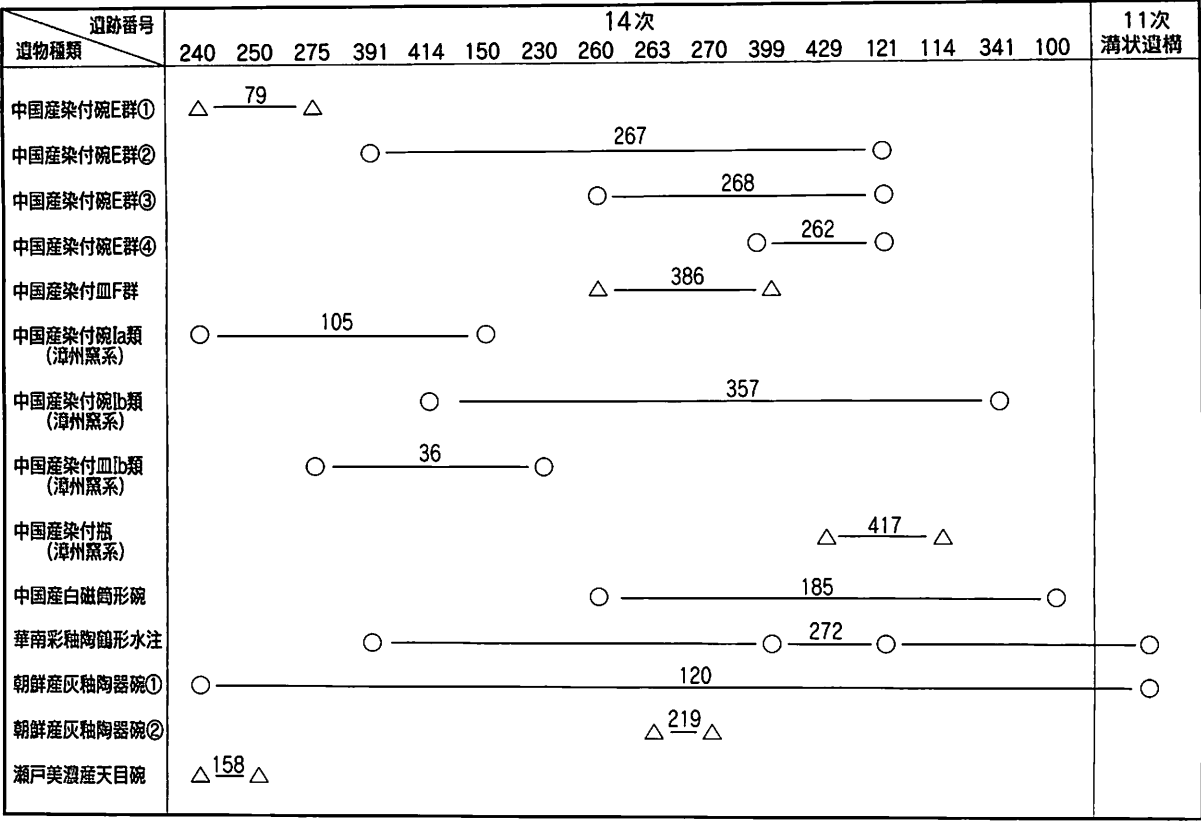
隣接関係にある遺構に関しては、遺構の切り合いによる隣接遺構への遺物の混入など埋没過程の検討を必要とするが(図中△)、それらを差し引いても9点が挙げられる(図中○)。隣接遺構間のものを差し引くと、染付碗E群が3点、漳州窯系唐人町Ⅰa類碗1点、漳州窯系染付碗唐人町Ⅰb類1点、漳州窯系唐人町Ⅰb類皿1点、白磁筒形碗1点、華南彩釉陶鶴形水注1点、朝鮮産灰釉陶器碗1点の計9点が残る。前述の通り、隣接関係にある遺構間接合事例を除くと、遺構としては、SE100/SX121/SK150/SE230/SE240/SE260/SK275/SX341/SK391/SX399/SX414/SX429の12遺構と、府内町跡第11次調査区溝状遺構の計13遺構に縮小する。

遺構間接合関係は、柱穴列Eを挟んで、南北に2グループに分れ、最も注目されるのが、南グループ内における華南彩釉陶の接合関係である。華南彩釉陶は、SX121・SK391・SX399の3遺構と道路を挟んで隣接する第11次調査区溝状遺構の4遺構間で接合することが確認されている。この4遺構間は、隣接せず、勿論、切り合い関係も有しないものである。すなわち、各遺構間は、一定の距離を保ち存在する。4遺構間における接合例としては、華南彩釉陶鶴形水注と中国産染付碗E群が挙げられ、それら4遺構に派生する遺構間接合としては、SE240-第11次調査区溝状遺構の朝鮮産灰釉陶器碗が挙げられる。すなわち、遺構間接合遺物を媒介として5遺構が、ほぼ同時に埋没したことを示すものである。この5遺構は、最大で30m程も離れ、その接合関係は、広域にまたがるものと考えられる。また、SX341/SK414の接合関係もグリッドを異にする好例で、6m程の遺構間距離を測る。

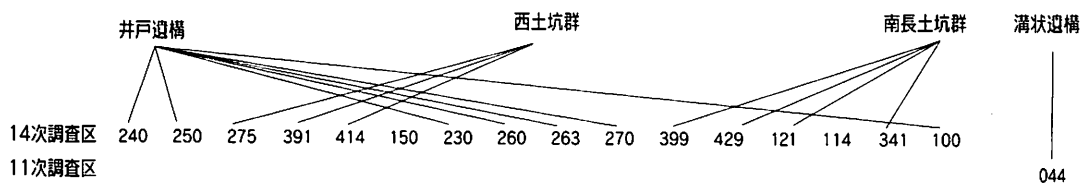
SX121・SX341・SX399は長土坑で、区画性もしくは、それに規制されたプランであると考えられる。また、それらの遺構が、4-J04・4-K04・4-K05と推定建物Bを取り囲むように配置されるという現象、SK391遺構を含む4-J04グリッド遺構検出時に微量ではあるが焼土が検出される事実、そし



第82図 遺構間接合遺構分布一覽図



第83図 遺構間接合関係図



第84図 遺構性格別遺構間接合状況一覧図

て、この遺構間の接合連鎖が推定建物Bを取り囲むように配されている点は興味深いものである(第82図参照)。

以上のように、SE240系井戸遺構という生活遺構の廃棄と区画性を持つ遺構の廃絶に、共時性が認められるとすれば、それは、町機能そのものの廃絶を示す現象である可能性も出てくる。そして、その現象に、島津侵攻(1586年)もしくは慶長の大地震(1596年)との関係を比定すれば、遺構間接合において挙げられた遺構群に中国産染付皿F群や中国産染付碗E-ⅠX類が含まれる点から考えて時期的にも申し分がない。

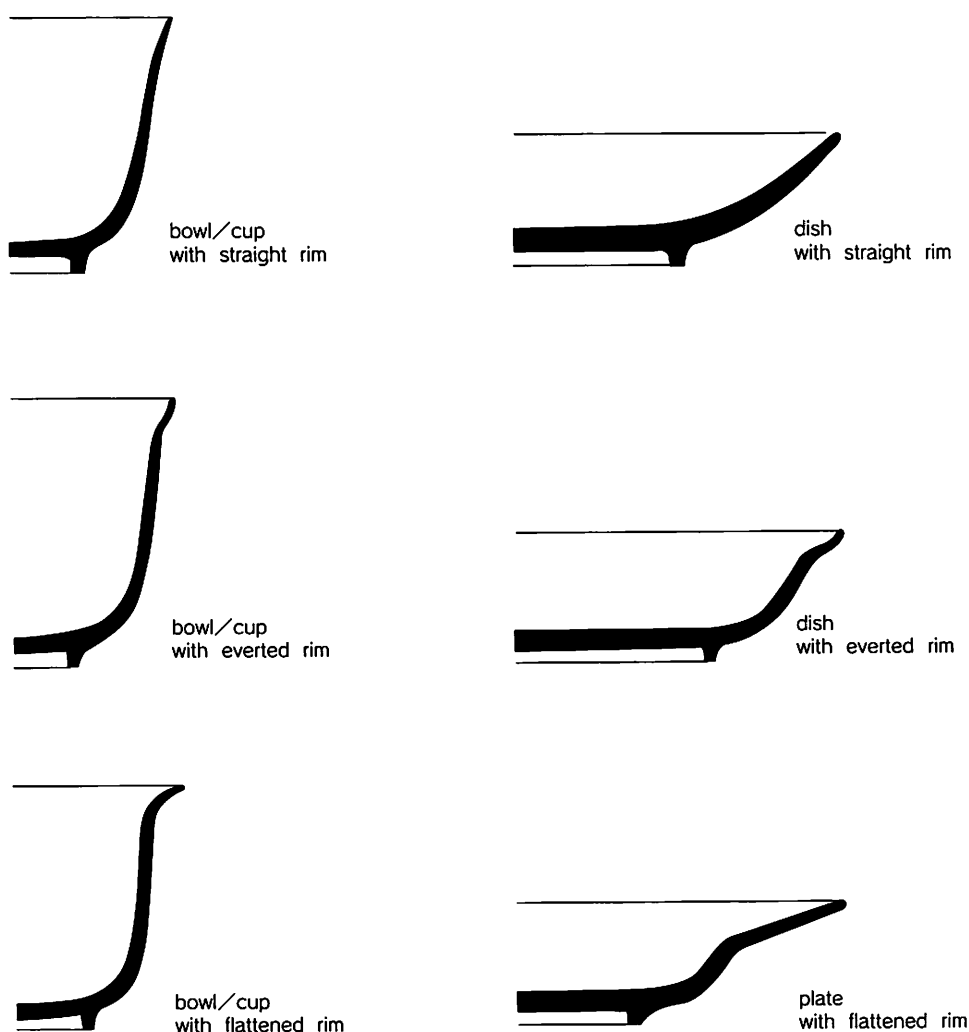
また、前述した通り、井戸遺構に関しては、SE260系井戸遺構形成時の層位SE261からは唐津系灰釉陶器碗が出土している。唐人町は、天正14～17年の『伊勢参宮帳』の記述から、島津侵攻直後、すぐに復興していることが指摘されるため、これらのことから、島津侵攻直後に廃棄したSE240、島津侵攻後に掘削され(SE261)、慶長12(1607)年の近世府内町完成に伴う中世府内町廃絶により廃棄されたSE260(廃絶期層位)と考慮すれば考古学的編年観には合致するものとなる。

⑥年代的位置付け

当遺跡出土の中国産染付に関しては、小野氏の分類における碗C群・E群と皿B-1群・C群・B-2群・E群・F群が出土しており、いわゆる、「16世紀的」様相を示す組成であるといえる。しかし、小野分類に該当しない口縁部形態である唐人町分類皿Ⅱd類・Ⅱe類・Ⅱf類が、これに加わる。唐人町分類皿Ⅱd類・Ⅱe類・Ⅱf類・Ⅲ類に関しては、Witte leeuw号沈船資料をはじめとして、17世紀前半頃の製品に類似する口縁部形態が確認されるため、「16世紀末葉～17世紀初頭的」様相とでもいうべき過渡的な様相を示すものである可能性がある。

よって、まずは「16世紀末葉～17世紀初頭的」様相に関して、当遺跡出土の染付と同様の口縁部形態が確認されるWitte leeuw号資料との比較を試みたい。Witte leeuw号は、1613年に沈んだオランダ東インド会社の船で、その積荷は考古学的に、その年の一括資料と評価されている³¹。すなわち、当遺跡出土資料と比較した場合、口縁部の形態変化の方向性を把握するには有効な資料であるといえる。

Witte leeuw号沈船資料では、①straight rim, ②everted lip, ③flattened rimと、口縁部を3種類に類型化している(第85図参照)。当遺跡出土陶磁器の口縁部形態をWitte leeuw号の分類と対照すると、①に対しては染付碗E群・染付皿E群(唐人町分類Ⅰc類)、②に対しては染付碗E-Ⅸ類(唐人町分類Ⅱ類)や唐人町分類皿Ⅱd類・Ⅱe類・Ⅱf類、③に関しては染付皿F群(唐人町分類Ⅲ類)に、それぞれ対比できよう。



第85図 貿易陶磁器口縁部形態分類表②(Witte leeuw号案)
※註31文献より転載・一部改変

小野1982によれば³²、1573年焼亡の一乗谷と、1585年焼亡の根来寺坊院跡の資料比較から、前者の主体が染付皿B-1群と皿C群であったのに対し、後者では、それらが減少し染付皿B-2群・皿E群が増加している事が指摘されている。そして、両遺跡において、すでに少量ではあるが染付皿F群が確認されている点も指摘されている。また、染付碗C群と同じ文様構成を持つ端反碗や16世紀後半の皿E群と同じ蛟竜文をもつ端反碗が存在し、16世紀末～17世紀初頭の染付碗には、端反り器形が増加する傾向を指摘している。

この先行研究に依拠すれば、当遺跡の出土中国産染付は、碗E群・皿E群を主体とした組成に、染付碗C群・皿C群と染付皿F群が混じる状況にあるため、16世紀中頃寄りの資料には染付碗C群や染付皿B-1群・C群が、16世紀末葉寄りの資料には、②everted lip, ③flattened rimといった16世紀末葉～17世紀的な特徴を匂わせる染付碗E-IX類・染付皿F群に代表される口縁部形態が混じる状況にあると考えられる。

②everted lipに関しては、唐人町分類碗II類として分類したものが該当し、口縁部が外反、すなわち端反り器形を呈するものである。Witte leeuw号沈船資料は、芙蓉手の様式が確立している時期であり、厳密にいうと唐人町分類との対照は難しいが、外反した後、上方に立ちあがる碗IIb類や、皿IIa・IIf類も存在し、それらの特徴は、芙蓉手の碗の口縁部形態を彷彿とさせるものである。唐人町分類碗II類は、口縁部内面に四方襷文帯を有し、文様構成的には染付碗・皿のE群、もしくはB-2群に近いもので、小野分類においては、E-IX類とE群の細分類として分類されている。年代的問題として残るのは、そのE-IX類の初源を碗・皿のE群やB-2群と同様に16世紀中頃に置くべきかということであるが、とりあえずは、確実にE群が主体となり、端反り器形が増加する16世紀の第4四半期頃を考えておきたい。16世紀末～17世紀前半の中国産染付を対象とした上田分類では、碗A-IV類として分類し、根来寺坊院跡の1585年以前の層を上限とし、1640～50年頃の大坂城第3層を下限としている³³。

③flattened rimに関しては、前述の通りWitte leeuw号沈船資料は芙蓉手の様式が確立している時期であり、小野氏の分類における染付皿F群とは意匠を異にするもので、いわゆる齔皿という口縁部形態のみの認識において両者は同一カテゴリー内にある。芙蓉手様式の初源的なものに関しては、上田氏により1585年焼亡の根来寺坊院跡において、すでに確認されることが指摘されている。当遺跡出土のSK403号遺構出土の皿b類に関しては、染付文様や呉須の発色が芙蓉手様式に近いものであり、Pre芙蓉手様式として評価してもよいものと考えられる。芙蓉手様式の出現に関しては、イギリス東インド会社(1600年)やオランダ東インド会社(1602年)の成立に直接関連してくる可能性が指摘されている。実年代の把握できる資料としては、江西省南城县万曆31(1603)年墓、広昌県万曆36(1608)年墓、Witte leeuw号沈船資料(1613年)等が挙げられることが多いが、いずれも1600年以降の資料に限定されている³⁴。

よって、府内で出土するPre芙蓉手様式の位置付けには、慎重にならざるを得ないが、これには、16世紀末葉～17世紀初頭における府内の歴史を考えることで年代下限を画することができる。当遺跡の存続年代の下限に関しては、中世府内町の廃絶時期との関連がでてくるため、文禄2(1593)年の大友氏除国以降である16世紀末葉～17世紀初頭の府内領主の変遷を整理すると以下のようになる。

早川長敏(1593～1597)

福原直高(1597～1599) →1597(慶長 2)年 「荷落」を「荷揚」築城開始
→1599(慶長 4)年 荷揚城三階高楼立つ

早川長敏(1599～1600)

竹中重利(1600～1634) →1602(慶長 7)年 城郭完成、荷揚城を府内城と改名
→1605(慶長 10)年 中世府内町の移転、壘濠を築き城下町の
体裁が整う
→1607(慶長 12)年 城下町の完成

以上のように、16世紀末葉～17世紀初頭の府内には、織豊系大名が合い継いで入府した。しかし、正確にいうと旧府内は早川第1期(1593～1597年)を除いて政治的拠点としては機能していなかったものと考えられる。福原直高は、慶長2年に、府内の北側の「荷落」の地を選定し「荷揚」と改名した後、城郭の建設を開始した。慶長4年には、その荷揚城に入城したが、これ以降、政治的拠点は旧府内を離れ、この「荷揚」の地に移り、慶長5年には「荷揚」の地は「府内」と改名された(以下、便宜上、旧府内と新府内と言い分ける)。問題は、その漸移性により生じる。城郭の完成(1602年)あるいは城下町の完成(1607年)を見るまでは、資金・資材・物資の調達・製作の拠点すなわち経済的拠点＝バックグラウンドとして機能し得るのは旧府内においては考えられないからである。

しかし、織豊系大名の政策として、旧権力の否定をおこなうにあたって、旧来の都市を否定することが広くおこなわれており³⁵、中世府内町の廃絶も織豊系大名による近世城下町への強制的移動という人為的な原因により、廃絶した可能性が高い。この点に関しては、近世府内町の町名と、『府内古図』に記載されている町名に同名の町名が多い点や、近世に入って著された『豊府聞書』(元禄11(1698)年)に、中世府内町の「町人を各町ごとに城下に移転させて整地段階から城下町建設に従事させた記述がある」こと等が指摘されており、遅くとも慶長12(1607)年の竹中期における城下町の完成をもって、強制的移動が完了したと見なすことが可能であるため、これを取りあえずの旧府内の終焉と考えたい³⁶。

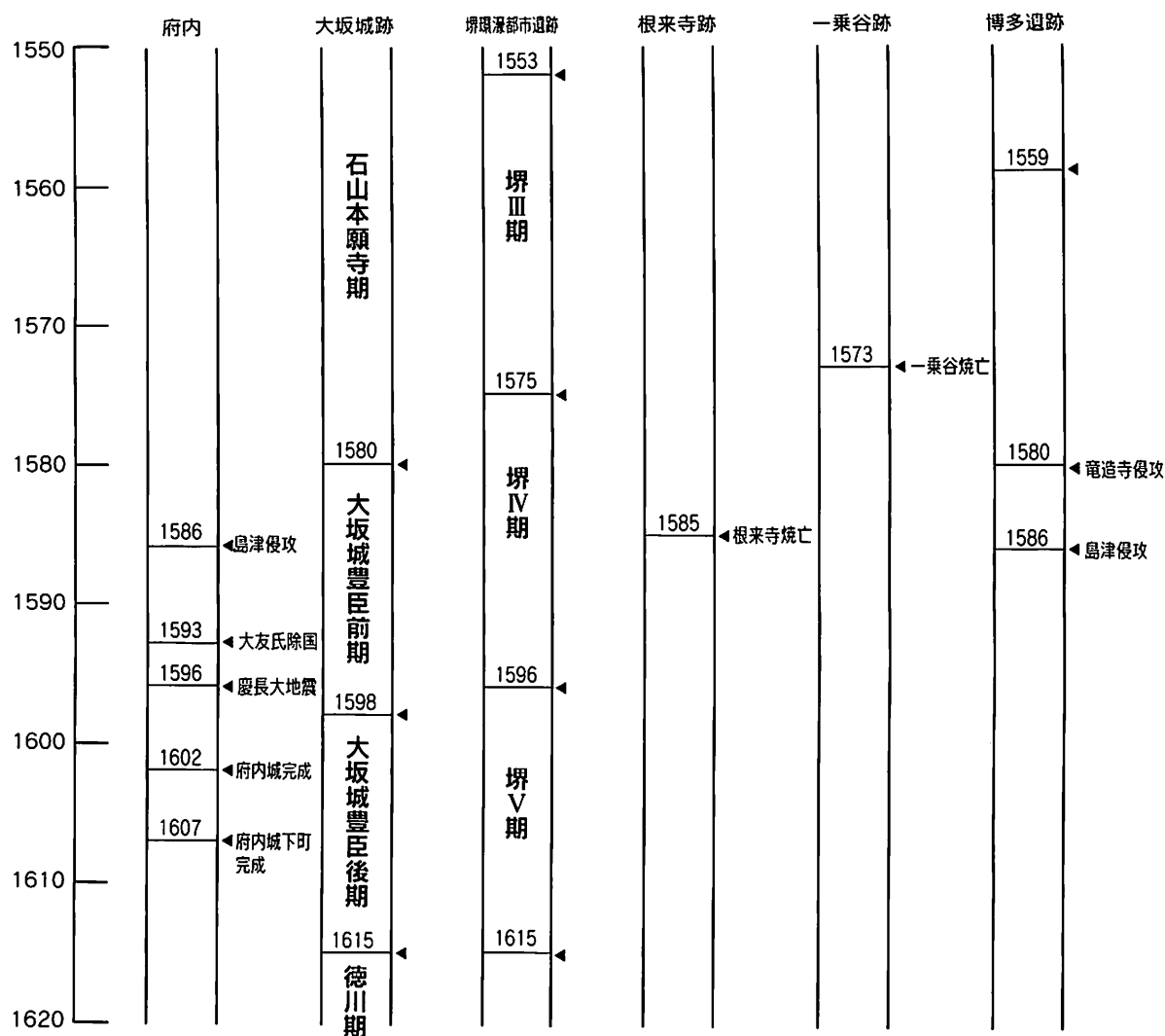
以上のように、中世府内の歴史を考えると、その終焉は17世紀初頭を含む年代幅を考えなければならない。よって、年代的検討を加えるにあたって、中近世をまたぐ遺跡と比較を試みたい³⁷。大坂城跡における時期区分は、層位とリンクしたもので、大まかには「8層・石山本願寺期(1496～1580年)→7層～・豊臣前期(1580～1598年)→～4b層・豊臣後期(1598～1615年)→4c層～・徳川期(1615年～)」といった変遷を明示する。なお、我が国において、芙蓉手様式の確立が層位的に確認される代表例としては、大坂城豊臣後期に当たる第Ⅵ遺構面及び第6層出土品に、その先駆的なものが確認されるが、定着するのは第5層～第Ⅳ遺構面及び第4層においてである。これらの層位は豊臣後期に当たることから、すなわち、1598年～1615年の間に芙蓉手様式の確立が確認される。因みに、「第Ⅴ遺構面及び第5層」からは「瀬戸美濃産陶器折縁ソギ皿」が、「第Ⅳ遺構面及び第4層」からは唐津系陶器が、徳川期に当たる第Ⅲ遺構面からは初期伊万里が出土し始める。

唐人町の組成を、大坂城の層位と対比すると、上限が「石山本願寺期」に、下限が「第Ⅳ遺構面及び第4層」に、ほぼ該当する。組成的には、「漳州窯系碗C群／碗E群／皿B-1群／皿C群／皿E群／漳州窯系皿」→「碗E群／碗E-Ⅸ類／皿E群／漳州窯系皿」→「碗E群／碗E-Ⅸ類／皿F群／漳州窯系皿」という漸移的な変遷が想定される。特に、中国産染付の内、碗E-Ⅸ類・皿F類に比較的優品の多いことは注目に値する。

以上のように、陶磁器組成の検討をおこなった結果から、年代的な考察を中国産染付から加えると、E群を主体として、古相に碗C群と皿B-1群・C群が、新相に碗E-Ⅸ類と皿F群が含まれることが伺われる。

それでは改めて、遺構の性格をあいまみえて年代観を検討するため、比較的遺物が豊富な井戸遺構からの出土資料を用いたい。当調査区における人間の定住根拠としては、井戸遺構が代表的なものである。井戸は、老朽化や戦火にともなう廃絶、そして掘削がおこなわれるものであると考えられ、都市遺跡では、居住者の変遷とも密接にかかわりあうと考えられる性格をもつ遺構である。当遺跡では、僅かな調査面積内に6基もの井戸が存在する。この現象は、都市遺跡としての人口の過密化を具現するものであると考えられるとともに、上述の如く住民の変遷をも意味するものである可能性がある。

当遺跡においては、遺物組成の差からSE230→SE240→SE260との変遷を想定すれば、前述の考古学的年代観においては理想的である。前述の「漳州窯系碗C群／碗E群／皿B-1群／皿C群／皿E群／漳州窯系皿」→「碗E群／碗E-Ⅸ類／皿E群／漳州窯系皿」→「碗E群／碗E-Ⅸ類／皿F群／漳州窯系皿」という組成の変遷に関しては、そのまま、SE230→SE240→SE260という変遷にも相当し、その組成は、大坂城跡における「8層」～「第Ⅳ遺構面及び第4層」の間の組成を示す。



第86図 遺跡間年代対応表

因みに、府内における年代上の定点となる資料として、中世府内町跡第3次調査におけるSX210号遺構出土資料が挙げられる³⁸。SX210号遺構は、焼土で形成される埋土から、1587年の島津氏の府内侵攻直後に、その年代が比定されている。組成は、「碗E群／碗E-IX類／碗F群／皿B-1群／皿E群／皿F群」に朝鮮産白磁や東南アジアの陶磁器を含み国際色豊かな一括遺物である。また、同様に「博多遺跡40次調査4号土坑」は、1580年の竜造寺侵攻、もしくは1586年の島津侵攻に比定される一括遺構であるが、中国産陶磁器に関しては、ほぼ同様の組成を見せる。当調査区においては、やはり焼土粒を含むSE240が、この島津侵攻時に比定される。

問題は、いずれの井戸遺構にも、すでに染付碗E群・皿E群が含まれていることである。従って、井戸遺構が過密して形成され始める段階に関しては、全国的に碗・皿にE群の比率が上昇してくる1570年代が考えられるが、ここでは「16世紀の様相」として幅をもって16世紀中頃～1570年代頃にかけての組成であると考えておく。因みに、井戸の廃絶時には、全ての井戸遺構から1570年代前後に登場するといわれる交差揃り目の備前産焼締陶器摺鉢が出土している。このように考えると、中世都市としての府内の急速な発展は、16世紀後半という時期に極めて限定されることになる。

それでは、16世紀前半の府内町はどのような状況にあったのであろうか。考古学的に、その時期の歴史叙述を許す遺物としては、ほぼ土師器に限定されてくる。以下、次節においては、土師器における考察を加える。

(2)土師器について

①土師器の組成と年代観

土師器に関しては、通時的に層位学的検討の施された大友氏館跡の中枢部に比定される第6次調査区の分類と年代観³⁹を中心として、ロクロ成形土師器と京都系土師器の相対的な年代の位置付けが成されている千人塚遺跡⁴⁰の成果を援用する。両論は、前者が層位学的検討であるのに対し、後者が型式学的検討である。

千人塚編年の年代観としては、千人塚遺跡Ⅰ期を15世紀後半～16世紀初頭、Ⅱ期を15世紀末葉～16世紀初頭、Ⅲ期を16世紀前半～中頃、Ⅳ期を16世紀後半～末葉と考え、京都系土師器に関しては、千人塚a期が16世紀前半、千人塚b期が16世紀後半～末葉と考えていた。

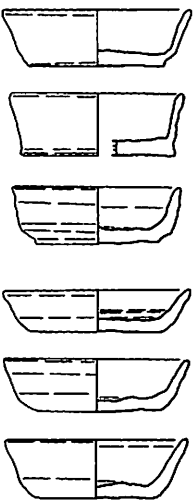
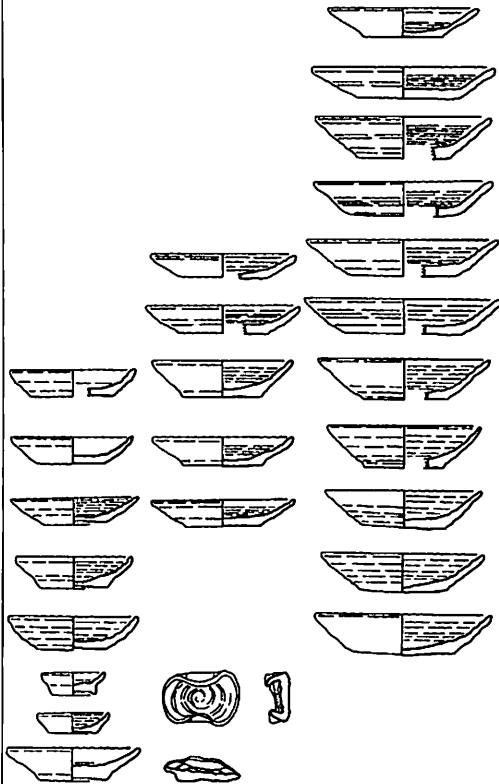
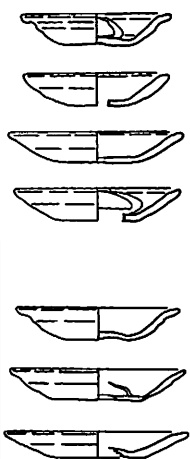
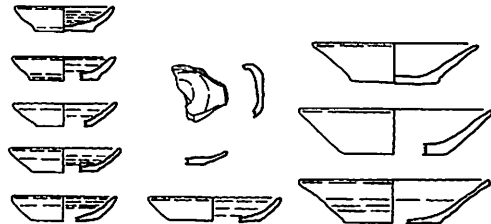
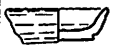
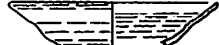
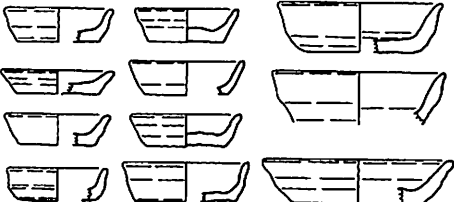
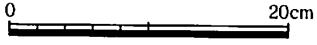
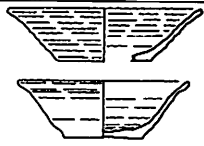
大友氏館跡6次の層位学的検討においては、大友氏館跡6次調査第4層が千人塚Ⅳ期に、大友氏館跡6次調査第Ⅱ面が千人塚Ⅲ期に、大友氏館跡6次調査第5層・第6層は千人塚Ⅱ～Ⅲ期に、それぞれ該当する。本項では、その層位学的検討に対照させるかたちで、唐人町出土土師器の年代把握を行う(第87・88図参照)。

当調査区からは、1298片の中世土器が出土している(第78・79図参照)。その中世土器を、土師器の坏皿類と瓦質土器・土師質土器のいわゆる雑器類に大別すると、(土師器1188片／土師質土器6片／瓦質土器104片)という数値を示し、それぞれ(土師器92％／土師質土器0％／瓦質土器8％)の割合を示す。瓦質土器に関しては、その大半である62片が火鉢である。本節においては、土師器の坏皿類を中心に、その組成と年代観を把握する。土師器坏皿類に関しては、大まかにA・B・C群の3群に大別している。A・B群に関しては、ロクロ成形品である。A群に関しては口径と底径にあまり差の無い深いハコ形の坏で、B群に関しては口径と底径に差のある皿のことを指す。C群に関しては、手捏ね成形品で、いわゆる京都系土師器皿のことを指す。当調査区出土土師器の破片点数を挙げると、その内訳は、(A群55片／B群327片／ロクロ不明166片／C群635片／焼塩壺4片／燭台形土器1片)となる。ロクロ成形品と手捏ね成形品を比較すると(ロクロ成形品548片／手捏ね成形品635片)となり、それぞれ(ロクロ成形品46％／手捏ね成形品54％)という割合を示す。更に、確定できる群ごとの割合は(A群5％／B群32％／C群63％)を示す。

以上のように坏皿類に関しては、C群が大半を占めるが、これは、当遺跡が16世紀後半を主体とする遺跡であることが原因と考えられる。分類群は、A群に関しては15世紀以前、B群に関しては15世紀後半～16世紀前半、C群に関しては16世紀代に、それぞれ主体的に用いられるものであるため、陶磁器の考察を加味しても16世紀後半を主体とする当遺跡においては、C群が主体となるのは当然の結果である。また、この数量の差は、土師器の使用方法によるものとも考えられる⁴¹。京都系土師器の導入は、大友領国における武家儀礼の儀器として用いることがその要因と考えられ、その代表的な使用法は大量使用である。調査においては、その残滓としての大量廃棄土坑の確認をもってして、その行為が想定されるが、大量使用を見越した土師器生産量が想定されるため、この割合差は使用法の差異を示すものとも考えられる。

さて、年代観であるが、まずは、遺構の変遷をリンクさせて考える必要がある。前節の遺構間接合における空間分析の項において、16世紀後半に帰属できる遺構が推定建物Bを取り囲むように展開する事実を述べた。この推定建物Bのプラン下、すなわち推定建物Bに先行する遺構群からは、京都系土師器でも千人塚a期に帰属すると考えられる遺構群と京都系土師器自体を含まないB群を主体とした遺構群が展開する。その遺構群は、SK286・SK287・SK375・SX417と、4-K04グリッドに集中する。

SK287・SK381・SX417出土の京都系土師器皿は、千人塚遺跡a期に比定される。また、SK375は、遺構形成時に関してはプライマリーではないが、遺構の新旧関係から本来はSX417に帰属していたものと考えられ、遺物の製作年代としては同様の時期に該当するものである。SK286・SK287・SX417出土のロクロ成形土師器は、B群により構成され、大友氏館跡6次調査における層位学的成果に

	A 群	B 群	C群
第Ⅱ面			
第5層			
6層			
第Ⅲ・Ⅳ面			
第Ⅴ面			

第87図 大友氏館跡第6次・第10次調査区出土土師器基本層序対応表

対照した場合、第Ⅱ面～5層・6層の間に位置付けられよう。したがって、推定建物Bに先行する遺構群は、概ね15世紀末葉～16世紀前半の期間に位置付けられる。また、SP447出土の土師器皿は、乳白色を呈し、非常に薄造りで大友氏館跡6次調査第5層・6層以下の層位で出土するものである。

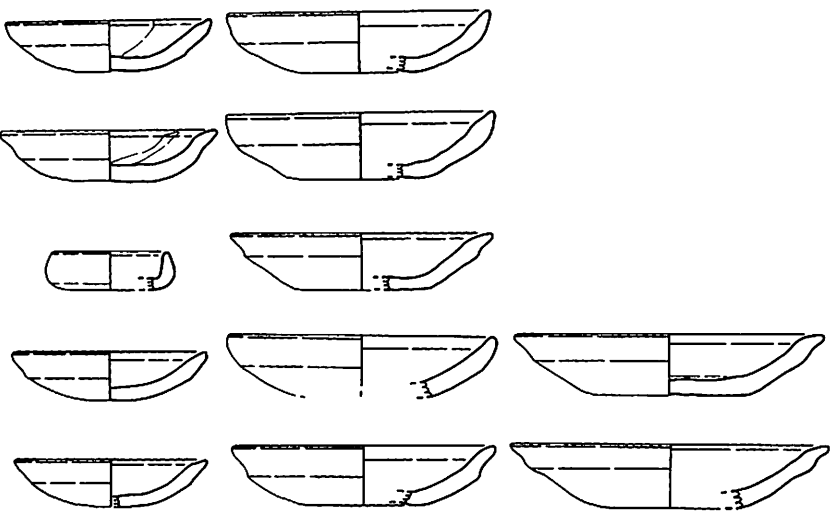
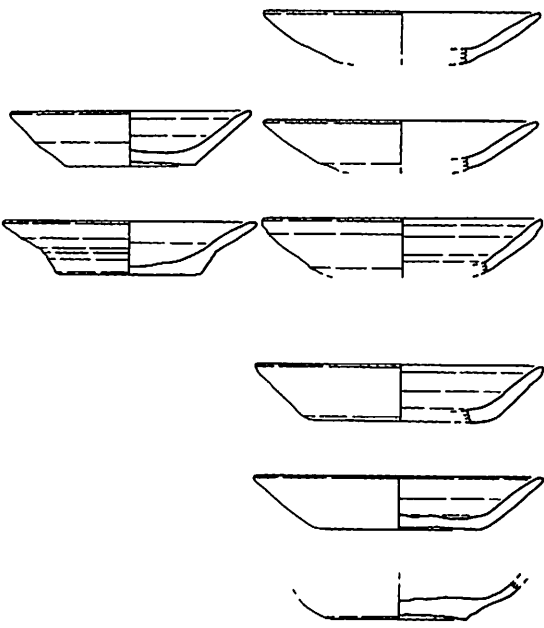
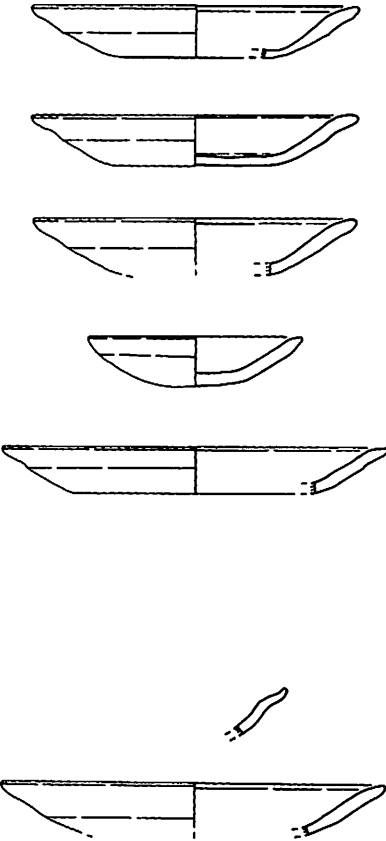
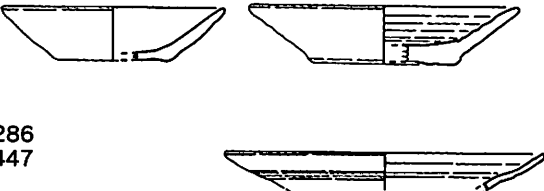
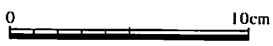
その他の遺構出土の京都系土師器に関しては、そのほとんどが千人塚b期に該当し、井戸遺構に代表される生活・定住痕跡を示す生活遺構は、全て千人塚b期に展開するものであることが指摘され、そのことは同時に今回調査されたほとんどの遺構が16世紀後半～17世紀初頭の期間に形成・埋没したものであることを示し、陶磁器における考察と同様の結論が導き出される。陶磁器における考察のように、「16世紀末葉～17世紀初頭的」様相という画期が、土師器においても設定されることが考えられるが、現段階では情報化のレベルにおいて分析に困難が伴う。しかし、16世紀末葉という遺構埋没の時期のみを満たすものであれば、前述した陶磁器において確認された遺構間接合の認められるSE100・SX121・SE240・SE260・SK391・SX399が挙げられる。

問題は、陶磁器の分析において抽出が困難であった16世紀前半以前に帰属できる資料の抽出である。前述の如くSK287・SX417出土の京都系土師器に関しては、古相を示すものであり相対的にも16世紀前半以前に比定されるものである。また、そのSK287に削平されるSK286に関しても同様である。それらの資料は、小路遺跡⁴²や千人塚遺跡等の県内出土資料と比較しても、15世紀後半～16世紀前半内に収まる資料として時間軸上に位置付けられるものである。したがって、推定建物Bに先行する遺構出土の土師器の年代観に関しては、概ね15世紀末葉～16世紀前半の期間に収まる資料であると考えられ、大友氏館跡6次調査における層位学的成果においては、第Ⅱ面～5層・6層の間に位置付けられる。

調査過程において把握される事象としては、調査の進展に伴い、古い遺構ほど、その組成中に土師器の割合が増加する傾向が確認できる。このような遺物組成の変化は、生活様式の変化と捉えることもでき、より具体的には、武家から町民へといった生活者自体、或いは武家の町民化といったような生活形態の変化であると捉えることも可能である。当調査区における「短冊状地割」の形成を伴うと考えられる急激な遺構の過密化傾向は、16世紀後半以降の現象であることが指摘できるため、16世紀後半の南蛮貿易の開始を画期・象徴とする生活様式の急激な変化が想定される。町造りの形成において、生活者が武家から商人をはじめとした町人へと住み替えがあったとも想定が可能である。

一方、16世紀前半以前には、より過疎的な遺構の展開が推察され、可能性として広域な敷地を要し儀器である土師器を使用するような人種・階層の居住が考えられる⁴³。したがって、唐人町の形成時期に関しては、やはり、16世紀後半以降のことと考えられるのである。

勿論、16世紀後半の府内町を写し取ったと考えられる『府内古図』をもとに作成した『府内復元想定図』に照合した場合、当調査区は推定唐人町に当たることから、日本人から中国人へと遺物様相が変遷した可能性も考えられるが、このような生活様式の劇的な変化は、中世大友府内町跡において普遍的な現象であると考えられるため、今回の報告に関しては、その指摘は避けることとする。

	B 群	C 群
第 4 層 対 応	SE260系列 SE270系列	
第 II 面 対 応	SK287 SK375 SX417 	
第 5 層・6 層 対 応	SK286 SP447 	

第88図 唐人町出土土師器対応表

第Ⅵ章 まとめ

1. 世界史の中の豊後府内

推定唐人町跡である当調査区では、井戸遺構が密集するなど都市遺跡的な遺構配置が確認された。出土遺物から考えられる年代観は、ほぼ16世紀代の範疇におさまるもので、遺物の組成と量からは後半代にピークをむかえることが判明した。当調査区のほとんどの遺構は、この16世紀後半代に帰属し、貿易陶磁器のみを参照した場合、16世紀後半に突如現れた都市のように考えてしまいかねない遺物組成である。しかし、周辺調査区では、古代そして14世紀後半～15世紀代の遺構が散見されているため、この貿易陶磁器に見られる現象は、1543年以降の西洋における大航海時代の日本への到達や、1567年以降の明における海禁策の緩和を具現するものとして捉えるのが妥当であるかもしれない。すなわち、急激な国際化とそれに続く発展を示す現象であると評価できる。一方、土師器からは、15世紀末葉～16世紀初頭にかけての府内町の広がりが見えたが、遺物量的には微々たるものである。14世紀～15世紀の遺構群に関しては、前述したように14世紀初頭に開かれた万寿寺の寺域・境内町の展開であると考えられ、15世紀末葉～16世紀初頭と考えられる大友館の府内町への進出の問題⁴⁴も含めて、16世紀後半の展開とは、一度、切り離して構造的に考える必要が生じる。本書最終章たる本章では、16世紀後半～17世紀初頭にかけての国際情勢の中に、「府内」を、そして「唐人町」を位置付けることで、終章としたい。

2. 国際港市都市府内

16世紀は、世界史的・日本史的に見ても激動の時代である。歴史学者ウォーラーステインは、「長期の16世紀」と表現し、その前後の15世紀後半と17世紀前半との連続性・重要性を強調する。その期間は、くしくも東南アジア史において、歴史学者アンソニー・リードが提唱した1450年から1680年までの「交易の時代 the Age of commerce」と重複する⁴⁵。この時代は「15世紀以後、急激に拡大した国際交易が、貿易船の航路にあたる沿岸諸地域に港市の発達をもたらし、これによって東南アジア各地が人、もの、情報の交流によって緊密に結ばれる一方、交易のもたらす富が各地の政治基盤の強化に貢献し、その結果、「港市国家 port-polity」と呼ばれる新しいタイプの国家群が、臨海諸地域に相次いで誕生した時代」を指し⁴⁶、西洋においては、15世紀末～17世紀初頭に渡る大航海時代と重複するものである。

「港市国家」とは、国際交易港的機能を中心とした都市によって成り立った都市国家とでもいうべき国家形態であると評価できる⁴⁷。大航海時代において、突如、発展した、文字通り西洋文化の洗礼を受けたアジア都市としては、1511年にポルトガル人に占領されたマラッカをはじめとして、アチェやバンテン、マカッサル等の港市国家、1553年にポルトガル人が居住し始めたマカオ⁴⁸、1571年にスペインに占領されたマニラ等が挙げられる。このアジアにおける都市建設或いは再開発は、同一の世界経済的要因を共有するものであり、豊後府内も、この港市として機能したと考えられる。

これらの東南アジア諸都市と比較して、豊後府内の場合、西洋人による占領というプロセスを踏まないため、西洋の知識を得ながらも独自の都市計画を遂行したと考えられる⁴⁹。文献資料によると府内には、ポルトガル船が少なくとも1545年、1551年、1560年の三度来航しており、その内1551年には、フランシスコ・ザビエルが府内を訪問している。1553年には府内教会が、1555年にはルイス・アルメイダにより幼児収容施設や住院及び礼拝堂施設を兼ね備えた府内病院が、1580年には府内コレジオが建設されている。また、ローマ教皇は、1575年にマカオ司教区を設定し日本はこれに含まれたが、1588年には(豊後)府内司教区が新設された。これ以降、府内はイエズス会宣教師達にとってみれば豊後の首都の位置付けとなり、事実、彼らは少なくとも府内を豊後国の首都(capital)と評価していたらしい⁵⁰。この流れの中においては、府内は都市論から首都論へと一歩踏み出せる可能性を保持しているといえる。

大友義鎮は1557年～1563年にかけて臼杵に丹生嶋城とその城下を、嫡男の義統は子の義述に命じ

「国中諸侍の鶴崎への集住」をおこなわせるべく、城と城下町の建設を計画していた。16世紀後半の豊後は、都市の建設ラッシュ、まさに都市革命(Urban Revorution)とでもいうべき状況の真っ只中にあったと評価できる。全国的にも、各地の戦国大名による城下町建設など日本都市史においても、まさに革命期であるといえる。この中において、きちんと認識しておかなければならないことは、都市が地方領主によって作る対象となっている事実である。

このような情勢の中、16世紀後半の府内は、突如として必要とされた新たな都市機能を満たすために再開発されたと考えられる。大友家当主であった大友義鎮は、1563年に臼杵に移っているが、1578年には府内に政庁を戻している。大友氏の臼杵への移転は、朝倉氏の一乗谷への移転を想起させる。朝倉氏の一乗谷移転に関しては、越前府中に一部権限を置いてきた状態での遷都であった。そのような意味において、府内は、伝統都市或いは正統都市として、ゆるがせない価値を有していたに相違なく、そのことが1578年の臼杵から府内への再遷都につながるものかもしれない。或いは、豊後国内において、都市の分業化が求められた結果であるとも考えられる。すなわち、一領国内における都市機能の拡大は、一つの都市では成り立たないほどに膨張し、軍事的に考えても複都制的機能分化が必要とされた可能性が指摘されるのである。

世界的に見ても、この世紀に都市のありかた自体が変わってきたことに相違なく、我々は、世界史的視野において、この日本における都市革命を評価する必要があるだろう。そして、日本におけるこの都市革命ともいうべき状況は、東南アジア諸港市都市の成立と同一の以下のような世界経済的要因を共有するものであった。

明は、倭寇の鎮圧後、1567年に東南アジアへの渡航・貿易に限って海禁を緩和し、ここに、(すでに名目上のものとはなっていたが)冊封体制・朝貢貿易という管理貿易に支えられた中華帝国を中心とした経済システムが名実共に崩壊を始めたのである。このことによって、大陸南部の海商は、南海への進出が盛んになり、逆に中継貿易を生業とした琉球王国は衰えた。『歴代宝案』によると、1570年を最後に琉球から東南アジアへの渡航が確認されなくなる。これは、いうまでもなく、海禁策を解いた明王朝の政策の煽りを受けたものであると考えられ、府内は、この時代に琉球と明暗を分けるかのごとく栄えた。すなわち、中継業者を介さず、大量の商品が安価に出まわった結果、急激な発展を遂げる都市が発生したのである。逆説的に考えると、このような情勢の中では、都市建設が資本の流出を防ぐ最大の経済上の防御策であったともいえる。

また、この日本への大航海時代の到達は、それまでの勘合貿易・朱印船貿易といった「管理交易」から、当事者同士の直接交易である「市場交易」への転換を意味した⁵¹。この転換に関しては、勘合貿易体制の解体過程を介すると理解し易い。勘合貿易(1404～1547年 全19回)の利権の移動は、將軍の手から細川一堺商人・大内一博多商人の両氏へ、そして、堺・博多商人の手に落ちるといった経過をたどり、次第に多極化・分散化してゆく過程が段階的に把握される。この日本の経済上の動向と、中国の海禁策の緩和が見事に合致した結果として、爆発的な市場交易の隆盛が生じたのである。この市場経済の申し子として、王安直に代表される後期倭寇の隆盛が生じるのであるが、後期倭寇の動きは、物流だけでなく中国人の移動を伴い、各地に「唐人町」という外国人居留区を形成した。戦国時代の豊後においては、府内と臼杵に、その町名が知られる。

3. 豊後府内の唐人町

文献史料によると、16世紀の府内には、前述の府内唐人町在住の数人を除いても、他に多くの中国人名が確認される。例えば、岡山県邑久町の餘慶寺に伝わる梵鐘は、元亀2(1571)年に、二人の明人が寄進したものであるが、鐘には以下の銘が彫られている。

奉寄進鐘之事、
大日本国九州豊後国
大分郡府中今小路
惣道場、

右願主大明台州府 盧高
平羊県陽愛有

于時元龜第二辛未歲七月十三日

(余慶寺梵鐘銘)

この記載は、今小路に道場が存在していたという事実にも注目されるが、その前の部分が興味深い。この「大日本国九州豊後国大分郡府中今小路惣道場」という記載は、東洋基準、いや世界基準といっても良い住所記載法である。また、「台州府 盧高」・「(温州府)平羊県陽愛有」という記載も、現浙江省所在のもので王安直に代表される中国東南部と豊後を結ぶ私貿易関係ルートの存在が推察される。

その他にも、

大仏油蛸早速造立之段、神妙思食候、然者御負物之儀雖被
仰付、尚以為御褒美、国役被成御免除候、并居屋敷被加御
扶助候、可得其意候也、

八月九日 (豊臣秀吉)
(朱印)

陳元明

(陳文書)

其方事、大仏油蛸為調、兩度上洛辛勞感入候、然者国役免
許、居屋敷八軒半扶助之事、任 御朱印之旨、領掌不可有
相違候、恐々謹言、

九月六日

(大友)
吉統 (花押)

陳元明

(陳文書)

という史料で知られる、陳氏に関しては、永正3(1506)年に現江蘇省の揚州府から陳李長の代に肥前に移住し、その子陳覚明が永正13(1515)年に豊後府内に移転してきたということが伝わっており、さらに次代の義明、次々代の元明の代まで府内に居住し、天正16(1588)年に、臼杵の唐人町に移住したとされる。元明は、智元仏師と呼ばれた仏像師で、豊臣秀吉の方広寺大仏建立の際に漆喰塗りの技術職人として馳走奉公している。臼杵の唐人町に関しては、文禄2(1593)年の検地帳をみると、「帶漢」「徳鳳」「元明」「三宦」「平湖」「二高」という中国系の人名が記載されており、この内の「元明」は、前述の陳元明のことであると考えられている⁵²。また、豊後府内が1515年には既に中国人技術者の移住地の対照となっている点は、大いに評価すべきで、府内の発展画期や大友館の成立・改修にも関連させることのできる事実である。

都市論的な問題点としては、この居留区が唐人によって自己防衛機能を含めて派生的に形成されたものであるのか、それとも府内領主によって意図的に形成されたものであるのかという点にある。

この時期の日本人もマラッカやホイアン、マニラに日本人街を形成していた。このような国際港市においては、外国人問題という国際的都市問題を抱え始めていたことが指摘される。マニラなどで

は、スペイン人により植民都市として城壁都市イントラムーロスが築かれ、1581・82年以降、中国人指定居住区パリアンを設置し、人口の上限などを定めるなどして中国人を管理していた。

豊後における唐人町に関しては、臼杵であれば丹生嶋城に近く海に面した商業的にも優れた地域に配置されており、府内であれば大友館跡の北辺に道路を挟んで近接する。この配置に関しては、優遇措置として評価すべきものであろう。事実、上記資料により、今小路町など、唐人町以外にも中国人が居住していたことが確認されるため、中国人を管理する指定居住区という性格のものでは無かったようである。また、彼らは、前述の陳氏のように数代にもわたって日本に居住し、次第に同化していったものと考えられる。しかし、中世華僑としての人脈・物流などのネットワークは世代を超えて維持していたに違いなく、多くの中国系移民が豊後府内へと到ったに違いない。

中国人街は、市場経済が広がり始める16世紀代に入って、多くの土地に形成され始めたものと考えられ、豊後府内の唐人町は、この時期に形成されたものに含まれる⁵³。文献記録に残る博多や坊ノ津、平戸などは自主的な集住に始まると評価してよいものと思われるが、豊後府内においては、有力な在留中国人を館周辺に集住させ掌握しようとする意図が、その配置から推察される。

秀吉は、九州平定後、1587年には長崎を直轄領としてバテレン追放令を発し、1588年には海賊取締令の公布、1592年には朝鮮出兵をおこない次々と厳しい対外政策をとった。しかし、一方では、1592年に朱印船貿易を開始するなど対外交易に積極性を見せる側面もあわせもっている。そのような経緯の中で、秀吉は、大友義統を1593年の朝鮮出兵における失態を理由に改易し、大友氏による豊後支配は、その1593年にその幕を閉じるが中世豊後府内の「唐人町」は、その後も生き続ける。1593～1607年の間、早川、福原、竹中などの織豊系大名により荷落(後に荷揚)の地に近世城下町が建設されるが、「唐人町」は、その一角に町名を保ったまま移転させられた。そして、現代に到るまでその町名は市民の心に留められていたのである。

O・シュペングラーは、その著書『西洋の没落』の中で「世界史は都市史である。」と述べている⁵⁴。豊後府内は、まさに、その大航海時代と出会い、西洋史と接触し、世界史に編み込まれた都市であったといえる。

註・参考文献

- 1 森田 勉 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 2 上田秀夫 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 3 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 4 乗岡 実 2000「備前焼揃鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』 中近世備前焼研究会
- 5 大橋康二 1989「肥前陶磁」考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 6 日本貿易陶磁研究会 2000「城館出土の貿易陶磁器」貿易陶磁研究集会 四国大会資料集 日本貿易陶磁研究会—織豊前夜の西国大名と貿易— 日本貿易陶磁研究会
- 7 亀井明徳 1986「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題」『日本貿易陶磁器史の研究』 同朋舎出版
- 8 田中克行 1984「摂津高槻城」本丸跡発掘調査報告書 高槻市教育委員会
- 9 佐藤信・吉田信之編 2001「都市社会史」新体系日本史 6 山川出版社
小川 信 2001「中世都市「府中」の展開」思文閣史学叢書
- 10 木村幾多郎 1996「高国府・勝津留考」『Funai 府内及び大友氏関係遺跡調査研究年報 V』 大分市歴史資料館
- 11 山中敏史 1998「地方都市の出現」『古代史の論点 3 都市と工業の流通』 小学館
- 12 河野史郎 2001「中世府内町跡」4 大分市教育委員会
- 13 伊藤 毅 1989「中世都市と寺院」高橋康夫・吉田伸之「日本都市史入門 I 空間」東京大学出版会
- 14 玉永光洋 1997「豊後府内の形成と寺院」『中世都市研究 4 都市と宗教』中世都市研究会
- 15 木村幾多郎 1993「研究ノート 府内古図の成立」『大分市歴史資料館年報 1993年度』大分市歴史資料館
- 16 大分市史編纂委員会 1987「大分市史 中」大分市大分市史編纂委員会 1987「戦国時代の府内復元想定図」『大分市史 中巻付図II』大分市
- 17 大路の呼称に関して鹿毛敏夫氏は、南北路の内、大分川側から西へ順に一之大路、二之大路、三之大路、四之大路と呼称している(第2図参照)。
鹿毛敏夫 1999「戦国に都市をつくる」『府内と臼杵から戦国の世界が見える～都市・貿易・民衆～』大分県先哲資料館
しかし、現時点では南北路の全てを大路とは断定できないため、それぞれ南北路1、南北路2、南北路3、南北路4と呼称した。

- 18 上野淳也 2000「第2章 歴史的環境」「大友館跡 II」大分市教育委員会
 - 19 勿論、あくまでも範型としての京都認識であり、忠実に機能面まで模したのではないものといえる。
 - 20 渡辺澄夫 編「豊後国 荘園公料史料集成(上)」別府大学
 - 21 飯村 均 1999「遺跡のかたち都市のかたち」「都市研究の方法」中世都市研究 6 中世都市研究会 新人物往来社
 - 22 斉木秀雄 1991「板壁掘立柱建物跡の提唱」「都市空間」中世都市研究 1 中世都市研究会 新人物往来社
 - 23 前川 要 1991「都市考古学の研究 ―中世～近世への展開―」柏書房
 - 24 木村幾多郎氏から御教示を得た。
 - 25 高島 豊 1997「中世大友城下町跡第1・2次調査」「大分市埋蔵文化財調査年報Vol.8」大分市教育委員会
 - 26 鈴木秀典ほか 1988「大坂城跡」Ⅲ 財団法人大阪市文化財協会
 - 27 小野正敏 1997「戦国城下町の考古学」講談社選書メチエ108 講談社
 - 28 小野正敏 1985「出土陶磁よりみた15、16世紀における両期の素描」「MUSEUM」416 日本貿易陶磁研究会
 - 北野隆亮 1990「15・16世紀の貿易陶磁器―1980年代の編年研究を中心として」「貿易陶磁研究」No.10 日本貿易陶磁研究会
 - 29 金城亀信 1990「豊見城村内確認の明代三彩鶴型水注」「沖縄県教育委員会 文化課紀要 第6号」沖縄県教育委員会
 - 30 中世末～近世初頭の瓦といわれるもので、タタラからコビキする道具の違いで分類したもの。コビキAが弧線に直交する方向で切るところから、鉄線ないし糸の両端を手にもって手前にひっぱるのに対し、Bは軸木につくりつけた張力の大きい鉄線でもって横筋と同一方向に切りとったと考えられるものである。窯瓦や布製紐痕の有無も分類の目安となる。コビキAは、内膳町(楽楽第)を最新とし、文禄三年以降の伏見城には見られず、逆にコビキBは大坂城が初現になっており、天正後半期～文禄年間にかけて転換したことが考えられるものである。註8と同文献
 - 31 RIJSMUSEUM Amsterdam 1982 「THE CERAMIC LOAD OF THE WITTE LEEUW 1613」RIJSMUSEUM Amsterdam
 - 32 註3と同文献
 - 33 上田秀夫 1991「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」「関西近世考古学研究 I」関西近世考古学研究会
 - 34 森村健一 1994「福建省漳州窯系陶磁器(スワトウ・ウエア)の編年」「SWATOU」福建省漳州窯系陶磁器について II 西田記念東洋陶磁史研究グループ・大坂城研究会・堺環濠都市遺跡研究会・関西近世考古学研究会
 - 35 前川 要 1991「地割論―近世城下町成立期における盛土整地の意義―」「関西近世考古学研究 I」関西近世考古学研究会
 - 36 木村幾多郎 2001「豊後府内城下町移転と旧府内町」「大分・大友土器研究会論集」大分・大友土器研究会
 - 37 註25と同文献
 - 38 註26と同文献
 - 39 上野淳也 2000「大友館跡出土土師器について」「大友館跡 II」大分市教育委員会
 - 40 上野淳也 1999「千人塚遺跡出土土師質土器皿について」「千人塚遺跡」大分県緒方町教育委員会
 - 坂本嘉弘 1999「千人塚遺跡」大分県緒方町教育委員会
 - 41 小野貴史 1999「大友氏における「式三献」の導入について」「大分・大友土器研究 第25号」大分・大友土器研究会
 - 塩地潤一 1998「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」「法喰唯 第6号」博多研究会
 - 42 後藤一重 1999「小路遺跡」大分県教育委員会
 - 43 この指摘は、「中世大友府内町跡第4次調査報告」において既に河野氏が指摘するところである。
 - 44 大友氏館跡第6次調査では、館の中核部分において基段状の盛土整地が確認されている。京都系土師器の確認は、その盛土整地以後のことである。また、耳皿を含む土師器皿の多法量化が、盛土整地直後に確認されるため、盛土整地成立時期が、大友氏館の成立時期である可能性が高いと考えている。また、大友義鑑が天文年間に発した館改修に係る文書が複数確認されているため、その改修に先行する館の存在が想定される。盛土整地がどちらの時期におこなわれたものであるのか、その時間的位置付けが重要となる。上野淳也 2000「大友館跡 II」大分市教育委員会
 - 45 アンソニー・リード、平野秀秋・田中優子訳「大航海時代の東南アジア」I・II 法政大学出版局
 - 46 石井米雄 2001「総説」「東南アジア史」3 東南アジア近世の成立 岩波書店
 - 47 交易依存度が極めて高く、その反面農業依存度は極めて低いものであり、内陸の農地開発度は極めて低いものであった。その点に関しては、府内とは異なる。
 - 48 実際に居住し始めたのは、1557年以降とされている。
 - 49 府内では、南蛮貿易を介して国際的な経済力を身につけ、諸外国人の目を気にしながら首都たる景観を備えるべく都市の建設が行われた可能性が考えられる。
 - 50 松田毅一・川崎桃太郎 1978「ルイス・フロイス 日本史」7 豊後篇 中央公論社
 - 51 K・ポランニー、玉野井芳郎訳 1980「人間の経済 I・II」I 市場経済の虚構性 II 交易・貨幣及び市場の出現 岩波現代選書 岩波書店
 - 52 鹿毛敏夫 2001「文献・絵図からみた大友館と府内の町 ～都市と国際性～」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会
 - 53 徳川家康により1604年に再開される朱印船貿易は、若干の市場経済性を残すもので、この時期にも日本各地に「唐人町」が形成されたものと考えられる。江戸幕府の対外政策は、その後、奉書船貿易に受け継がれ管理交易性を強めてゆくが、その管理体制の極まったものが「鎖国」であり、平戸・長崎の「商館」体制であり、最終形態としての「出島」体制であると指摘できよう。「鎖国」体制の完成後、各地の唐人町は廃れ、或いは完全に同化し、純粋な意味で唐人の住む町ではなくなり、次代に形骸化していったものと思われる。
 - 54 O・シュペングラー 1976「西洋の没落」五月書房
- 本来は、「都市」の「農村」に対する主導性・先進性を示すと同時に、先進性が権力のもとに生ずるものであるという事実を述べるものである。この先進性は、即、政治権力或いは経済権力と結び付けて考えられることが多く、歴史というものは、権力側から築かれるという指摘に繋がるものである。この視点に立てば、旧豊後国の政權都市たる府内の歴史は、豊後国或いは大友氏の歴史を物語るにあたって最重要な部分となる。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおともふない
書 名	大友府内6
副 書 名	中世府内町跡第14次調査の発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ーズ 名	大友府内
シリーズ番号	6
編 著 者	池邇 千太郎・上野 淳也
編 集 機 関	大分市教育委員会
所 在 地	〒870-0046 大分市荷揚町2番31号 TEL(097)534-6111
発 行 年 月 日	西暦 2003 年3月31日

ふ り が な		コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所 収 遺 跡 名	所 在 地	市 町 村	遺跡番号					
ちゅうせいふないまちあと 中世府内町跡第14次調査	大分県大分市 顕徳町3丁目	大分市	322051	33° 13'53"	131° 37'6"	2001.4.23～ 2001.10.18	125m ²	マンション建設

所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
中世府内町跡第14次調査	包蔵地ほか	戦国時代	土坑・井戸跡・ピット	陶磁器類 瓦・ガラス製品	

大友府内6

中世大友府内町跡第14次発掘調査報告書

平成 15年 3月 31日

発行／大分市教育委員会

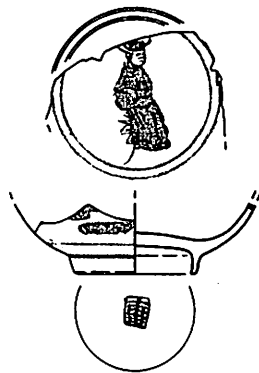
大分市荷揚町2番31号

印刷／いづみ印刷株式会社

大分市大字下郡字丁畑3119-1

Excavation Reports
on
the Ruins of Medieval Funai
Volume VI

An excavation report
on the 14th survey of Medieval Funai



March 2003
by
Oita City Board of Education